

ムシオイガイ *Chamalycaeus nipponensis* (Reinhardt)

【選定理由】

本種はムシオイガイ類 (亜科) としてはやや大型の種で、関東地方から伊豆諸島に分布する (東, 1982)。愛知県下でも現在、渥美半島基部の海岸よりの丘陵地の狭い範囲と東三河山間部 (守谷, 2004) に分布することが確認されている。

ムシオイガイ属貝類の分類は全て殻、蓋の形態に基づいて行われてきたが、ようやく近年、殻の微細構造や雄性生殖器の比較 (Páll-Gergely & Asami, 2017)、DNA 解析等による検討が行われるようになった。

県下の上述した産地の個体群は、殻、蓋の形態ではムシオイガイに同定され、本種の現時点での分布域の西限と思われる個体群である。

また本種の分布の西端であるためか、県下では生息地点が少なく、かつ生息面積が非常に小さい。加えて、渥美半島の生息地は市街地に近いことなどから、個体群の生息基盤も脆弱である。

【形態】

殻径約 4 mm で、小型で低い円錐形。殻は殻頂部付近で赤みがやや強く、その他は淡黄白色。殻表の成長脈は強く、殻口の背部でやや強くくびれ、その周辺から縫合沿いに虫のような形態の呼吸管が伸びる。臍穴は広く開き深い。蓋は円形で薄い角質である。

【分布の概要】

日本固有種。関東地方から伊豆諸島に分布する (東, 1982)。県下での分布は【選定理由】を参照。

【生息地の環境／生態的特性】

湿度の保たれた照葉樹林内の落葉下の土壌表面に生息する。生態的特性はほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息地点数は少なく、生息面積も小さい。生息地の乾燥化が進行している場所では個体数が著しく減少する。

【保全上の留意点】

前述した生息環境を保全する事が最も重要である。また継続的なモニタリングも必要である。

【特記事項】

県下からムシオイガイ属貝類として、本種の他にハリマムシオイ *Chamalycaeus harimensis* (Pilsbry) (野々部・他, 1984)、ピルスブリムシオイ *C. pilsbryi* (Kobelt) (守谷, 2004) が記録されているが、情報不足で現状は不明である。Páll-Gergely & Asami (2017) に従えば、胎殻に明瞭な螺旋を有する本種は *Metalycaeus* に属するが、現時点では従来の属のままとした。

【引用文献】

- 東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑. XV+333pp. (incl.64pls.). 保育社, 大阪.
川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊, 2012. 矢作川上中流域の河畔林に生息する陸産貝類. 矢作川研究, 16: 11-26.
湊 宏, 1988. 日本陸産貝類総目録, p.32. 日本陸産貝類総目録刊行会.
守谷茂樹, 2004. ピルスブリムシオイを愛知県で確認. かきつばた, (29): 41.
野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 愛知の動物, p.23-40. 愛知県郷土資料刊行会.
Páll-Gergely, B. & Asami, T. 2017. A new species of *Metalycaeus* hitherto undistinguished from *M. vinctus* (Pilsbry, 1902) (Gastropoda: Cyclophoroidea: Alycaecidae). *Venus* 75 (1-4): 1-16.

(木村昭一)



豊橋市細谷町, 1996年6月23日, 木村昭一採集

イボイボナメクジ *Granulilimax fuscicornis* Minato

【選定理由】

近年の温暖化傾向や開発等のための森林伐採に伴う林床の乾燥化など、森林環境の悪化の影響を受けやすい種である。生息個体数は少なく、1日調査を行っても確認できない場合が多い。通常、1調査で10個体以上を確認しないきわめて希少な種である。愛知県内には複数種が存在すると思われるが、発見自体が稀なために、分類学的研究が遅れている。分類学上の重要性も高く、貴重な種群である。将来的な絶滅の危険性を考慮すべき種である。

【形態】

殻を持たないナメクジ状軟体動物であり、通常ナメクジと認識されている柄眼目のナメクジ類とは分類学上の系統が異なる。生時の伸長時体長は14.5~17.5 mm程度であるが、個体差が大きい。背面の体表には顆粒状の微小突起が多数見られ、特に休止時には明瞭である。色彩は淡黄褐色で、明瞭な細い黒褐色の輪状の模様が背面周囲を囲む。背面の正中には、ぼやけた縦帯が見られる。呼吸孔、肛門、雌性生殖開口は、全て右体側前方の足溝内のまとまった狭い範囲に集まって位置している。雌雄の生殖開口部は別々に位置する。雄性器官には陰茎腺後端に著しく長い鞭状部を有している。歯舌は中歯を有せず、単歯尖で牙状の歯舌歯が左右に複数並び、V字状配列する（早瀬・他, 2018）。



1: 田原市白谷, 2009年3月21日, 2: 瀬戸市定光寺町, 2007年5月2日, 早瀬善正採集

【分布の概要】

【県内の分布】

瀬戸市、新城市、豊橋市、田原市などで確認されている。内陸部の森林から海岸近くの林に至る広域の森林環境で確認される。愛知県内（石巻山）には、黒色の別種も存在する（河辺訓受氏 私信）。

【世界および国内の分布】

本科の種は、オーストラリア、東南アジア、中国にかけて分布するが、本種は日本固有種である。本州から琉球列島まで広く分布するとされているが、多数の未記載種が混同されており、正確には、本種は、本州、四国の固有種であろう。

【生息地の環境／生態的特性】

他の陸産貝類が多数生息する良好な森林環境に生息する。本種は陸産貝類のみを捕食する肉食性種である（早瀬, 2002）。5月末頃から産卵が確認され、卵径1.5 mmの球状の卵を産出する。1個体が少数の卵を産出する。産卵後、3週間ほどで孵化し、孵化後の幼体も陸貝を捕食する（早瀬, 2008）。

【現在の生息状況／減少の要因】

自然林やそれに隣接するスギ植林など、湿潤で良好な森林環境に生息する。生息個体数が少なく、現状としても多産地はない。本種は、陸産貝類の捕食者であり、陸産貝類の多数生息する森林環境ならば、標高や植生などの変化に影響されず生息するので、適応範囲の広い種であろうと思われる。しかし、近年の急激な気候変動に伴う乾燥化など森林環境の悪化や捕食対象となる他の陸産貝類の減少傾向が、本種の個体群存続を脅かしている可能性が強く考えられる。

【保全上の留意点】

稀産であり、再発見できない場合も多く、個体の保護よりも生息地域の森林環境の維持と保全に重点を置く必要がある。

【特記事項】

本種は、ナメクジ科の種として記載されたが、記載時の解剖図には口球を陰茎と誤認するなど誤りが多数見られ、ナメクジ科と考える根拠が間違いであった。本種の歯舌形状などはホソアシヒダナメクジ科に共通の特徴を示し、同科に位置付けられる（早瀬・他, 2018）。色彩の異なる別種も県内に存在するが、岐阜県内で得られた同種あるいは近縁種と考えられる黒色小形の種の解剖結果（早瀬, 未発表）に従えば、おそらく別属の種であり、分類学的検討が遅れている状況では、この様な近縁種の方がむしろ稀産で、より重要な種の場合も多い。したがって、黒色の未記載種などに関しても、現時点で本種と同ランクの種として扱う必要がある。

【引用文献】

早瀬善正, 2002. ホソアシヒダナメクジ科2種の捕食行動, かきつばた, (28): 6-10.

早瀬善正, 2008. イボイボナメクジの卵と孵化の記録, かきつばた, (33): 47-48.

早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・矢橋 真・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2018. 冠山山頂部周辺（岐阜県側）の陸産貝類相, かきつばた, (43): 1-27.

【関連文献】

湊 宏, 1989. 日本産ナメクジ科の新属新種, イボイボナメクジの記載, Venus, 48(4): 255-258.

Kurozumi, T., 1985. Evidens of slug predation on land snail eggs, Applied Entomology and Zoology, 20(4): 490-491.

（早瀬善正）

ナガオカモノアラガイ *Oxyloma hirasei* (Pilsbry)

【選定理由】

水田周辺の土手や水路脇草地、休耕田や湿地の草地などに普通に見られる種(野々部・他, 1984)であったが、愛知県下では、水田環境自体の減少や、近年の雑草などの殆ど生えない整備された水田、農業方法の変化に伴う乾田化、休耕田や湿地などの草地の減少により、分布域の減少傾向が著しい種である。名古屋市では近年の調査において、本種が発見されていない(川瀬, 2013)。かつて生息していた水田に見られなくなるなど、名古屋市を中心とする地域から開発などにより、徐々に姿を消しつつある種である。ただし、岡崎市、蒲郡市などでは近年も個体群が健在な地域もあり、現時点の愛知県下では、直ちに絶滅に向うほどの状況にはないと考えられる。全国的にも減少傾向が懸念される種であり、愛知県下では都市部を中心に減少傾向にあることから、今後の絶滅の危険性を考慮すべき種と考えられる。

【形態】

成貝は、殻長 11.8~14.4 mm、殻径 6.9~7.3 mm 程度の細長い楕円形状の外形をした小形種である。殻はきわめて薄く脆く、螺塔がごく小さく、殻長の殆どを体層が占める。殻口は広く、成熟しても唇縁は薄いままで肥厚しない。臍孔は生じない。殻表は淡黄褐色の殻皮が覆い、成長脈が認められる程度で目立つ彫刻はなく、ほぼ平滑で弱い光沢を有す。軟体は粘液に富み、腹足は淡黄白色で、眼触角は黒い。



蒲郡市西田川河畔, 2005年4月13日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県内各地の平野部の水田周辺や水路周辺などの湿地環境の草地に生息するが、生息地はそれ程多くはなく、名古屋市では消滅寸前の状態である。西三河~東三河にかけての平野部の水辺周りには、現時点でも個体群が健在な環境が存在している。

【世界および国内の分布】

韓国に分布が知られる(権・他, 1993)。国内では、本州(主に関東以西)、四国、九州に分布する(東, 1995; 神田, 1992; 西・西, 2018; 財団法人 自然環境研究センター, 2010)。北海道の分布記録については、ミヤマオカモノアラガイ *Succinea* sp. とされる種の存在もあり(柴原・多留, 2012)、正確に本種の記録であるのか、定かでない。

【生息地の環境/生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、水田周辺や小河川・水路周辺の主に雑草地である。小水路の壁面に付着する個体も良く確認される。本種の生態として、静岡県中部の個体の研究結果(早瀬, 2008)においては、産卵は4月と8月頃に2回のピークがあると考えられ、春型(春季新規加入群)と夏型(夏季新規加入群)は、それぞれ寿命が約半年と1年で異なる生活史を送る。夏型は冬に休眠するため、殻に明瞭な休止帯を有し、春型とは殻形態が異なる。卵は各卵が分離しているが1箇所にまとめて塊状に産卵される。卵径は約 0.8 mm の球形でゼリー状、産卵後2週間程度で孵化する。

8月頃の産卵には、産卵日のばらつきとその後の稚貝の成長速度の差が著しいことが推察され、越冬時の幼貝の殻の大きさには、きわめて小形の個体から、ほぼ成貝に近い大きさの個体までの変異幅が著しい。

【現在の生息状況/減少の要因】

犬山市焼野の水田で本種を確認(1993.6.1採取の夏型個体の標本)していたが、その数年後には確認出来ないなど、既に個体群が消滅している場所も少なくない。名古屋市内をはじめ、周辺都市部にかけては同様の状況にあると思われる。ただし、現在も岡崎市や蒲郡市では、水質の良くない小河川周辺でも確認される(木村昭一, 私信)など、尾張部と比べて西三河~東三河にかけての平野部の水辺環境では、現時点においても、本種個体群の健在な生息地が確認される状況にある。

本種の減少要因としては、愛知県下では、水田自体の減少や、近年の雑草などが殆ど見られない整備された水田、近年の農業方法の変化に伴う乾田化、開発や整地に伴う休耕田や湿地環境に代表される荒地や雑草地の減少、などの本種の生息環境の著しい減少が指摘できる。

【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される地域の湿地環境を維持することが重要である。本種は、夏季に個体数を増大させる生態的特徴があり、夏季の大型個体(春型)は、水路などを經由して様々な場所に拡散して秋までに全て死滅する。したがって、秋~冬に本種の幼貝(夏型)が越冬できる湿地環境が本種にとって最も重要な湿地環境となるので、そのような環境を開発などにより破壊しないことが最も重要である。

【特記事項】

環境の保全や周辺生物に配慮した農法を実践する水田においては、本種の著しい個体数が確認される例を観察している。本来、本種は古くから見られる里山環境においては普通種であるので、本種の保護に関しては、かつての水田環境の復元地域を試験的に設けることも、保護手法のひとつになると考えられる。ヒラマキガイ科の絶滅危惧種の一部の種の保護にも該当する内容と考えられる。

【引用文献】

- 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版, xvi + 80 pls. + 343 pp. 保育社, 大阪.
早瀬善正, 2008. 静岡市清水区能島遊水池におけるナガオカモノアラガイの生活史, 兵庫陸水生物, (60): 151-157.
権 佐吉・朴 甲萬・李 俊相, 1993. 原色韓国貝類図鑑, 445pp. Academy Publishing Company, Seoul.
神田正人, 1992. 大分県陸産貝類誌, 160 pp. 自刊.
川瀬基弘(監修), 2013. なごや生きものの一斉調査 2012・陸貝編 - なごやで探そう! カタツムリ -, 29 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
柴原康裕・多留聖典, 2012. 2011年度軟体動物多様性学会例会観察会(北海道)報告(前編), Molluscan Diversity, 3 (2): 121-133.
西 邦雄・西 浩孝, 2018. 宮崎県のカタツムリ, 149 pp. 自刊(黒潮出版), 宮崎.
野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
財団法人 自然環境研究センター, 2010. ナガオカモノアラガイ, p.814. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

【関連文献】

環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)

キセルガイモドキ *Mirus reinianus* (Kobelt)

【選定理由】

本種は本州から四国、九州に広く分布するためか、分布域の狭い種が多い陸産貝類においては、あまり注目されない種であり、環境省のレッドデータブックにも掲載されていない。しかし、古くから各地域型(亜種)も知られており、また形態や生態においても地域ごとに差異が認められ、分類学的な再検討が必要な種である。従って、県単位と言うような地域ごとの個体群の保全もないがしろにはできない。本種は、愛知県内では山地を中心に分布するが、生息地は元々少なく(野々部ほか, 1984)、生息域も分断している。また生息地における個体数も概して非常に少なく、かつて多産地として著名であった豊橋市の石灰岩地である石巻山においても、著しい減少傾向が確認されている。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長 25–32 mm 程度、殻は細長く、螺塔は高く、螺層数 7–9 層、外見が近似するキセルガイ科貝類とは異なり右巻き。成長脈は弱く、殻表には微細な隆起があり、弱い光沢がある。外唇は肥厚し白色で光沢が強い。若い個体の殻は淡茶褐色で、老成個体では殻皮は脱落し、灰白色になる。県内でも産地によって殻の大きさには変異が認められる。石巻山産個体は概して大型になり殻質も厚く、殻口も厚く肥厚する。



豊橋市石巻山, 1982年9月26日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内の分布域は広いが生息地は少なく、古くから石巻山、嵩山、越戸、鳳来寺山、定光寺などが知られている(野々部ほか, 1984)。また東三河山間部(木村・中根, 1966)から豊橋市にかけて生息が確認されているが、生息地は少なく、生息面積も小さい。平野部での生息は確認されていない。

【世界および国内の分布】

日本固有種。本州、四国、九州に広く分布する。地域により貝殻形態や生態等に差異が認められる。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は山地の自然林内の落ち葉や朽ち木の下、石灰岩地の石の下などに生息する。愛知県産の個体は石灰岩の壁などに付着する事はあるが、樹幹にはほとんど登らない。和歌山県南部、高知県の個体群は、愛知県産と比べると小型で、樹上に高く登ることも多い。卵生であることは知られているが、生活史等についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。減少の要因としては、近年の夏季の高温化に伴う森林環境の乾燥化、開発による生息環境の消失などが考えられる。石巻山の個体群は、伊勢湾台風以降他の陸産貝類と共に減少傾向が指摘されているが(野々部ほか, 1984)、2000年代初めと比べても本種の近年の減少傾向が著しい。石巻山における近年の減少傾向についての原因は不明である。

【保全上の留意点】

上述した生息環境の保全が必要である。

【特記事項】

環境省のレッドデータブックには掲載されていないが、福岡県(2014)では絶滅危惧Ⅱ類、その他10以上の都道府県版レッドデータブックに掲載されている。

【引用文献】

福岡県, 2014. 福岡県の希少野生生物, 276pp.
木村昭一・中根吉夫, 1996. 第5章 軟体動物, pp.119–126.in: 稲武町史 - 自然 資料編, 380pp. 稲武町教育委員会, 稲武町.
野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23–40.in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325 pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

【関連文献】

東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, 343pp. 保育社, 大阪.
財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(木村昭一)

ヒラドマルナタネ *Pupisoma harpula* Reinhardt

【選定理由】

愛知県下各地で確認されているが、生貝の確認記録が少ない。微小種である上に樹幹に付着するので認識されない場合が多いと考えられるが、それを考慮しても愛知県下では産出例の少ない種である。もともと生息数が少ないので減少傾向は不明であるが、愛知県下では、希少な種であり、主な生息環境である里山や森林環境の開発に伴い、将来的に絶滅の危険性を考慮すべき種と判断される。

【形態】

成貝は、殻長 1.7 mm、殻径 1.5 mm 程度の丸みを帯びたきわめて薄い殻を有する微小種である。臍孔は狭いが深く明瞭に開口する。殻表は、茶褐色の殻皮で覆われる。類似するマルナタネは、臍孔が塞がれ開口しない特徴により容易に識別が可能である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東三河山間部や西三河の矢作川流域の河畔林などに主な分布記録が知られる(守谷, 2004; 川瀬・他, 2012)。

【世界および国内の分布】

日本固有種と思われ、本州(中部以西)・四国・九州に分布する(東, 1995; 財団法人 自然環境研究センター, 2010)。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の生貝が確認された環境は、主に風通しが良く明るい神社境内の落葉樹(エノキ・オニグルミ)の古木の樹幹で、樹幹には蘚類や地衣類が付着しているとされる(守谷, 2004)。また、同じ木の樹幹に類似種のマルナタネが生息している場合も少なくない。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、確認例自体がきわめて少なく、減少傾向が確認されていないが、生息場所は限られた樹木なので、きわめて狭く局所的であり、周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される地域の自然環境を維持し、樹木を伐採しないことが重要である。特に社寺林に残る本種の生息する古木を伐採しないことや、本種が確認される自然環境を開発しないことが最も重要である。

【特記事項】

常に樹幹に付着して生活しているため、晴天が続く期間は、樹幹に強固に付着し、そのまま長期間を休眠状態で耐えることが可能である。したがって、他の陸産貝類に比べて、神社境内の様な薄日の差す開放的な環境でも、古くから残る本種が好む樹種の古木 1 本があれば、その木の樹幹のみで個体群を維持することが可能である。

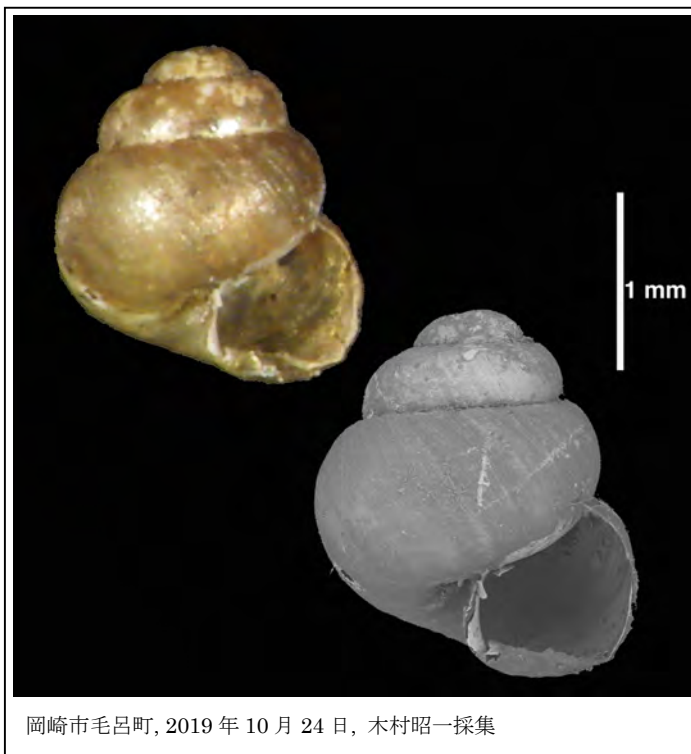
【引用文献】

- 東 正雄, 1995 原色日本陸産貝類図鑑増補改訂版, xvi+ 80 pls.+ 343 pp. 保育社, 大阪.
川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊, 2012. 矢作川上中流域の河畔林に生息する陸産貝類, 矢作川研究, (16): 11-26.
守谷茂樹, 2004. 愛知県と岐阜県で確認したヒラドマルナタネガイ, かきつばた, (29): 36-37.
財団法人 自然環境研究センター, 2010. ヒラドマルナタネ, p.822. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

【関連文献】

- 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚 (編), 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

(早瀬善正)



オクガタギセル *Megalophaedusa dorcas* (Pilsbry)

【選定理由】

「愛知県の陸貝相」(天野, 1966)に「ドルカキセル? 三河小馬山」と記録され、天野氏の死後、小馬山の位置が不明で不明種とされていたが、豊田市(旧旭町)駒山小馬寺と判明した。その後、豊根、段戸山、稲武、面ノ木、和市、新城市(旧鳳来町)名号と生息地が発見されたが、近年の自然林の減少に伴い急速に生息地を減少させている。

【形態】

殻はやや細長く、殻高 35 mm、殻径 6.5 mm、11 1/2 層、主襞は長い、上腔襞より下腔襞はわずかに短い。殻表に線状があり、殻口はやや広い。



左: 豊根村三沢, 1989年5月5日, 右: 設楽町段戸山裏谷, 2005年10月21日, 木村昭一採集

【分布の概要】

県内では前述のように北設山岳地帯に点々と分布する。県外では石川県白山から関東の山岳地帯に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

山地の沢や河川の岸など湿度の高い落葉下に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

新城市(旧鳳来町)名号では道路拡張工事で絶滅したものと考えられ、他の産地でも著しく減少している。

【保全上の留意点】

生息確認地を中心とした樹林や沢筋の保全に留意する。また、採取の防止に努める。

【特記事項】

県内は本種の分布南限に当たる。

【関連文献】

- 天野景従, 1966. 愛知県の陸貝相. 東海高校研究紀要 4: 6.
 豊根の動物調査委員会, 1980. 貝類. 愛知県豊根村の動物, p.116. 豊根村.
 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 愛知の動物, p.29. 愛知県郷土資料刊行会.
 三河野生動物研究会, 1993. 鳳来町のオクガタギセルガイ. 三河の野生生物 No.2.
 木村昭一・中根吉夫, 1996. 稲武町の軟体動物. 稲武町史・自然・資料篇, pp.119-126. 稲武町.
 中根吉夫・木村昭一, 1996. 設楽町の軟体動物. 設楽町誌『自然編』『資料編』, pp.225-234. 設楽町.
 名古屋貝類談話会, 1979. ご機げんいかが愛知の陸貝. 駒山の小馬寺. かきつばた, 5.
 名古屋貝類談話会, 1990. 東海地方の貝類現状調査報告書(17)駒山. かきつばた, 16.
 東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, p.69. 保育社.

(2009年版(原田)を一部修正)

ホソヤカギセル *Megalophaedusa hosayaka* (Pilsbry)

【選定理由】

本種は県内では県東部を分布の中心とする中型のキセルガイで、ミカワギセル *Stereophaedusa hickonis mikawa* (Pilsbry)とよく似た分布パターンを示す。山地から平野部まで点々と分布するが、愛知県内での分布域はミカワギセルほど平野部には進出していない。良く保全された寺社林や自然林内の落葉、朽木の下に生息していることが多い。本種の生息地は現在も少なくはないが、上述のような生息環境の減少は多くの生息地で認められる。近年行われた岡崎市内での調査(木村, 2014)では、旧岡崎市内での本種の分布状況の記録(山田, 1991)と比較して、かつての生息地で生息が確認できなかった例が少なくない。また豊橋市、三河山間地における産地、個体数とも減少傾向が認められる。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長 18–28 mm 程度、殻は非常に細長く、螺塔は高く、螺層数 7–10 層、左巻き(日本産本科の貝類は全て左巻き)。成長脈は弱く、殻表は平滑で光沢がある。主襞と 3–4 の腔襞がある。若い個体の殻は淡茶褐色の半透明で、光沢が強く、老成個体では殻皮は脱落し、灰白色になる。ほとんどの個体では老成しても殻頂部は欠損しない。産地によって殻の大きさには変異が認められる。



岡崎市田原坂, 2009年10月3日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内の分布域は比較的広く、北は長野県境付近の東三河山間部から岡崎市、西は旧豊田市、東及び南は豊橋市に分布する。

【世界および国内の分布】

日本固有種。静岡県西部、愛知県東部、三重県中部に分布し、タイプ産地は三重県鳥羽市である。近年、長野県の南部にも分布することが報告された(飯田市美術博物館, 2014)。ミカワギセルと同様、伊勢湾によって愛知県と三重県の分布が分断された分布パターンで、三重県側の分布域は志摩半島を中心とする。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は、谷沿いや池の周辺など湿潤な環境に生息するミカワギセルと比べるとやや乾燥した環境にも見られるが、良く保全された自然林や寺社林内にある古い照葉樹林、古い杉の植林内の湿度の高い朽ち木の下などに多く生息する。シイタケ栽培のホダ木の捨て場など、ある程度の湿度が保たれた林内の有機質が多い場所では個体数が多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。減少の要因としては、近年の夏季の高温化に伴う森林環境の乾燥化、開発による生息環境の消失などが考えられる。シイタケ栽培のホダ木の捨て場など、里山的な環境の減少も一因としてあげられる。

【保全上の留意点】

上述した生息環境の保全が必要である。

【特記事項】

種小名の誤綴りの修正に伴いエンシュウギセルという和名が提唱され、以前の環境省レッドリストなどには、その和名で掲載されている(財団法人自然環境研究センター, 2010)。しかし、学名と標準和名とが連動する必要性は無く、本書では古くから広く流布しているホソヤカギセルで表記する。

【引用文献】

- 飯田市美術博物館, 2014. 長野県産陸生・淡水生貝類 飯島國昭コレクション(飯田市美術博物館自然資料目録第2集), 147pp. 飯田市美術博物館, 飯田市.
木村昭一, 2014. ホソヤカギセル, p.327, in: 岡崎市(編), 岡崎市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックおかげさき 2014, 362pp. 岡崎市.
山田栄蔵, 1991. 岡崎市内の陸産貝類について, かきつばた, (17): 5–7.
財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

【関連文献】

- 東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, 343pp. 保育社, 大阪.
野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23–40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325 pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
湊 宏, 1994. 日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究, 日本貝類学会.
増田 修・波部忠重, 1989. 静岡県陸産淡水産貝類相, 74pp. 東海大学自然史博物館.
松本幸雄, 1979. 三重の貝類(三重県産貝類目録), 179pp. 鳥羽水族館, 鳥羽.

(木村昭一)

ハチノコギセル *Megalophaedusa kawasakii* (Koroda)

【選定理由】

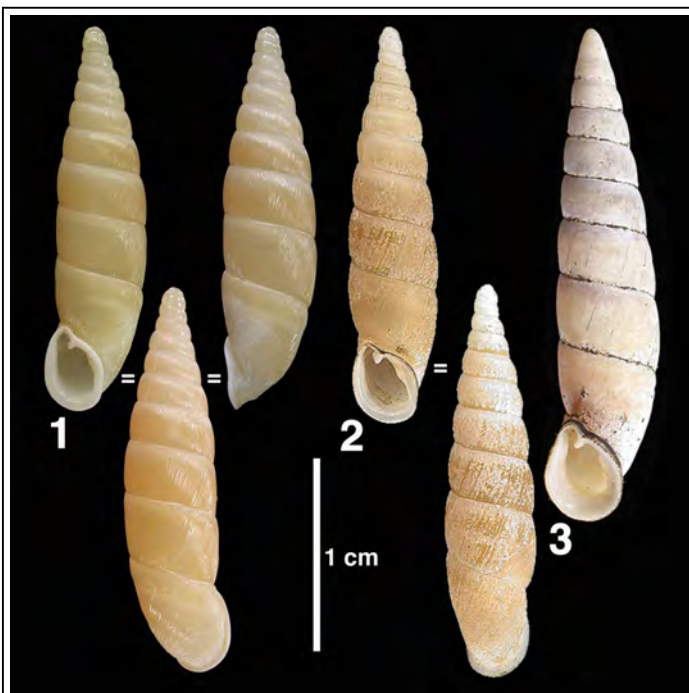
愛知県豊橋市石巻山、嵩山を模式産地とするキセルガイで、その個体数も著しく減少傾向にある。

【形態】

殻は中形で殻高 20 mm 内外、殻径 5 mm、螺層 11、重厚堅固不透明の殻質で、帯黄白色の薄い殻皮は蝕害されていない場合が多い。殻は円筒状のずんぐりした紡錘形で、螺頂部は急に細くなる。

【分布の概要】

石巻山、嵩山の特産種とされていたが、広く三河東部から静岡県西部に分布することが明らかになった。



1: 豊橋市石巻山, 1989年5月28日, 2,3: 岡崎市田原坂, 2009年7月17日, 木村昭一採集

【生息地の環境／生態的特性】

石灰岩地の礫間に生息するが、必ずしも石灰岩地のみではない。岩礫地の落葉下を好むが、余り群れを作らない。

【現在の生息状況／減少の要因】

石巻山、嵩山を始めとしてその分布地では、もともと稀産種であった上、ここ数年の乾燥化傾向で稀産の度を高めている。

【保全上の留意点】

生息確認地を中心とした樹林や岩礫地の保全に留意する。また、採取の防止に努める。

【特記事項】

愛知県を模式産地とするキセルガイの 1 種であるとともに、名古屋の故川崎義令氏の発見した貝でもある。ツメギセルガイ東海道型との類縁関係が論議されているが、ツメギセルガイの方は殻頂部がハチノコギセルよりやや細い傾向がある。環境省では準絶滅危惧種にランクされている。

【関連文献】

柴田吉夫, 1995. 北設山岳県立公園一帯の自然科学. 北設山岳県立公園及びその付近の陸産貝類, p.81. 愛知県商工部通商観光課・北設山岳県立公園地区協議会・鳳来寺山県立公園地区協議会.

吉田博士祝賀記念誌論文篇, 1939. 三河石巻山嵩山(スセ)の陸貝相, pp.675-677.

天野景従, 1966. 愛知県の陸貝相. 東海高校研究紀要 4: 6.

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物, p.151.

野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 愛知の動物, p.28. 愛知県郷土資料刊行会.

増田 修・波部忠重, 1989. 静岡県陸産淡水産貝類相, pp.30-34. 東海大学自然史博物館

鳳来寺山自然科学博物館, 1973. 鳳来寺山 - 自然と文化 - 鳳来寺山の陸貝, p.84.

中根吉夫・木村昭一, 1996. 設楽町の軟体動物. 設楽町誌『自然編』『資料編』, pp.225-234. 設楽町.

東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, p.63. 保育社.

(2009年版(原田)を一部修正)

ミカワギセル *Stereophaedusa hickonis mikawa* (Pilsbry)

【選定理由】

本種は三重県中部、愛知県東部、静岡県西部に分布する中型のキセルガイで、西尾市三ヶ根山を模式産地とする。原名亜種のコンボウギセルとは殻が小型であること、強い縦肋が発達することなどで区別される。山地から平野部まで点々と分布するが、寺社林や谷沿いの自然林内の落葉、朽木や礫の下に生息していることが多い。産地による貝殻の変異が大きく、愛知県内でも数タイプに分けることができる。模式産地の三ヶ根山では自然林の伐採によって、嵩山の石灰岩地では乾燥化によって個体数が著しく減少している。本種の生息地は現在も少なくはないが、上述のような生息状況の悪化は多くの生息地で認められる。

【形態】

殻高 15~23 mm 程度で産地によって変異が大きい。殻は細長く、螺層数 7~9 層。成長脈が強い縦肋に発達する。主襲と 3~4 の腔襲がある。



1: 蒲郡市西浦町, 1989年3月1日, 2: 豊橋市嵩山町, 2006年9月20日, 3: 西尾市吉良町, 1988年12月4日, 4, 5: 岡崎市小呂町, 2011年1月15日, 木村昭一採集

【分布の概要】

県内では渥美半島、西尾市より東の三河部に分布し、北限は面ノ木峠周辺である。県外では三重県中部、静岡県西部に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

【選定理由】の項参照。

【保全上の留意点】

自然林の伐採等生息環境の改変を防止することが重要である。

【関連文献】

- 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 愛知の動物, p.30. 愛知県郷土資料刊行会.
湊 宏, 1994. 日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究, pp.187-188. 日本貝類学会.
東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, pp.89-90. 保育社.

(2009年版(原田)を一部修正)

タカキビ *Coneuplecta praealta* (Pilsbry)

【選定理由】

愛知県下では広く確認されているものの、生息数は少なく、発見自体も稀な種である。これまではウラウズタカキビが本種中に混同されていたが、明らかな別種であることが報告され、本種は従来の知見よりもさらに分布及び生息密度の低い種と判明した。本種は、主に山麓部や低山地の里山環境に生息するので、開発などによる生息環境および本種の減少が懸念される。

【形態】

殻長 4 mm 程度の微小種である。螺層数がきわめて多く、高円錐状の特徴的な殻形態であり、他種との識別が比較的容易な種である。細い円錐形とやや太い円錐形の 2 タイプがあり、繁殖生態型 (Euphally と Hemiphally の 2 型) と考えられている (早瀬, 2018)。Euphally の個体の雄性器官では、陰茎が一様の太さで長く、それを一様の太さの陰茎鞘が包む。Hemiphally の個体の雄性器官は委縮し小さくなる (上島, 1995)。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市 (川瀬・他, 2011; 2012)、新城市 (川瀬, 2014) などの分布記録が見られる。瀬戸市 (早瀬, 2008) や豊田市稲武町 (守谷, 2004) の記録は、ウラウズタカキビの誤認記録であった (早瀬, 2018)。

【世界および国内の分布】

国内のみに分布が知られ、本州 (関東以西)、九州に広く分布する。四国にはサドタカキビの記録がある。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は、林床の落葉上のほか、低木の葉裏に付着する個体が確認される場合が多く、特に幼貝ではその傾向が強い。薄暗く湿潤な森林環境下のアオキ類など常緑低木の葉裏で確認される。本種は 1 世代の寿命が 1 年程度の貝類で、特定の季節 (春～夏季) のみ成貝になると考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種は、山麓部や低山地の里山環境に多く見られる種である。このような場所は、開発により消失しやすい環境であることから、本種の生息環境も愛知県では減少傾向にあると考えられる。

【保全上の留意点】

本種の生息環境となる谷部などの薄暗く湿潤な森林環境の維持が必要である。

【特記事項】

生貝の発見がきわめて稀なので、愛知県内の個体に関しても類似種のウラウズタカキビと共に分類学的研究が遅れている。やや太い円錐形の殻の個体は、サドタカキビのタイプ標本の形状とほぼ一致するので、サドタカキビはタカキビの Hemiphally 型に過ぎず、異名と考えられる (早瀬, 2018)。また、熊本県や山口県のツシマナガキビ (熊本県希少野生動植物検討委員会, 2009; 西・潮崎, 2017; 矢野, 2019) とされる個体は、細い円錐形の殻であることから、対馬固有種と考えられるより細く長い殻を有するツシマナガキビではなく、Euphally 型のタカキビの誤認と考えられる。このように、ウラウズタカキビを含めて類似する殻形態の種が複数存在し、殻形態のみに頼る本種の同定はきわめて不確実性が高いので、正確な種レベルでの分類には生殖器の検討が不可欠である。

【引用文献】

- 早瀬善正, 2008. 愛知県瀬戸市定光寺周辺における陸産貝類相調査, かきつばた, (33): 29-39.
 早瀬善正, 2018. 東海地方で確認されたウラウズタカキビ, かきつばた, (43): 35-37.
 川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物, pp.1-24. in: 鳳来寺山自然科学博物館(編), 新城市の自然誌 昆虫・動物編, 335 pp. 鳳来寺山自然科学博物館, 新城市.
 川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類, 豊田市自然史博物館研究報告, (21): 31-43.
 川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊, 2012. 矢作川上中流域の河畔林に生息する陸産貝類, 矢作川研究, (16): 11-26.
 熊本県希少野生動植物検討委員会 (編著), 2009. 改訂・熊本県の保護上重要な野生動植物-レッドデータブックくまもと 2009-. 597 pp. 熊本県環境生活部自然保護課, 熊本.
 守谷茂樹, 2004. 愛知県初記録の陸貝 2 種, かきつばた, (30): 21-22.
 西 邦雄・潮崎正浩, 2017. ツシマナガキビの新産地 (熊本県), 九州の貝, (89): 21.
 上島 励, 1995. タカキビの分類学的位置, Venus, 54(2): 113-122.
 矢野重文, 2019. ツシマナガキビ, p. 473. in: 山口県環境生活部自然環境課(編), レッドデータブックやまぐち 2019 山口県の絶滅のおそれのある野生生物, 986 pp. 山口県環境生活部自然環境課, 山口.

【関連文献】

- 財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(早瀬善正)



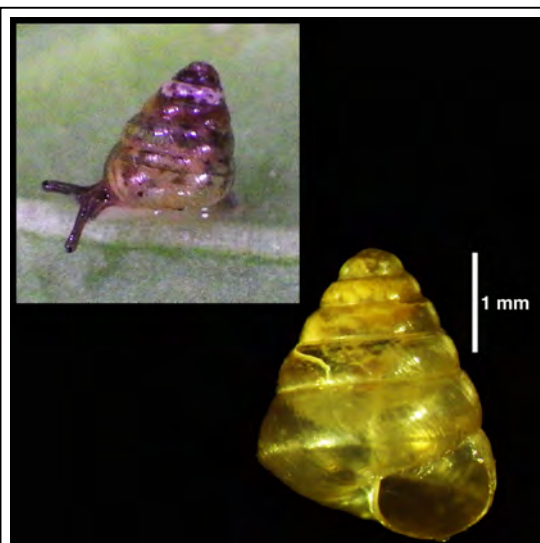
ウラウズタカキビ *Coneuplecta* sp.

【選定理由】

これまでタカキビの幼貝などに混同されてきた種である。したがって、今回新たにタカキビと同等のランクに位置付けられる。愛知県下では、近年存在が知られたばかりで(早瀬, 2018)、過去の分布記録はない。分布域は広いが、生息密度や生息地はそれ程多くないと考えられる。全国レベルでの判断基準となる環境省レッドリスト 2019では、いまだ未検討でランク外の種である。しかし、愛知県下では、本種の主な分布地である里山的環境での開発の影響による減少が懸念され、将来的に絶滅の危険性を考慮すべき種と判断される。

【形態】

成貝の最大個体が殻長 2.5 mm、殻径 2.1 mm 程度の丸みを帯びた円錐形(塔形)の微小種である。成貝は近似するタカキビの成貝より遥かに小形である。殻はきわめて薄く、各螺層にはごく弱い成長脈がみられる程度で、ほぼ平滑で光沢が強い。幼時には殻の周縁にごく弱い角を有するが、タカキビの様にキール状とはならない。成貝の体層周縁はやや角張るものの円みが強い。殻表は、きわめて薄い殻皮により半透明な黄白色を呈する。臍孔はきわめて狭く小さい。軟体は淡黄白色で、眼触角と口触角および腹足背面は淡黒色となり、口球の薄紅色が頭部に透過され視認できる。殻を透過して、外套膜には、黒色の雲状斑が確認できる。



岡崎市岡崎市真福寺町, 2017年7月2日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

現時点では、瀬戸市(川平町)、岡崎市(真福寺町)、豊田市(稲武町)より散見的生息記録が知られる(早瀬, 2018)。

【世界および国内の分布】

日本固有種と考えられる。日本国内に広く分布すると考えられるが、現時点では、静岡県、愛知県、三重県(早瀬, 2018)と宮崎県(西・西, 2018)、沖縄県(上島・久保, 2017)にのみ明確な分布記録が知られる。

【生息地の環境／生態的特性】

低山地などの山深くない里山的環境で確認される。小河川や沢に面したスギ植林などの明るい林の、アオキ類などの常緑低木やアジサイ類の葉裏などに付着している個体を確認されることが多い。同時にマルシタラも多く確認されるので、両種は同様の生態と推測される。殻が若干小形である5月頃には既に性成熟しており、本種の発見機会の多い5~7月にかけては繁殖期で、殻の大きさが最大になる7月頃には産卵を終え死滅する1年生の種と推測されている(早瀬, 2018)。主に低木や草本の葉裏に付いて一生の大半を生活していると考えられる樹上性種である。食性については植物食で、草本の若葉や常緑樹の葉裏に着生するカビ類などを食べて生活していると推測される。

【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、瀬戸市(川平町)、岡崎市(真福寺町)、豊田市(稲武町)で生息確認されたのみである(早瀬, 2018)。しかし、確認し易い大きさとなる時期が数ヶ月に限られることやタカキビとの混同が発見を困難にしている要因と考えられるので、さらに多くの環境に本種が点在している可能性は高いと思われる。最近、愛知県下での存在が確認されたばかりの種であり、減少傾向が確認されてはいないが、里山環境の開発や近年の異常気象が起因する森林環境の悪化による減少が懸念される。

【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが重要である。本種の生息する環境を開発しないことが最も重要である。

【特記事項】

沖縄県(沖縄島)での分布が、本種の初めての記録である(上島・久保, 2017)。これまで本種は、形態的類似によりタカキビの幼貝などと混同されてきたが、小形で成熟しており、雄性器官の形状も異なる(早瀬, 2018)ので、両種が別種であることが明らかとなった。愛知県下のサドタカキビの記録(守谷, 2004)は、本種の誤認記録である。サドタカキビについては、雄性器官が完全な状態の Euphally 型のタカキビに対して、雄性器官を萎縮させ自家受精での個体群を増大させる繁殖生態型の Hemiphally 型と推測されており、サドタカキビは、タカキビの一形態型に過ぎず、タカキビの異名と考えられている(早瀬, 2018)。

【引用文献】

早瀬善正, 2018. 東海地方で確認されたウラウズタカキビ, かきつばた, (43): 35-37.
守谷茂樹, 2004. 愛知県初記録の陸貝 2 種, かきつばた, (43): 35-37.
上島 励・久保弘文, 2017. ウラウズタカキビ(新称), pp.523-524. in: 沖縄県環境部自然保護課(編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版(動物編)ーレッドデータおきなわー, 712 pp. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

【関連文献】

環境省自然環境局野生生物課少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)

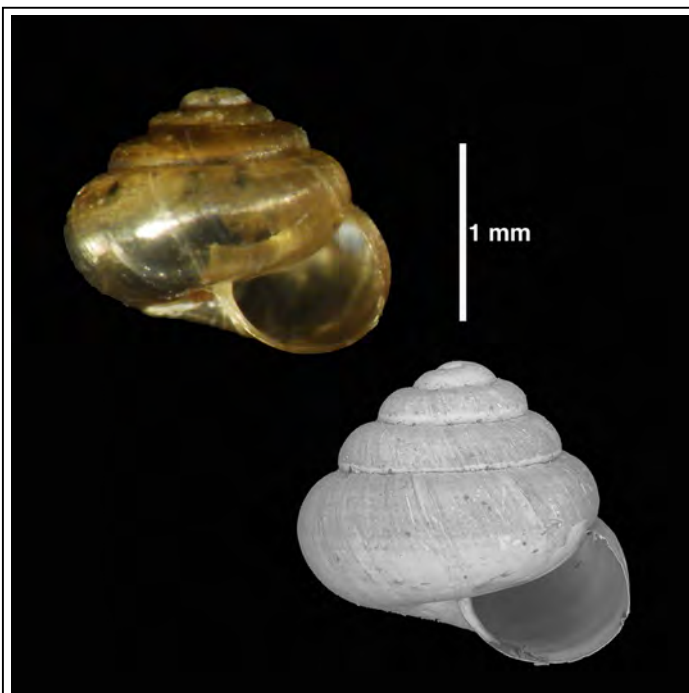
ヒゼンキビ *Parakaliella hizenensis* (Pilsbry)

【選定理由】

愛知県下では、東三河の山地から名古屋市など尾張地域の平地にかけて広く分布が知られており、良好な森林環境で確認される種である(川瀬・他, 2011, 2012, 2013)。愛知県下での分布域は広いものの、生息密度が低い稀少種である。微小であるために、リターサンプリングなどによる確認方法しかないが、愛知県内全域で実施することは困難であるので、生息数が実態よりも少なく判断されている可能性も考えられる。したがって、現時点では、生息個体数が著しく少ない状況ではあるが、絶滅の危険性が逼迫していると判断は出来ない。生息密度が極度に低い微小種であるため、十分な生態学的調査が行われず減少傾向は不明であるが、近年の気候変動の激しさや、自然災害に伴う森林環境の荒廃により、愛知県下では、将来的に絶滅の危険性を考慮すべき種と判断される。

【形態】

殻長 1.8 mm、殻径 2.0 mm 程度の丸みを帯びた低円錐形の微小種である。殻は薄く黄褐色で、臍孔は狭くて小さいが明瞭に開口する。胎殻には、繊細な螺肋と成長肋が交差する布目状彫刻が現われ、他の近似種にはこの特徴が見られない。ハリマキビは特に似ているが、胎殻の特徴の差異のほか、ハリマキビでは臍孔が軸唇の反転により殆ど塞がれ、殻全体がより大形になるなどの殻の特徴により識別が可能である。



北設楽郡設楽町, 2008年6月24日, 早瀬善正採集

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市熱田区の社寺林(川瀬, 2013)、豊田市各地(川瀬・他, 2011, 2012)のほか、東三河の山地に生息記録が知られる。

【世界および国内の分布】

日本固有種。東北地方から九州にかけて広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の生息確認地は、平地から山地までの良好な環境が維持された森林に限られる。本種は林床の落葉層下に生息し、分解の進んだ落葉などを食べて生活していると考えられる。微小かつ稀産種であるために、生態学的研究を行うことが困難であるため、寿命や繁殖期などはまだ解明されていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、良好な森林環境に広く分布が知られている。しかし、確認される個体は死殻を含めてもいずれの地域でも数個体に過ぎず、生貝は1~2個体が確認される程度で、生息密度が極度に低い。調査が十分に行われておらず、減少傾向については不明であるが、近年の気候変動の激しさや、それに伴う森林環境の荒廃により、生息環境が減少傾向にあると考えられる。また、生息地となっている森林環境の開発行為などがあれば、直ちに個体群の消滅につながる。

【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される地域の自然環境および森林環境を維持することが重要である。本種の生息する環境を開発しないことが最も重要である。

【特記事項】

本種の和名および学名の種小名には、「肥前」が用いられていることから、これまでは九州の固有種に誤解され、本州での分布記録が殆ど見られなかった。しかし、実際には、東北地方から九州にかけて広域分布する種である。沖縄のマキビも殻形態が近似しており、別種とすべきなのか詳しい再検討が必要である。属の所属は、*Euconulus*に変更すべきかもしれない(早瀬・他, 2019; pp. 48-49. 参照)。

【引用文献】

早瀬善正・木村昭一・岩田久久・河辺訓愛・矢橋 真・西 浩孝・守谷茂樹・福田 宏, 2019. 岐阜県揖斐郡揖斐川町と本巣市の陸・淡水産貝類相, かきつばた, (44): 44-60.

川瀬基弘(監修), 2013. なごや生きもの一斉調査2012・陸貝編 - なごやで探そう! カタツムリ -, 29 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類, 豊橋市自然史博物館研究報告, (21): 31-43.

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊, 2012. 矢作川上中流域の河畔林に生息する陸産貝類, 矢作川研究, (16): 11-26.

【関連文献】

前田和俊・大田 秀・鹿野康裕・上島 励, 1987. 横須賀市自然博物館所蔵平瀬貝類標本目録(II) 陸産貝類(2) 前鰓亜綱, 有肺亜綱(オナジマイマイ科を除く), 横須賀市博物館資料集, (11): 1-71 (incl. 20 pls.).

環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)

ヒメハリマキビ *Parakaliella pagoduloides* (Gude)

【選定理由】

愛知県下では、現時点で名古屋市のごく僅かな生息記録が見られるのみである(野々部・他, 1984; 守谷, 2004)。本州から四国・九州にかけて広域分布をする種であるが、愛知県下では殆ど記録のない、生息密度が極端に低く、分布域も狭い稀少種である。西三河から確認されたものの、東三河の山地ではリターサンプリングによってもいまだ確認されていない。通常、良好な自然林環境に個体数が少ないものの確認されるが、東三河の森林で確認されない理由は不明である。微小であるために、リターサンプリングなどによる確認方法しかないが、愛知県内全域での実施は困難であるので、多くの地域において未発見となっている可能性は少なからずあると思われる。そのため、生息密度が極端に少ないものの、現時点では、絶滅の危険性が逼迫しているとするまでの判断は出来ない。もともとの生息個体数が少ない微小種であるため、十分な生態学的調査が行われておらず、減少傾向は不明であるが、近年の気候変動の激しさや、それに伴う森林環境の荒廃により、愛知県下では、将来的に絶滅の危険性を考慮すべき種と判断される。



【形態】

殻長、殻径、共に 2 mm に満たない程度の大きさの、低円錐形の微小種である。殻は薄く、淡黄褐色で螺層数は多く、十分に成長した個体ではヒメタマガマイマイやヤマタカマイマイを微小にした様な殻形態となる。殻の周縁は円みを帯び、臍孔は軸唇が反転し殆ど覆われるため、隙間程度にしか開口しない。本種は、ハリマキビにも似るが、遥かに小形で螺塔も高い。

【分布の概要】

【県内の分布】

現時点では、名古屋市内での生息記録が知られる(野々部・他, 1984; 守谷, 2004)ほか、西三河の山地でも僅かに確認されている(図示標本; 早瀬, 未発表)。

【世界および国内の分布】

日本固有種であり、本州・四国に分布するとされる(東, 1995)。九州での分布記録も散見されるが(財団法人 自然環境研究センター, 2010)、ヒゼンキビの誤認記録の可能性もあるため、定かではない。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、現時点で明確な確認地としては名古屋市(天白区)の神社の林内である(守谷, 2004)。このほかに西三河の低山地の林床においても確認されている。主な本種の生息環境は、落葉広葉樹林の林床のリター層であることから、東三河山地の自然林環境から今後、発見される可能性はある。食性については、分解の進んだ落葉などを食べて生活していると推測される。微小かつ稀産種であるために、生態学的研究を行うことが困難であるため、寿命や繁殖期などはいまだ解明されていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、名古屋市内の僅かな社寺林や西三河の低山地で少数個体が生息確認されたのみである。調査が十分に行われておらず、減少傾向については不明であるが、近年の気候変動の激しさや、それに伴う森林環境の荒廃により、生息環境が減少傾向にあると考えられる。また、生息地となっている森林環境の開発行為などがあれば、直ちに個体群の消滅につながる。

【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが重要である。本種の生息する、限られた環境を開発しないことが最も重要である。

【特記事項】

属の所属は、*Euconulus* に変更すべきかもしれない(早瀬・他, 2019; pp. 48–49. 参照)。

【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一・岩田明久・河辺訓受・矢橋 真・西 浩孝・守谷茂樹・福田 宏, 2019. 岐阜県揖斐郡揖斐川町と本巣市の陸・淡水産貝類相, かきつばた, (44): 44–60.
野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23–40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
守谷茂樹, 2004. 名古屋市内の陸貝の現況, かきつばた, (29): 25–31.
財団法人 自然環境研究センター, 2010. ヒメハリマキビ, p.908. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

【関連文献】

- 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版, xvi + 80pls. + 343pp. 保育社, 大阪.
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)

スジキビ *Parakaliella ruida* (Pilsbry)

【選定理由】

本種は、主に原生林などの良好な自然林の森林環境に生息する。愛知県内では、本種の生息環境はきわめて限られた地域のみである上に、生息環境も開発などに伴い狭められているものと考えられる。環境開発の進んだ愛知県内においては、生息環境が狭められ将来的な絶滅の危険性が懸念される。

【形態】

殻長 2.6 mm、殻径 3.5 mm 程度の微小種である。殻は薄く、茶褐色である。周縁にはやや弱い明瞭なキールが見られる。螺塔部には、50 μm 間隔で規則的に並ぶ鋭角的な成長肋が明瞭である(守谷, 2005)。殻底部には、周縁付近にも成長肋が認められるが、殻底～臍孔周辺では弱い螺旋脈のみとなる。軟体部は黒色である。歯舌の歯尖数は中歯 3、側歯 3、縁歯の内側 2 歯は 2 でそれ以外は 1 で牙状である。生殖器官は、雄性器官の陰茎部が太く膨れ、陰茎本体は極端に細く小さな輪となり牽引筋が癒着する。交尾嚢は紡錘形で柄部はきわめて細い。シタラ科貝類のなかでも若干、特異な形状であり(早瀬・他, 2012)、属の所属の再検討が必要と思われる。



早瀬・木村・川瀬 (2012) より編集

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、豊田市稲武町(面ノ木原生林)や設楽町の限られた地域だけに分布する(早瀬・他, 2012)。

【世界および国内の分布】

日本国内の固有種と考えられる。本州の東北地方から中国地方にかけて広く分布するが、生息地が限られる種であり、正式な記録がある産出地の数はそれほど多くない。

【生息地の環境／生態的特性】

山地の良好な自然林の環境で確認される。主に沢沿いなどの湿潤な環境において、広葉樹の倒木朽木に付着する。本種は、主に菌類を摂食する可能性が推測されている(早瀬・他, 2012)。東北から関東地方北部や日本海側地域に主分布域を持つので、寒冷地域を好む種であろうと思われる。したがって、中部地方以西の太平洋岸地域では、冬季に降雪量が多く、比較的標高の高い場所において生息が確認されている。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県下では、原生林などのきわめて良好な自然林の環境のみで生息確認されている。生息範囲が狭く、個体数密度も低い種であるので、環境開発などによる森林環境の変化は、本種の個体群維持に大きなダメージを与える。

【保全上の留意点】

本種は、僅かに流れる程度の沢水の枯渇や小規模ガレ場が消失する程度の微環境の変化でも生息が容易に脅かされるので、開発行為などによる環境への影響には、特に注意が必要である。薄暗い谷部などの湿潤な環境と、生息基盤となる広葉樹林とその朽木の存在が本種の生息には重要である。

【特記事項】

国内の他の地域においても、朽木に付着した個体が見つかる場合が殆どであり、生態的にも本種が生育上何らかの目的のために朽木を活用していることが推測される。

【引用文献】

早瀬善正・木村昭一・川瀬基弘, 2012. 面ノ木原生林のベッコウマイマイ科 3 種, かきつばた, (37): 28-35.
守谷茂樹, 2005. 岐阜県で確認したスジキビとヒメマルマメタニシ, かきつばた, (31): 24-28.

【関連文献】

財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(早瀬善正)

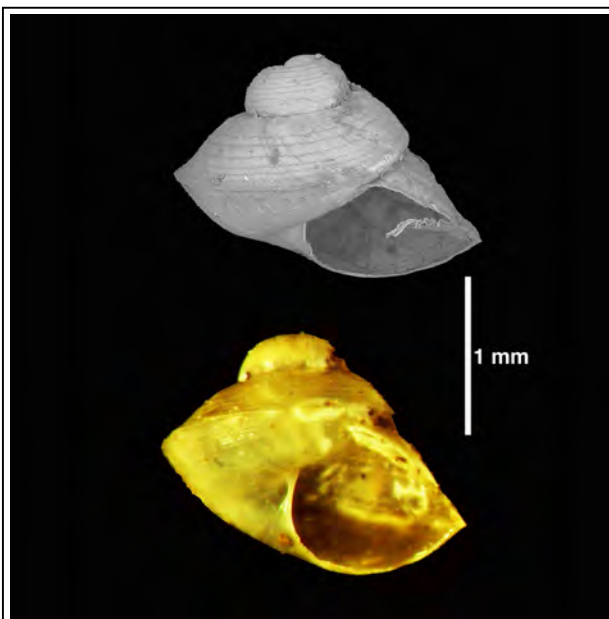
カサネシタラ *Sitalina insignis* (Pilsbry et Y. Hirase)

【選定理由】

愛知県下では、東三河の山地に稀に確認される程度で、生息確認地が限られており、個体数密度もきわめて低い種である。微小種であるために発見が困難なことも考えられるが、各地でリター層のサンプリングを行っても本種が確認されることがないため、愛知県下においては、きわめて稀な種であることは間違いないと考えられる。愛知県内においては東三河の山地が本種の主な生息地であり、森林が広く存在するので、急速に個体群が減少するとは考えられないが、自然林環境が減少傾向にある上に、近年の異常気象に起因する夏季の高温や、豪雨などによるリター層や土壌の流出なども陸産貝類全般の生息に大きな影響を及ぼし、本種の生息にも影響が少なからずあると考えられる。また、ダム工事が予定されるなど開発の懸念もある地域でもある。したがって、徐々に減少に向う可能性は考えられ、将来的に絶滅の危険性を考慮すべき稀少種と判断される。

【形態】

十分に成長した成貝でも、殻長 1.8 mm、殻径 2.5 mm 程度の微小種である。殻は薄く脆く、各螺層の縫合は深く、殻の側面はジグザグ状になる。周縁角は鋭く、竜骨状(キール)になる。殻表は淡黄褐色の殻皮に覆われ、光沢はなく、細く繊細な螺条が複数各層に認められる。臍孔はごく狭く隙間状でほぼ閉じている。軟体の腹足は白色で眼触角は淡黒色。頭部には口球の淡紅色が透過される。



北設楽郡設楽町田口, 2004年7月6日, 河辺訓受採集

【分布の概要】

【県内の分布】

鳳来寺山(矢野, 1990) や設楽町(早瀬, 未発表記録) などの東三河の山地に生息記録が知られる。

【世界および国内の分布】

日本固有種。本州(栃木県・群馬県などの関東北部以西)、四国、九州に広く分布する(財団法人 自然環境研究センター, 2010)。沖縄県(与那国島)での分布記録については、別種の記録である。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、東三河山地の広葉樹からなる良好な自然林環境である。林床の保水性に富んだ落葉堆積下に生息が確認されるが、複数確認されることは殆どない。食性については植物食で、分解の進んだ落葉堆積物などを食べて生活していると推測される。

【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、東三河の山地のみで確認される。同じ地域で再確認が困難なほどの稀産種と考えられる。これまでの分布記録からも、おそらく、尾張～西三河にかけては生息していない種と考えられる。基本的には山深い良好な自然林からなる森林環境に生息する種であり、開発などによる人の手が入らなければ、減少の懸念はないと考えられるが、近年は、東三河地域においても各種開発が計画されるなど、本種の生息環境にも人為的影響が考えられるようになった。また、近年の異常気象に起因する夏季の高温や豪雨などによるリター層や土壌の流出なども、本種の生息に影響を及ぼしていると考えられる。

【保全上の留意点】

本種の生息が確認される地域の自然林環境を維持することが重要である。

【特記事項】

沖縄県(与那国島)で本種とされていた分布記録(財団法人 自然環境研究センター, 2010)については、別種であり、与那国島固有種のおオカサネシタラ *Sitalina* sp. の記録であることが報告された(上島, 2017)。

【引用文献】

- 上島 励, 2017. オオカサネシタラ, p.461. in: 沖縄県環境部自然保護課(編), 改訂 - 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版(動物編) - レッドデータおきなわ, 712 pp. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
 矢野重文, 1990. 知多半島から蒲郡・鳳来寺・豊橋へ, かきつばた, (16): 8-11.
 財団法人 自然環境研究センター, 2010. カサネシタラガイ, p.912. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

【関連文献】

- 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版, xvi + 80 pls. + 343 pp. 保育社, 大阪.
 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xlili + 455pp. ぎょうせい, 東京.
 西 邦雄・西 浩孝, 2018. 宮崎県のカタツムリ, 149 pp. 自刊(黒潮出版), 宮崎.

(早瀬善正)

ウメムラシタラ *Sitalina japonica* Habe

【選定理由】

稀産種である上に生息範囲も狭い種である。生息地は低山地や山麓などの里山の環境であり、このような環境は、宅地化や開発により愛知県内では名古屋市などの都市部を中心に大きく失われている。したがって、愛知県内での本種の生息環境は著しく狭められつつある。将来的な絶滅の危険性が懸念される。

【形態】

殻長 1.2 mm、殻径 1.8 mm 程度の低円錐状の微小種である。螺塔部から体層周縁部にかけて、螺肋上に 4 本ほどの明瞭な殻皮の隆起が見られる。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では、名古屋市(守谷, 2004a, b)、豊田市(川瀬・他, 2011; 2012)、新城市(川瀬, 2014)などでの確認記録が見られる。

【世界および国内の分布】

韓国(巨文島)の記録も見られるが(肥後・後藤, 1993)、主に本州(関東地方以西)、四国、九州に分布し、南西諸島までの広い分布域を示す。

【生息地の環境／生態的特性】

主に低山地や山麓の環境に生息する種である。他県では島嶼の森林で確認される場合もある。林床の落葉下に生息する。微小である上に稀な種でもあり、生態に関しては何も知見がない。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県では、開発の進んだ名古屋市内においても生息確認されており、比較的小規模であっても生息環境となる林が保全されていれば、本種の個体群も維持される。里山の環境に生息する種であるため、里山開発の進んだ愛知県内においては、本種の生息環境は著しく狭められている。

【保全上の留意点】

本種の生息環境である低山地などにおいても、生息確認される場所は、きわめて狭い範囲のみである。本種の生息が確認された環境やその周囲において、開発など改変行為を行わないことが重要である。

【特記事項】

主に藪とも言える人的には価値を認められることが殆どない里山の雑木林の環境に生息する種である。その上に微小種であることから、実際、本種の保護にあたっては、個体自体を保護することは、きわめて困難である。出来る限り本種の正確な分布地域を明確にし、その地域の環境自体を維持してゆく事が重要である。近年、本種は、ここで表示された学名以前の記載であったことが判明した。後に命名者と記載年の変更を要す。

【引用文献】

川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物, pp.1-24. in: 鳳来寺山自然科学博物館(編), 新城市の自然誌 昆虫・動物編, 335 pp. 鳳来寺山自然科学博物館, 新城市.

川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類, 豊橋市自然史博物館研究報告, (21): 31-43.

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊, 2012. 矢作川上中流域の河畔林に生息する陸産貝類, 矢作川研究, (16): 11-26.

守谷茂樹, 2004a. 名古屋市内の陸貝の現況, かきつばた, (29): 25-31.

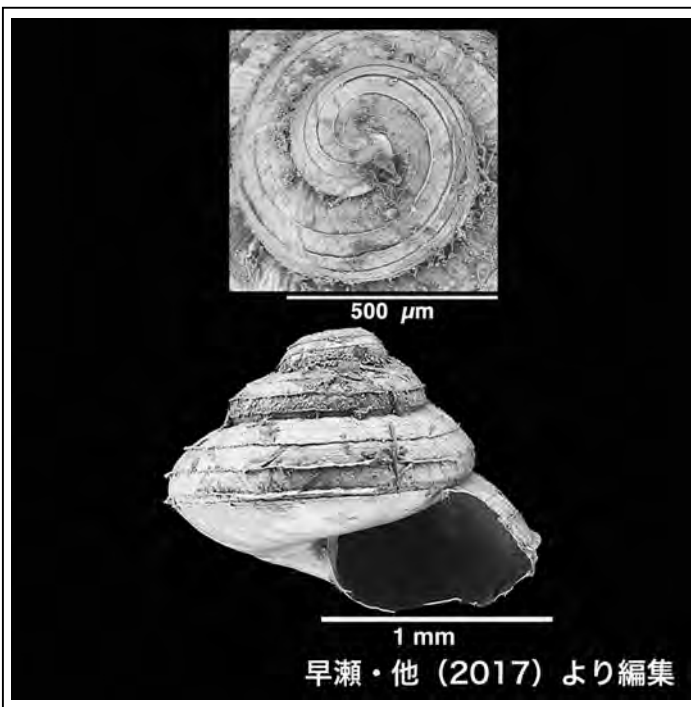
守谷茂樹, 2004b. 名古屋市の陸貝の現況 補足その1(熱田神宮), かきつばた, (30): 23-26.

肥後俊一・後藤芳央, 1993. 日本および周辺地域産軟体動物総目録, 3+22+ 693+148 pp. エル貝類出版局, 八尾市.

【関連文献】

財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(早瀬善正)



ヒメカサキビ *Trochochlamys subcrenulata* (Pilsbry)

【選定理由】

海岸林や低山地などの里山的環境に生息する種であり、愛知県内においては、そのような環境は、宅地化や開発などにより減少している。そのため、本種も減少傾向にある可能性が考えられる。

【形態】

殻径 2.8 mm 程度の微小種である。殻はそろばん玉型で、周縁には強いキールを有する。螺塔部には規則的かつ明瞭な成長肋が密に現れる。殻底は平滑で、規則的に並ぶ複数の細く弱い螺溝が認められる。

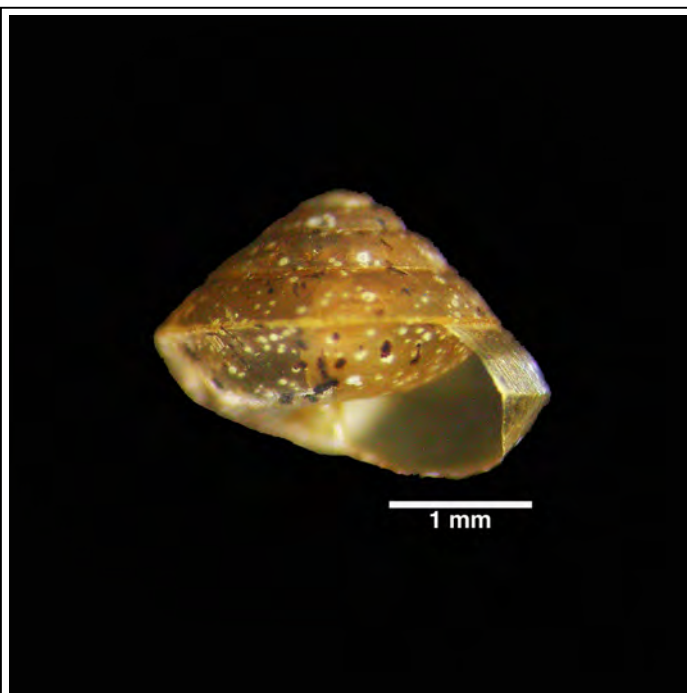
【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内には広く分布し、名古屋市(川瀬(監修), 2013)、瀬戸市(早瀬, 2008)、豊田市(川瀬・他, 2011)、新城市(川瀬, 2014)などでの分布が知られる。

【世界および国内の分布】

日本国内に広く分布し、主に本州、四国、九州に分布記録がある他、奄美大島(早瀬, 未発表)や沖縄(久保, 2014; 早瀬, 2017)にも分布記録が見られる。



瀬戸市定光寺町, 2007年, 早瀬善正採集

【生息地の環境／生態的特性】

海岸林や低山地、山麓などの環境に生息する種である。スギ植林、広葉樹林などの林床の落葉堆積下に生息する。常緑樹林の若干乾き気味の林床の落葉堆積下にも見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

里山的環境に主に生息する種であるので、現在の名古屋市内の一部地域からの生息記録も知られている。広く分布する種であるので、直ちに絶滅の危機に瀕する恐れはないものの、開発などに伴い、生息環境が著しく狭められている種と考えられる。

【保全上の留意点】

微小種であり、個体自体を保護することはきわめて困難である。したがって、本種の保護には、生息地域の自然環境を保全し、維持する必要がある。

【特記事項】

サツマヒメカサキビは、原記載に従い本種の亜種として扱われる場合もあるが、殻形態も全く異なるので、別種である。特に九州などの西日本では、サツマヒメカサキビとされた本種の誤認記録も多いと思われる。ヒメカサキビを名義タイプ亜種とする学名表記は実際には誤りである。

【引用文献】

早瀬善正, 2008. 愛知県瀬戸市定光寺周辺における陸産貝類相調査, かきつばた, (33): 29-39.

早瀬善正, 2017. ヒメカサキビ, p.605. in: 沖縄県環境部自然保護課(編), 改訂 - 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版 (動物編) - レッドデータおきなわ -, 712 pp. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

川瀬基弘(監修), 2013. なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編 - なごやで探そう! カタツムリ - 報告書, 29 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物, pp.1-24. in: 鳳来寺山自然科学博物館(編), 新城市の自然誌 昆虫・動物編, 335 pp. 鳳来寺山自然科学博物館, 新城市.

川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類, 豊橋市自然史博物館研究報告, (21): 31-43.

久保弘文, 2014. 恩納村の貝類, pp.245-340. in: 恩納村誌編さん委員会(編), 恩納村誌 第1巻自然編, 573 pp. 沖縄県恩納村役場, 恩納村.

【関連文献】

財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(早瀬善正)

カントウベッコウ *Bekkochlamys septentrionalis* (Jacobi)

【選定理由】

愛知県東部の原生林などの良好な自然林の環境に生息する。本種が現在確認される環境においても、生息数はきわめて少なく、希少な種である。開発などによる森林伐採などが行われた場合、乾燥化に伴い本種の個体群は容易に消滅する。常に軟体を露出させた状態の種であり、本種の生息には、きわめて湿潤で良好な自然林の環境が必要である。環境開発の進んだ愛知県内においては、生息環境が狭められ将来的な絶滅の危険性が懸念される種のひとつである。

【形態】

殻長 8～10 mm、殻径 12～16 mm 程度の小形種である。殻はきわめて薄く脆弱、淡黄褐色で殻表は平滑で光沢が強い。軟体は大きく、殻の中に退縮できない。1対の外套葉は広く大きく、殻の大部分を覆う。足は長く、後端に短い角状の尾角を具える。歯舌の歯尖数は、中歯が3、側歯が3、縁歯が2である。雄性生殖器官において、陰茎は膨らみが強く、内面には微小な鱗状隆起が多数認められ、太い円柱状の *verge* が確認される（早瀬・他, 2012）。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、豊田市稲武町や設楽町に分布する（木村・中根, 1996; 早瀬・他, 2012）。かつて定光寺（瀬戸市）にも分布した記録があるが（天野, 1966）、当地での最近の記録は全くなく、この地域の個体群は絶滅したと考えられる。

【世界および国内の分布】

日本国内のみに分布する種であり、関東地方から北陸地方、中部地方（三重県を除く）にかけて分布する。北陸地方の個体群をミドリベッコウとし、別種に扱う場合も多いが、亜種程度の分化であろうと思われる。

【生息地の環境／生態的特性】

良好な自然林の環境のみに生息する種である。倒木の下などでじっとして動かない個体が見つかるが（木村・中根, 1996）、降雨時は活発に這い回り、時には地表から 1m 程上の低木の枝を匍匐する個体も見られる。晩秋～冬季には生成貝が確認されないため、寿命が 1 年程度の短い種であろうと思われる。落葉や生の葉、藻類などの植物性のものを食べる種である（早瀬・他, 2012）。

【現在の生息状況／減少の要因】

原生林など限られた山地の良好な自然林のみに生息している。個体数の少ない種である上に、原生林が少ない愛知県内においては、近年の温暖化傾向に伴う林床の乾燥化などの微環境の変化により本種の生息環境は狭められている。

【保全上の留意点】

1 世代の寿命が短いと考えられる種であり、開発等により生息地の環境が悪化すれば、次世代以降の個体発生が途絶え、その時点で直ちに個体群が消滅する可能性が高い種である。環境変化への対応能力が著しく弱いと考えられるので、本種の個体群を維持するためには、本種の生息環境を保全・維持することがきわめて重要である。

【特記事項】

愛知県内には、シコクベッコウやミドリベッコウの記録も見られるが（天野, 1966）、いずれも本種と同一種の記録と考えられる。

【引用文献】

天野景従, 1966. 愛知県の陸貝相, 69-82.+2pls. in: 東海高等学校教育文化研究所(編), 研究紀要 第4集, 東海高等学校教育文化研究所, 名古屋.

早瀬善正・木村昭一・川瀬基弘, 2012. 面ノ木原生林のベッコウマイマイ科3種, かきつばた, (37): 28-35.

木村昭一・中根吉夫, 1996. 第5章 軟体動物, pp.119-126. in: 稲武町史 - 自然 資料編, 稲武町教育委員会, 稲武町.

【関連文献】

野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325 pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.



早瀬・木村・川瀬（2012）より編集

(早瀬善正)

スカシベッコウ *Bekkochlamsyserena* (Pilsbry et Y. Hirase in Y. Hirase)

【選定理由】

愛知県では、東部の原生林など良好な自然林の環境のみで確認されている。開発や近年の急激な気候変動への対応能力の弱い種と考えられる。環境開発の進んだ愛知県内においては、生息環境が狭められ将来的な絶滅の危険性が懸念される種のひとつである。

【形態】

殻長 3.5 mm、殻径 6.0 mm 程度の小形種である。殻はきわめて薄く、殻表は平滑で光沢が強い。軟体は淡い黒色を帯び、活動時に大きく伸張するが、乾燥時は殻の中に退縮する。ウラジロベッコウに近似するため、死殻や幼貝でのこれら 2 種の区別はきわめて困難である。生成貝であれば、ウラジロベッコウに比べてスカシベッコウの巻きが少なく、螺塔が相対的に高い傾向にある特徴などにより識別できる。歯舌の歯尖数は、中歯が 3、側歯が 3、縁歯が 2 で、最外縁付近は 4 である。生殖器官では、陰茎鞘がやや太く、陰茎本体は細い。鞭状器は乳白色で、小形の棍棒状である。陰茎牽引筋は陰茎本体との結合部分が太く明瞭である (早瀬・他, 2012)。



早瀬・木村・川瀬 (2012) より編集

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、豊田市稲武町や設楽町に分布する (早瀬・他, 2012)。

【世界および国内の分布】

日本国内のみでの分布が知られ、日本の固有種と考えられる。本州のみに分布する。東北地方～甲信地方にかけて分布が集中しており、愛知県の分布地は、少なくとも、太平洋岸地域での西限分布地になると考えられる。

【生息地の環境／生態的特性】

原生林などの良好な自然林の環境に生息し、個体数密度もきわめて低い種である。本種は 6 月頃に成熟個体が確認され、それ以外の秋季 (10 月末頃) などでは幼貝のみ確認される状況より、寿命が 1 年程度の短い種であろうと思われる。落葉、菌類などを主に摂食する種と推測されている (早瀬・他, 2012)。東北地方では、サワグルミ林などにみられ、終日、太陽光のあたらないような林間の落葉下に棲むとされる (川口, 2002)。

【現在の生息状況／減少の要因】

原生林などの限られた山地の良好な自然林のみに生息し、中部地方ではきわめて個体数の少ない種である。開発や近年の急激な気候変動の下での本種の健全な個体群の持続的な維持が可能なのか懸念される。本来、多産しない種であるものの、原生林が少ない愛知県内においては、近年の温暖化傾向に伴う林床の乾燥化などの微環境の変化により本種の生息環境は狭められていると思われる。

【保全上の留意点】

1 世代の寿命が短い種と考えられ、開発等により生息地の環境が悪化すれば、次世代以降の個体群が途絶える可能性が高い。本種の個体群を維持するためには、本種の生息環境の保全・維持がきわめて重要である。冬季に降雪量の多い寒冷な地域や比較的標高の高い地域に見られる種であるので、温暖化による気温の上昇傾向も個体群減少の一因となる可能性がある。

【特記事項】

分類の難しい種であるので、専門家による種の同定が必要となる。

【引用文献】

早瀬善正・木村昭一・川瀬基弘, 2012. 面ノ木原生林のベッコウマイマイ科 3 種, かきつばた, (37): 28-35.

川口洋治, 2002. スカシベッコウ, p.202. in: 秋田県生活環境文化局自然保護課(編), 秋田県の絶滅のおそれのある野生生物 2002 - 秋田県レッドデータブック - 動物編, 217 pp. 秋田県環境と文化のむら協会, 秋田県.

【関連文献】

財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(早瀬善正)

クチマガリマイマイ *Aegista cavicollis* (Pilsbry)

【選定理由】

愛知県下では、知多半島に分布域が限定され、さらにその中の限られた地域のみで生息する稀少種である。愛知県の個体群は本種の東限分布個体群でもあるので、生物地理学的にも貴重である。全国的にも絶滅が危惧される種であり、愛知県下では都市部以外に知多半島においても、近年は、本種の生息環境である竹林や雑木林が宅地造成や商業施設用地に利用されるなどの開発や整地により減少傾向にあり、将来的に絶滅の危険性を考慮すべき種と判断される。

【形態】

殻長 4.4~4.8 mm、殻径 6.1~6.9 mm 程度の低円錐形の小型種である。殻はやや薄く、小形ながら螺層数は 6・1/2 層程と多いため、螺管が密に巻いている。淡黄色~茶褐色の殻皮を有するが、成貝においては、鱗片状の突起物は認められなくなる。和名の通り、成貝では螺管が殻口の直近で急に下方に曲がり、殻口が殻底側に向く特徴を有する。臍孔は殻径の 1/3 程度の幅で深く明瞭に開く。

【分布の概要】

【県内の分布】

知多半島のみで分布し、生息地は知多市大興寺に 1 箇所と美浜町に 2 箇所の計 3 箇所が確認されている程度である (野々部・他, 1984; 矢野, 1990)。

【世界および国内の分布】

日本固有種であり、紀伊半島の西側に主分布域を有する (財団法人 自然環境研究センター, 2010)。愛知県は本種の東限分布域である。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、寺院の竹林や社寺林の雑木林である。人の生活環境近くの里山の環境に生息する。林床に生息する地上性種であり、落葉堆積下の保湿性のある土壌の間に確認される。食性については植物食で、分解の進んだ落葉などを食べて生活していると推測される。交尾時は、矢嚢内で作られる石灰質の細く尖った針状の形成物 (恋矢) で、互いに腹足を複数回貫通し合う行動が確認される。同時に幼貝と成貝が確認されるので、成貝までに複数年を有すると推測される。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、数箇所の生息地が知られるのみである。知多半島の開発などにより多くの雑木林などが失われ、生息地が社寺林などの僅かな林に点在するに過ぎない状況となったことが推測される。現時点の生息場所はきわめて狭く局所的であり、林の環境悪化やその場所の開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが重要である。本種の生息する、限られた環境を開発しないことが最も重要である。

【特記事項】

知多半島は、本種の東限生息地であり、この地域の個体群の存在が重要であり、保護する必要がある。

以前は、殻口が下方に曲がる同様の特徴の同属種が、クチマガリマイマイ亜属 (*Coelorus*) に位置付けられていたが、DNA 解析の結果いわゆる他人の空似であり、この亜属の単系統性が認められなかった (Hirano et al., 2014)。オオバソマイマイ属 (*Aegista*) には、これまで提唱された他の亜属も全て分類群として成立しないことが明らかになったため、近年の分類では本属に亜属表記がされていない。

【引用文献】

- Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K. & Chiba, S., 2014. Substantial incongruence among the morphology, taxonomy, and molecular phylogeny of the land snails *Aegista*, *Landouria*, *Trishoplita*, and *Pseudobuliminus* (Pulmonata: Bradybaenidae) occurring in East Asia. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 70: 171-181.
- 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚 (編), 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
- 矢野重文, 1990. 知多半島から蒲郡・鳳来寺・豊橋へ, かきつばた, (16): 8-11.
- 財団法人 自然環境研究センター, 2010. クチマガリマイマイ, p.950. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

【関連文献】

- 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版, xvi + 80pls. + 343pp. 保育社, 大阪.
- 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)



知多市大興寺, 1999年2月6日, 早瀬善正採集

カドコオオベソマイマイ *Aegista goniosoma* (Pilsbry et Hirase)

【選定理由】

愛知県では限られた地域に確認されるのみで、個体数も少なく、希少な種である。本種の西限分布地域の個体群としても重要である。本種が生息できる森林環境は、開発などにより明らかに減少しており、近年の急激な気候変動に伴い、将来的に絶滅の危険性を考慮すべき種と判断された。

【形態】

殻長 7.4 mm、殻径 14.1 mm 程度の小型の種である。殻は、螺塔が低く、円盤状の形状である。周縁は強く角張るが、個体や地域により差異が認められる。鳳来寺山頂部の個体は特に周縁角が鋭く、愛知県内で最も本種の特徴を良く表している個体群である。ただし、豊田市などでは、周縁角が弱く、コオオベソマイマイとの区別が難しい個体も見られる。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、東部の三河山地に分布しており、豊田市 (川瀬, 2012) や新城市 (鳳来寺山) (矢野・早瀬, 2014) で確認されている。

【世界および国内の分布】

日本国内の固有種であり、主な分布域は、関東地方である。

【生息地の環境／生態的特性】

良好な広葉樹林やその付近に位置するスギ植林の林床部の落葉下に生息する。地上性種であり、一生を通して、落葉下のリター層や地表面で活動する。

【現在の生息状況／減少の要因】

豊田市 (駒山など) や新城市 (鳳来寺山) などに生息地が知られる。山地の森林林床部に生息している。愛知県内においては、本来、個体数の少ない希少種であるが、近年の夏季の高温化に伴う森林環境の乾燥化、開発による生息環境の減少などが懸念される。

【保全上の留意点】

生息個体数が少ない種であり、本種の保護には、個体の保護よりも生息環境の維持と保全が重要である。

【特記事項】

県内に生息するコオオベソマイマイと共にアラハダヒロベソマイマイの亜種として扱われていたが、分子系統解析ではカドコオオベソマイマイはこれらの種との分化が示されており (Hirano et al., 2014)、種レベルでの分化があると考えられる。愛知県内のカドコオオベソマイマイに関しては、分子系統解析により、どの様な結果が示されるのか現時点では不明だが、県内のカドコオオベソマイマイとコオオベソマイマイとの明瞭な分化が示された場合は、今後、本種をより貴重な個体群として扱う必要性が生じるだろう。

【引用文献】

- Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K., Chiba, S., 2014. Substantial incongruence among the morphology, taxonomy, and molecular phylogeny of the land snails *Aegista*, *Landouria*, *Trishoplita*, and *Pseudobuliminus* (Pulmonata: Bradybaenidae) occurring in East Asia, *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 70: 171–181.
川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物, 豊田市史研究, (3): (57) 122–(80) 99.
矢野重文・早瀬善正, 2014. 鳳来寺山のオオベソマイマイ属について, かきつばた, (39): 28–30.

【関連文献】

- 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, 23–40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325 pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(早瀬善正)



新城市鳳来寺山山頂部, 1988年12月25日, 木村昭一採集

フチマルオオベソマイマイ *Aegista tumida* (Gude)

【選定理由】

愛知県下では、渥美半島に分布域が限定され、さらに半島中央～東部地域のみで生息する稀少種である。愛知県の個体群は本種の東限分布個体群でもあるので、生物地理学的にも貴重である。全国的にも絶滅が危惧される種であり、愛知県下の個体群も近年、個体数が減少傾向にある。近年の温暖化による夏季の高温の影響も考えられるが、田原市白谷の石灰岩地では乾燥化が著しく、殆ど確認出来ない状況にある。近年の異常気象が本種の生息環境に及ぼす影響は大きいと考えられ、将来的に絶滅の危険性を考慮すべき種と判断される。

【形態】

殻長 8.0～9.8 mm、殻径 12.5～14.2 mm 程度の小形種。円盤状で螺塔は低く、平らに近い形状～低円錐状である。臍孔は殻径の1/3程度の幅があり、明瞭で深い。成貝の殻口は唇縁が反曲し肥厚して、同属他種よりも遥かに厚く白い。殻表は淡黄褐色の殻皮に覆われるが、成貝では鱗片状の殻皮突起物は認められなくなる。

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美半島の中央～東部地域のみで生息する。新城市の鳳来寺山周辺の分布記録は誤認記録であり、新城市(旧鳳来町)には分布しない(矢野・早瀬, 2014)。

【世界および国内の分布】

日本固有種。紀伊半島に広く分布し(財団法人 自然環境研究センター, 2010)、愛知県の生息地が分布域東限となる。

【生息地の環境／生態的特性】

田原市白谷は石灰岩地であるが、それ以外は、常緑樹などの自然林環境である。林床に生息する地上性種であり、落葉堆積下の保湿性のある土壌の間に確認される。食性については植物食で、分解の進んだ落葉などを食べて生活していると推測される。同時に幼貝と成貝が確認されるので、成貝までに複数年を有すると推測される。

【現在の生息状況／減少の要因】

田原市白谷の石灰岩地では以前は多くの個体が確認されたが、近年は、個体数が減少傾向にある。近年の温暖化による夏季の高温の影響と考えられるが、田原市白谷の石灰岩地では林床の乾燥化が著しい。近年の異常気象が本種の生息環境に及ぼす影響は大きいと考えられる。

【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが重要である。本種の生息する、限られた環境を開発しないことが最も重要である。林床の乾燥化が進行しないように生息地周辺の樹木の伐採を行わないことが肝要である。

【特記事項】

鳳来寺山では、紀伊半島に分布するやや大形となる亜種のキイオオベソマイマイの記録が存在したが、検証の結果、コオベソマイマイ(大形個体群)やカドコオベソマイマイの誤認記録と判明し(矢野・早瀬, 2014)、新城市の鳳来寺山周辺の本種の分布記録は誤りである。愛知県の本種は、東限分布個体群として重要であり、保護する必要がある。

【引用文献】

矢野重文・早瀬善正, 2014. 鳳来寺山のオオベソマイマイ属について, かきつばた, (39): 28-30.
財団法人 自然環境研究センター, 2010. フチマルオオベソマイマイ, p.967. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

【関連文献】

Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K. & Chiba, S., 2014. Substantial incongruence among the morphology, taxonomy, and molecular phylogeny of the land snails *Aegista*, *Landouria*, *Trishoplita*, and *Pseudobuliminus* (Pulmonata: Bradybaenidae) occurring in East Asia. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 70: 171-181.
環境省自然環境局野生生物課稀少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)



田原市和地町, 1992年9月22日, 木村昭一採集

ヒルゲンドルフマイマイ *Aegista hilgendorfi* (Kobelt)

【選定理由】

愛知県では知多半島や名古屋市、瀬戸市などに分布するが、生息地はいずれも散見である。知多半島では生息数が少なく、名古屋市や瀬戸市では確認自体が稀である。県下の分布域が比較的広いので、未確認の生息地もあると考えられ、直ちに絶滅の危険性があるとは判断しなかったが、今後の減少傾向を注視する必要がある。愛知県下では、分布の縁辺部であることから、個体数密度が低く稀な種であり、里山的環境から平地の雑木林や社寺林などに分布が限定されることから、開発の影響による減少が懸念され、愛知県下では、将来的に絶滅の危険性を考慮すべき種と判断される。

【形態】

殻長 8.3~10.6 mm、殻径 10.9~13.9 mm 程度の低円錐形の小形種である。愛知県下では、知多半島の個体がやや大形で、名古屋市~瀬戸市にかけての個体は小形傾向にある。殻は薄く、殻表は茶褐色の殻皮で覆われる。次体層にはきわめて弱い角を持つもの、体層周縁は円く、臍孔は殻径の 1/5 程度の幅で明瞭に開く。軟体の頭部背面は淡黒色である。

【分布の概要】

【県内の分布】

南知多町、名古屋市、瀬戸市に生息記録が知られる(早瀬, 2001, 2008; 木村, 2002; 川瀬, 2013)。

これまでに鳳来寺山や石巻山・嵩山の分布記録などもあるが、実体の不明な記録であり、今回は本種の記録から除外した。

【世界および国内の分布】

日本固有種。北陸地方(コオトメマイマイやチャイロオトメマイマイとされるが、同種と考える)のほか、伊吹山系~養老山系~鈴鹿山系にかけての岐阜県や滋賀県、三重県などに分布し、(財団法人 自然環境研究センター, 2010)、これらの地域の、特に石灰岩地には多数の個体が確認される。

【生息地の環境/生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、平地から里山にかけての雑木林である。名古屋市では大きな公園や神社の林で確認される。主に低木の葉裏に付着する個体などが確認される。食性については植物食で、草本の若葉や分解の進んだ落葉などを食べて生活していると推測される。

【現在の生息状況/減少の要因】

南知多町では、少数ながら、まとまった個体数からなる個体群が維持されているが、名古屋市や瀬戸市では、確認例自体が稀である。愛知県は分布の縁辺部であるため、もともと個体数密度が高くないことが考えられるが、愛知県下では平地から里山にかけての雑木林が本種の主生息地となっているため、名古屋市を中心に開発が進み、本種の生息環境が失われつつある可能性も高いと考えられる。近年の異常気象に起因する夏季の高温や豪雨なども本種の生息に大きな影響を及ぼすと考えられる上に、現状の生息地周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが重要である。本種の生息する、限られた環境を開発しないことが最も重要である。

【特記事項】

鳳来寺山自然科学博物館に所蔵される天野景従コレクションには嵩山産のウスイロヒルゲンマイマイとされる標本が存在するが、ヒルゲンドルフマイマイとは明らかに異なる種であった(イシマキシロマイマイ 594 頁を参照)。

これまではオトメマイマイ属 *Trishoplita* とされてきたが、分子系統解析の結果、オトメマイマイ類にはおおむねのまとまりがあるものの、オオベソマイマイ属 *Aegista* のクレードには包括されてしまう結果となり、オトメマイマイ属は他のいくつかの属と共にオオベソマイマイ属の異名のひとつとなった(Hirano et al., 2014)。

【引用文献】

- 早瀬善正, 2001. 知多半島に生息するヒルゲンドルフマイマイ, かきつばた, (27): 10-11.
早瀬善正, 2008. 愛知県瀬戸市定光寺周辺における陸産貝類相調査, かきつばた, (33): 29-39.
Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K. & Chiba, S., 2014. Substantial incongruence among the morphology, taxonomy, and molecular phylogeny of the land snails *Aegista*, *Landouria*, *Trishoplita*, and *Pseudobuliminus* (Pulmonata: Bradybaenidae) occurring in East Asia. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 70: 171-181.
木村昭一, 2002. 熱田神宮の貝類相, かきつばた, (28): 24-25.
川瀬弘 (監修), 2013. なごや生きものの一斉調査 2012・陸貝編 - なごやで探そう! カタツムリ -, 29 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
財団法人 自然環境研究センター, 2010. ヒルゲンドルフマイマイ, p.996. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

【関連文献】

- 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版, xvi + 80pls. + 343pp. 保育社, 大阪.
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)



名古屋市熱田区, 2002年2月17日, 木村昭一採集

ピロウドマイマイ *Nipponochloritis oscitans* (Martens)

【選定理由】

ピロウドマイマイ類は特徴が乏しく分類が難しいため、これまで種名が混乱していた。近年、中部地方に分布するピロウドマイマイ類の種の再検討が進み、愛知県での各種の分布の概要も明らかになった(早瀬・多田, 2005; 早瀬・多田, 2008; 木村, 2014)。ピロウドマイマイは愛知県内に広く分布するものの、生息地は環境が保全された自然林や社寺林に限定され、生息個体数も少ない。また、本種が生息できる森林環境は、開発などにより明らかに減少しており、結果として、生息地及び個体数とも減少傾向にあるため、将来的に絶滅の危険性を考慮すべき種と評価された。

【形態】

殻は本属のなかでは中～大形に属し、主に、殻長 10 mm、殻径 20 mm 程度であるが、小形個体は殻径 15 mm 程度にとどまり、大形個体は殻径 20 mm を越え主に東三河山地等で確認される。螺塔は低くほぼ平らで、殻全体はやや丸みを帯びる。殻皮毛は、個体群により低密度の場合(ケハダピロウドマイマイとされる個体)も稀に認められるが、県下の個体は主に高密度である。臍孔は、十分に成長した個体では完全に閉じる。軟体部背面は淡黒色で、臍面付近は淡く、灰色がかった紫褐色である。生殖器官では雄性器官の鞭状器がきわめて小さく短い突起程度となる特徴を有する。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では東三河山地から豊川市、豊橋市、岡崎市、蒲郡市、瀬戸市の丘陵地まで比較的広く分布する。近年、名古屋市内でも生息が確認された(川瀬(監修), 2013)。

【世界および国内の分布】

日本固有種である。東北地方から中部・近畿地方にかけて広く分布し、一部、中国地方や四国のごく一部まで分布が確認される(早瀬・他, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

丘陵部から山地にかけての湿度が保たれた自然林もしくは社寺林内の、主に朽ち木や瓦などが積み重なった下面に潜んでいる。春から秋の降雨後には、陸産貝類の多くは林床上を匍匐するが、本種は日中に地表には殆ど現れない。主に分解の進んだ落葉を摂食すると考えられるが、秋にはキノコ類を食べる個体が確認される例も多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

県下の良好な森林環境に広く確認される。減少の要因は、近年の夏季の高温化に伴う森林の乾燥化、開発による生息環境の消失などが考えられる。自然林の植生が伐採され乾燥化が進行し、朽木などの隠れ場所が整備され、取り払われると、生息できなくなる。他に、シイタケ栽培のホダ木や瓦といった廃材の捨て場など里山的な環境の減少も本種の減少の一因と考えられる。

【保全上の留意点】

自然林、社寺林を保全すること、林内の倒木や朽ち木等を取り払わないことが重要である。多くの自然林、社寺林では、竹類が照葉樹林へ侵入し範囲を拡大しているため、竹の適正な伐採を行って、森林を保全する必要もある。

【特記事項】

早瀬・多田(2005)は、愛知県内のピロウドマイマイ類を、ピロウドマイマイ、ケハダピロウドマイマイ、ミニピロウドマイマイの3種とした。ただし、最近の見解に従えば、この3種はいずれもピロウドマイマイ種群に包括される(早瀬・他, 2016)。なお、過去の文献記録に散見される愛知県内でのヒメピロウドマイマイ、キヌピロウドマイマイ2種の分布については、いずれも解剖結果より支持されず、ピロウドマイマイの誤同定である。

また、川瀬(2015)は、名古屋市の個体をピロウドマイマイ属の一種として扱うが、その理由をDNA解析により複数種が含まれるためとしている。しかし、分布域を東北地方から四国までの広域としていることは全く矛盾しており、名古屋市の個体も同種(ピロウドマイマイ)になると考えられる。本州に広域分布する種群が複数の地域個体群の集合体により構成されることは当然であり、形態的に全く識別できない無数の個体群を全て種レベルの分化とするのであれば、国内全ての同水準で分化する各個体群について、その分類学的特徴の記載を必要とする。現時点でそれが行われていない以上は、名古屋市の個体群を別種に位置付ける根拠は全くなく、現時点ではピロウドマイマイ種群として本種の表記するのが妥当と考えられる。

【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・湊 宏, 2016. 震災後の宮城県北部沿岸域で確認された陸産および淡水産貝類, ちりぼたん, 46 (1-2): 2-62.
早瀬善正・多田 昭, 2005. 愛知県産のピロウドマイマイ属について, かきつばた, (31): 8-19.
早瀬善正・多田 昭, 2008. 中部地方に分布するピロウドマイマイ属, かきつばた, (33): 17-211.
川瀬基弘(監修), 2013. なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編 - なごやで探そう! カタツムリ - 報告書, 29 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
川瀬基弘, 2015. ピロウドマイマイ属の一種, p. 433, in: 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課(編), 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック なごや 2015 - 動物編 -, 504 pp. 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課, 名古屋.
木村昭一, 2014. ピロウドマイマイ, p.325, in: 岡崎市(編), 岡崎市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックおかさぎ 2014, 362 pp. 岡崎市, 岡崎.

【関連文献】

- 天野景従, 1966. 愛知県の陸貝類, 69-82.+2pls. in: 東海高等学校教育文化研究所(編), 研究紀要 第4集, 東海高等学校教育文化研究所, 名古屋.
東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, 343pp. 保育社, 大阪.
木村昭一・中根吉夫, 1996. 第5章 軟体動物, pp.119-126. in: 稲武町史 - 自然 資料編, 稲武町教育委員会, 稲武町.
増田 修・波部忠重, 1989. 静岡県陸産淡水産貝類相, 74pp. 東海大学自然史博物館.
野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325 pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
山田栄蔵, 1991. 岡崎市内の陸産貝類について, かきつばた, (17): 5-7.

(早瀬善正・木村昭一)



岡崎市茅原沢, 2010年11月3日, 木村昭一採集

マルタニシ *Cipangopaludina chinensis* (Martens)

【選定理由】

タニシ科貝類は県内にヒメタニシ *Sinotaia histrica* (Gould)、オオタニシ *Cipangopaludina japonica* (Martens)と本種が分布している。本種は海に近い平野部の水田や用水路などにかつては食用にするほど多産し、最も親しみのある淡水貝であった(紀平, 1990)。

近年では水質汚濁、農薬散布、用水路の改修、水田の乾田化のため生息地、個体数とも著しく減少した。木村(1994)では、5地点のみで生息が確認されたにすぎず、そのいずれでも個体数が少なかった。その後、知多半島先端部の休耕田、額田郡、岡崎市(木村, 2014)、豊田市(川瀬・他, 2011)のため池や小河川で生息が確認されている。水田での生息地は明らかに減少しているため、将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



額田郡幸田町, 2005年5月21日, 木村昭一採集

【形態】

成貝では殻長 60 mm に達するが、通常 30–40 mm 程度。各螺層は丸く膨れ、縫合は深くくびれる。殻は薄く壊れやすい。蓋は革質で赤褐色。オオタニシと区別が難しい個体もあるが、本種の胎殻(体内に保有している胎貝)がソロバン型のオオタニシとは異なり周辺の角が弱い。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように県内での水田での生息場所は著しく減少し、個体数も減少している。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島に分布、国内では北海道南部から九州、沖縄諸島に分布する(紀平, 1990)。

【生息地の環境／生態的特性】

かつては水田に多産したので、水質汚濁、農薬散布、用水路の改修、水田の乾田化などの影響の少ない水田を含めた低湿地には現在も比較的多くの個体が生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息地の消失が大きな原因である。

【保全上の留意点】

水質の浄化、無秩序な護岸工事を避けることは当然であるが、水質汚濁、農薬散布、用水路の改修、水田の乾田化などの影響の少ない水田を含めた低湿地の保全が不可欠である。

【引用文献】

紀平 肇, 1990. 琵琶湖淀川淡水貝類. 131pp. たたら書房.

川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 豊田市に生息する淡水産貝類. 陸の水, 48: 9–16.

木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報(第 33 報): 14–34. 全国高等学校水産教育研究会.

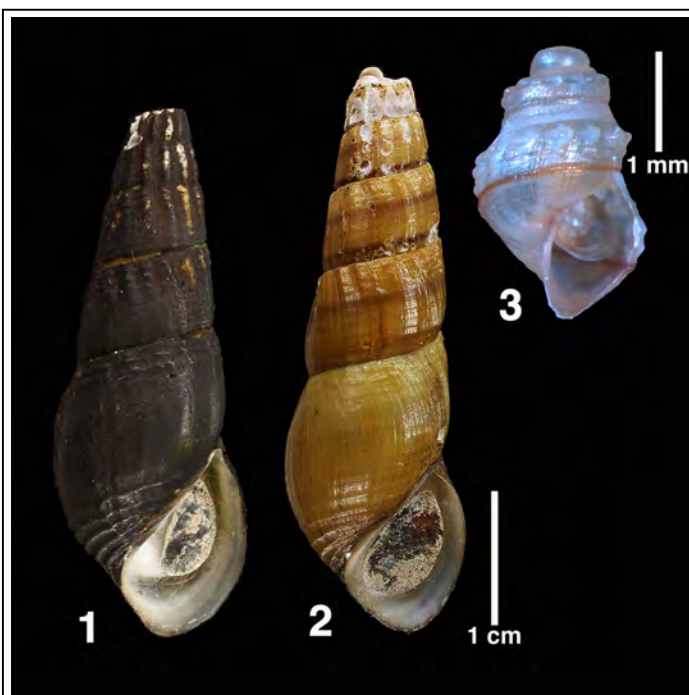
木村昭一, 2014. マルタニシ, p. 328.in : レッドデータブックおかげさき 2014, 362pp. 岡崎市.

(木村昭一)

クロダカワニナ *Semisulcospira kurodai* Kajiyama et Habe

【選定理由】

カワニナ科貝類は県内にカワニナ *Semisulcospira libertina* (Gould)、チリメンカワニナ *Semisulcospira reiniana* (Brot) と本種が分布している。3種とも河川に分布しているが、本種は最も下流側に分布している。河川の下流域やその支流の流れのやや緩やかな場所に生息する。県内河川下流域はほとんどの場所で生息環境が悪化しているため、生息場所も少ない。本種の県内における生息場所は木村 (1994) を含めて現在9地点しかない。その後、豊田市 (川瀬・他, 2011) などでも生息地が発見されているが、近年岡崎市では生息が確認できず、木村 (1994) で確認された生息地が2ヶ所消失した。生息地、個体数共に少ないので将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



愛西市木曾川本流, 2006年10月31日, 木村昭一採集

【形態】

カワニナ科貝類は個体変異や地域変異が著しく、カワニナ、チリメンカワニナとは成貝の殻だけで区別することはやや難しい。殻長は40mm程度で、カワニナよりやや殻が細長く棍棒状で、殻底の肋が強くその数は6本程度と少ない。殻の色彩は本来、緑がかかった淡褐色である (図2) が、黒色の付着物で殻表が覆われている (図1) ことも多い。胎児殻 (体内に保有している胎貝; 図3) は他の2種が濃い茶褐色であるのに対して本種は淡いクリーム色で、殻長2mmを越す個体もあり他の2種と比べて大きい。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように県内の生息場所は少なく、個体数も少ない。豊川本流下流域、木曾川本流下流域 (木村, 2006) では、比較的広い範囲で健全な個体群が確認されている。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。静岡県西部から岡山県にかけて分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

カワニナ科貝類はホタルの餌生物として有名で、周知の通り水質の良い河川に生息する。前述のように本種はカワニナ科では最も下流に生息し、流れの緩やかな場所を好む。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述の通り県内河川下流域は生息環境の破壊が著しく、生息場所、個体数が減少している。

【保全上の留意点】

上述したような河川下流域の環境保全が必要である。

【特記事項】

岐阜県 (2010) では準絶滅危惧にランクされている。

【引用文献】

- 岐阜県, 2010. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生動物 動物編 改訂版.
(https://www.pref.gifu.lg.jp/kurashi/kanky/shizenhogo/c11265/index_17185.html)
川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 豊田市に生息する陸産貝類. 陸の水, 48: 9-16.
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報(第33報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2006. 愛知県におけるミズゴマツボの産出記録. かきつばた, (32): 22-25.

(木村昭一)

ヒラマキミズマイマイ *Gyraulus chinensis spirillus* (Gould)

【選定理由】

県下のヒラマキガイ科貝類は、カワネジガイ *Camptoceras hirasei* Walker・メリケンゴザラ (移入種) *Ferrissia californica* (Rowell)・カワゴザラ *Ferrissia nipponica* (S. Hirase & Kuroda in S. Uchida)・ミズコハクガイ *Gyraulus soritai* Habe・ヒラマキミズマイマイ・ヒメヒラマキミズマイマイ *Gyraulus* sp.・レンズヒラマキ (クルマヒラマキ) *Helicorbis* cf. *cantori* (Benson)・ヒラマキガイモドキ *Polypylis hemisphaerula* (Benson in Cantor)・ヒロマキミズマイマイ (移入種) *Menetus dilatatus* (Gould) が記録されている (河辺, 2002 ; 川瀬・他, 2016 ; 川瀬, 2018 ; 守谷・河辺, 2013)。

しかし、これらの県下全域における生息状況は、生息環境が限定的で、個体数が少ない種が多く、さらに分類学的な検討も十分でないため明らかにはなっていない。また未同定の移入個体群もしくは移入種の存在も無視できず、県下での絶滅危惧種としての評価も容易ではない (絶滅と評価されているカワネジガイを除く)。

現在生息が確認されているヒラマキガイ科の代表種として、本種は全県下での分布状況が比較的明らかになっている。本種は丘陵地や丘陵地に近い平野の休耕田や湿地など自然度が高い生息環境には多くの個体が現在も生息しているが、このような生息環境自体が減少していると評価され、生息基盤は脆弱である。

【形態】

殻径約 5 mm で県下の本科としては大型になる種で、本科の他の種と同様、左巻である。平巻きで扁平な円盤状の殻を持ち、臍穴は大きく開く。殻周辺はほとんど角もなく丸い。殻表には弱い微細な成長脈があるが、殻質は薄く、半透明で褐色であるが、ほとんどの個体では黒色の付着物で覆われている。軟体部は暗褐色。ヒメヒラマキミズマイマイと本種の同大の幼貝とは区別はやや難しいが、本種の幼貝は巻き数が少ないので区別される。



岡崎市青木川河畔, 2017年10月11日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県下では木村 (1994) により 4ヶ所の生息地が報告され、近年川瀬・他 (2016) により尾張・西三河地方 (名古屋市、西尾市、豊田市) を中心に比較的多くの生息地が報告された。川瀬・他 (2016) では、殻形態による分類で区別された愛知県産のヒラマキミズマイマイ・ミズコハクガイ・ヒメヒラマキミズマイマイ・ヒロマキミズマイマイはそれぞれ、COI 遺伝子解析によっても独立したクレードを形成することが裏付けられた。

【世界および国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、日本各地に分布するとされている (増田・内山, 2004) が、全てが同一種であるかどうか、移入個体群が存在するかどうかも含めて、検討の余地がある。

【生息地の環境／生態的特性】

丘陵地や丘陵地近くの休耕田や里山的な環境内の湧水による水たまり、湿地などに生息する。日陰になる場所であり、湿潤ではあるが、深く水がたまっていない湿地的な環境が本種の生息には必要である。河川近くの水田地帯でも休耕田が湿地化したような草原で多数の個体が越冬していることがある。そのような生息環境下には希少な水生昆虫なども生息していることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

分布は局地的で生息地点数は少なく、生息面積も小さい。上述したような生息環境自体が著しく減少している事が、減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

前述した生息環境を保全する事が最も重要である。また継続的なモニタリングも必要である。

【特記事項】

本種は既に名古屋市レッドデータブックに準絶滅危惧種として掲載されている (川瀬, 2015)。

【引用文献】

- 河辺訓受, 2002. 石巻山周辺淡水貝観察調査会報告一愛知県でミズコハクガイを初記録一。かきつばた, (28): 31-32.
川瀬基弘・松原美恵子・森山昭彦, 2016. 愛知県西三河地域から採集されたヒラマキガイ属 3種: 形態と遺伝子情報による解析。陸の水, 74: 43-48.
川瀬基弘, 2015. ヒラマキミズマイマイ, p. 446.in: レッドデータブックなごや 2015 動物編, 504pp. 名古屋市環境局.
川瀬基弘, 2018. なごや生きもの一斉調査・2017~なごやで探そう! 水の中の妖精~淡水貝編 報告書. 40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
守谷茂樹・河辺訓受, 2013. 三重県, 愛知県で確認されたミズコハクガイ。かきつばた, (38): 50-51.
増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水産貝類図鑑 ②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 240pp.

(木村昭一)

ヒラマキガイモドキ *Polypylis hemisphaerula* (Benson in Cantor)

【選定理由】

本種は主に平野部の水田環境に生息する種である。愛知県下の平野部の水田環境は、宅地造成などにより著しく減少している。このほか、稲作の農法の変化により、乾田化が進み生息環境が減少している。本種をはじめとする水田環境に依存する多くの淡水棲貝類は著しい減少傾向にある。

【形態】

殻径 4.5 mm 程度の小型の左巻き種である。殻は平巻き状で茶褐色である。殻内には隔壁を有し、殻頂側に透過され視認できる。殻頂部は深く小さな窪みとなる。殻底部は弧状に膨らみ、多数の螺層の巻きが確認できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、刈谷市三田町（早瀬, 2014.9.15 採集）、新城市（川瀬, 2014）、豊橋市（松岡, 2010）などで分布確認されている。主に平野部での広域の分布を示す。

【世界および国内の分布】

本学名の種のタイプ産地は中国である。これまでは、韓国、台湾などにも分布が知られ、日本国内においても平野部に広い分布傾向が見られるとされていた。しかし、近年、これまでリュウキュウヒラマキガイモドキとして地方型程度に認識されていた個体群は別種とされた（齊藤, 2017）。そして、ヒラマキガイモドキは北海道～本州に分布し、一方、リュウキュウヒラマキガイモドキは山口県、九州～南西諸島、朝鮮半島、台湾に分布するとされ、東アジア一帯に分布する広域分布種とされている（齊藤, 2017）。したがって、ヒラマキガイモドキは日本固有種の可能性が高い。



豊橋市牛川町, 1992年10月11日, 木村昭一採集

【生息地の環境／生態的特性】

多くの場合は、水田内やその周囲の小水路の泥の上や藻類上を這う個体が確認される。他の多くの淡水棲有肺類（水棲上目の種）と同様に、夏季に産卵を繰り返して個体数を急増させる傾向が見られる。冬季は個体数が減少し、殆ど水のない側溝や水溜りなどにおいて、落葉の溜まった堆積下の湿り気のある部分などで冬眠状態の個体を目にすることもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息地においては、現在も多産する場合が多い。直ちに愛知県内から消滅するほどの危機的状況にある種ではないが、近年は、水田の消失あるいは水田環境が水棲生物の生育にとっての悪化傾向にあることは明らかである。県内での本種の生息環境が減少しており、本種も都市部周辺より徐々に見られなくなっている。

【保全上の留意点】

水田や湿地環境が維持されていれば、繁殖力も強く、特に細かな事に留意する必要のない種である。水田環境の減少や乾田化農法が本種の減少の大きな一因となっている。

【特記事項】

山口県、九州～南西諸島の個体群は本種とは別種のリュウキュウヒラマキガイモドキとして区別され、大陸を含めたリュウキュウヒラマキガイモドキと北海道から本州のヒラマキガイモドキとの間には遺伝的分化があることが認められた（齊藤, 2017）。したがって、従来よりもヒラマキガイモドキの絶滅の危険度をより高く考える必要がある。ヒラマキガイモドキが日本固有種であった場合は、現時点で表記している学名の再検討が必要になる。

【引用文献】

- 川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物, pp.1-24. in: 鳳来寺山自然科学博物館(編), 新城市の自然誌 昆虫・動物編, 335 pp. 鳳来寺山自然科学博物館, 新城市.
齊藤 匠, 2017. リュウキュウヒラマキモドキ, p.599. in: 沖縄県環境部自然保護課(編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版 (動物編) —レッドデータおきなわ—, 712 pp. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
松岡敏二, 2010. 第3章 愛知の生物 第4節 愛知の貝類, pp.246-276. in: 愛知県史編さん委員会(編), 愛知県史 別編 自然, 愛知県.

【関連文献】

- 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑 ②汽水域を含む全国の淡水貝類, 240 pp. ビーシーズ, 東京.
財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(早瀬善正)

ドブガイ *Sinanodonta woodiana* (Lea)

【選定理由】

本種の属するイシガイ科貝類は河川の下流域や平野部の用水路などの流れが緩やかで底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。県内ではこのような場所はほとんど破壊されてしまったため、1960年代には広い分布を持ち多産したイシガイ科貝類全体(愛知県科学教育センター,1967)の生息が危機的状況である。本種はイシガイ科貝類としては比較的水質の富栄養化した河川やため池などにも生息できるため、県内における生息場所は木村(1994)を含めて現在約30カ所確認されている。

本種には遺伝的に異なる2種が内包されている(田部・他,1994)。これを根拠に近年、その2種をヌマガイ、タガイとして区別することが多く(学名も今まである学名をあてがえている)、また殻形態でも判別式(関数)を使用して区別を行うとされているが、判別式の精度も個体群によっては著しく低く(近藤・他,2012)、殻形態による区別は容易ではない。正確な同定にはグロキディウム幼生もしくは生化学的な解析が必要である。そこで、本書ではそれらの検討が十分ではなく、かつ過去の記録(標本資料の検討も含めて)もどちらの種に当たるか確認できないので、2種を内包した形での従来通りの学名(属は変更した)及び和名を使用する(本来学名は*Sinanodonta* spp.とするべきではあるが、ドブガイの和名を優先した結果の表記である)。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



安城市鹿乗川, 1990年1月22日, 木村昭一採集

【形態】

日本産イシガイ科貝類としては大型で、河川に生息する個体は殻長10 cm程度であるが、湖沼産の個体は大型になり殻長20 cmを越える個体も稀ではない。生息場所によって殻の大きさや形態も大きく変異する。よく本種はカラスガイ(標準和名としてではない一般的に黒い二枚貝に対する呼び名)と呼ばれることがあるが、本種には主歯も後側歯もなく、後側歯のあるカラスガイ *Cristaria plicata* (Leach) とは全くの別種である。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では河川下流域や平野部の小川や用水路の生息環境は壊滅的で、木村(1994)では8カ所で生息が確認された。河川下流域での生息場所は限られているが、豊田市、岡崎市等の平野部から丘陵地に点在するため池などに生息地点が見つかり、現在約20カ所で生息が確認されている。今後このようなため池を調査すればかなり多くの生息場所が発見される可能性はある。

【世界及び国内の分布】

シベリア、中国、朝鮮、インドシナに分布。国内では北海道から九州の河川下流域、湖沼に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したように河川の下流域や平野部の用水路などの流れが緩やかで底質が砂泥底で比較的水質の良い場所を生息場所とするほか、平野部のため池などに生息している。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述の通り生息地の破壊が深刻で、絶滅が危惧される。

【保全上の留意点】

水質の浄化、無秩序な護岸工事を避けることは当然であるが、イシガイ科貝類はグロキディウム幼生の時期にヨシノボリのような底生淡水魚類に寄生しなければ成長できない。従って、他の淡水生物を含めた生息環境の保全が不可欠である。

【特記事項】

レッドデータブックの評価には過去の標本を殻形態のみで同定して、過去から現在までの変化を検討することが不可欠である。タガイ、ヌマガイを2種として分割して、グロキディウム幼生や軟体部を検討せずに(古い時代の標本に幼生や軟体部が保存されている例はほとんど無い)、殻形態のみで評価することは不確実で、2種を分けて評価することには多くの問題がある。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 豊田市に生息する陸産貝類. 陸の水, 48: 9-16.
近藤高貴・田部雅昭・福原修一, 2006. ドブガイに見られる遺伝的2型のグロキディウム幼生の形態. Venus, 65(3): 241-245.
近藤高貴・田部雅昭・福原修一, 2011. ヌマガイとタガイの殻形態による判別. ちりぼたん, 41(2): 84-88.
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究叢報(第33報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2014. ドブガイ, p. 329. in: レッドデータブックおかげさき 2014, 362pp. 岡崎市.
田部雅昭・福原修一・長田芳和, 1994. 淡水産二枚貝ドブガイに見られる遺伝的II型. 日本貝類学会誌 Venus, 53(1): 29-35.
(木村昭一)

ヒナユキスズメ *Phenacolepas* sp.

【選定理由】

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺などの深く埋もれた転石下に生息する。県内ではヨシ原湿地という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。本種は小型種で、深く埋没した石の下面という特殊な場所に生息する。本種の発見当初は主に内湾奥で生息地が発見されたが、近年は貝類多様性の回復傾向が認められている三河湾の島嶼域の潮通しの良い砂礫干潟の埋没石下面にも健全な個体群が確認できるようになったので、前回(VU)よりランクダウンすべき種と評価された。

【形態】

殻長約 5 mm の小型で扁平な笠型。殻頂は左側に傾く。軟体は紅色で、足の筋肉の中に微小な蓋が埋もれている。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように愛知県での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて3カ所であったが、近年の調査で前島(早瀬・他 2015b)、沖島(早瀬・他 2015a)、梶島(早瀬・他 2016)、佐久島(早瀬・木村, 2020)、河和(早瀬・木村, 2017)で比較的多くの個体の生息が確認された。これらの海域より外洋寄りの日間賀島(早瀬・他, 2019)では生息が確認できなかった。

【世界及び国内の分布】

現在まで未記載種なので、日本でのみ生息情報がある。国内では三浦半島、浜名湖、三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、玄界灘、有明海に分布する(木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地周辺などの 10 cm 以上深く埋もれた石の下面に付着している。生息部位は硫化水素が発生して黒色を呈する還元的な環境である。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地や内湾潮間帯の転石地環境が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地や内湾潮間帯の転石地環境を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

【特記事項】

本種の生きた個体は三河湾汐川干潟で初めて発見され、しばらく分布の東限とされていた。

【引用文献】

- 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54: 44-56.
木村昭一, 2012. ヒナユキスズメ, p. 27. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
早瀬善正・木村昭一・大貫貴清, 2015a. 沖島(三河湾)の転石地潮間帯の貝類相. かきつばた, (40): 23-30.
早瀬善正・大貫貴清・吉川 尚・松永育之・社家間太郎, 2015b. 前島(三河湾)の転石地潮間帯の貝類相 - 特徴的な 16 種の記録. ちりぼたん, 45 (3): 105-122.
早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・川瀬基弘・林 誠司・西 浩孝・守谷茂樹・石井健一郎・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2016. 梶島(三河湾)の潮間帯の貝類相. かきつばた, (41): 27-39.
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島(三河湾)の潮間帯貝類相. かきつばた, (44): 1-15.
早瀬善正・木村昭一, 2017. 河和(三河湾)の内湾潮間帯の貝類相. ちりぼたん, 47 (1-4): 28-42.

(木村昭一)



1: 南知多町河和, 2014年5月16日, 2: 西尾市佐久島, 2017年6月25日, 早瀬善正採集, 3: 豊橋市汐川干潟, 1995年8月3日, 木村昭一採集

コオロギ (コベルトカニモリ) *Cerithium dialeucum* Philippi

【選定理由】

本種は、三河湾湾口部 (一部伊勢湾を含む) で行った潮下帯も含めた海産貝類の調査 (木村, 1995, 1996, 2000) では生貝は記録されず (日間賀島周辺より少数の古い死殻が採集されていたのみ)、1980年から2000年にかけては、三重県側を含めた伊勢湾湾口部でも生息が確認できず、県下にかけて本種の好適な生息環境が存在したのかが判断できないほど個体群が減衰していた時期がある。

2015年に梶島で少数の新鮮な死殻が確認され (早瀬・他, 2016)、その後県下では本種の回復傾向が認められ、佐久島 (早瀬・木村, 2020)、日間賀島 (早瀬・他, 2019)、知多半島南部 (木村, 未発表資料) では潮間帯で健全な個体群が確認されるようになった。しかし、前述の生息地における本種の生息面積は小さく、依然として生息基盤が脅かされている種と評価された。

【形態】

殻長 30 mm、殻は細長い円錐形で螺塔は高い。殻質は厚く、強い縦張筋が不規則にでて、殻表にも大きい疣状の突起も多く並びごつごつしている。殻の色彩は暗褐色の個体から明るい黄色の個体まで変異がある。



西尾市佐久島, 2017年6月24日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

前述のように県内では近年2ヶ所で健全な個体群が認められ、知多半島南部にも生息地が2ヶ所確認されている (木村, 未発表資料)。個体群の明らかな回復傾向が認められる。

【世界および国内の分布】

本種は熱帯インドから西太平洋に広く分布するとされている (長谷川, 2017) が、フィリピン産の個体は、殻が太く疣状の突起が細かく、日本型の個体と同種かどうかは検討を要する。それに対して、中国 (QI, 2004)、朝鮮半島 (関, 2001) の個体は、日本型の個体 (愛知県産個体) と形態的特徴が一致する。日本型の個体は房総半島、男鹿半島から九州まで分布するようである。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は、外洋水の影響のある潮通しの良い内湾から湾口部の、潮間帯中部から潮下帯の転石地や岩礫底の、小型藻類の繁茂した岩盤面に砂がたまった場所に浅く埋もれて生息する (図上段)。生態的特性はほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在県下では生息海域は限定的で、生息地点数も多くない。上述のような本種の生息環境自体が消失したことが一番大きな要因と考えられる。

【保全上の留意点】

本種は著しい個体群の回復傾向が認められるが、今後も本種のモニタリングは重要である。また、上述のような本種の生息環境を保全することが必要である。

【特記事項】

本種の学名は、現在 *Cerithium dialeucum* Philippi, 1849 を使用することが多いが、この学名は従来シロシカニモリの学名として使用され、別種とされていた。現在 *Cerithium kobelti* Dunker, 1877 (コベルトカニモリの和名の由来の学名) は、異名とされている (Houbrick, 1992; 長谷川, 2017)。前述のように中国、韓国、日本に分布する個体と、フィリピンなど南方に分布する個体で殻形態に差異があり、分類学的な検討が必要である。

【引用文献】

- 関德基, 2001. 新原色韓国貝類図鑑. 332pp. 関貝類博物館, 韓国.
早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・川瀬基弘・林 誠司・西 浩孝・守谷茂樹・石井健一郎・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2016. 梶島 (三河湾) の潮間帯の貝類相. かきつばた, (41): 27-39.
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島 (三河湾) の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島 (三河湾) の潮間帯貝類相. かきつばた, (44): 1-15.
長谷川和範, 2017. コベルトカニモリ. in: 奥谷喬司 (編著) 日本近海産貝類図鑑 [第二版]. pp. 100, 788. 東海大学出版部, 平塚.
Houbrick R.S, 1992. Monograph of the genus *Cerithium* Bruguière in the Indo-Pacific (Cerithiidae: Prosobranchia). *Smithsonian Contributions to Zoology*. 510: 1-211.
木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 水産教育研究彙報第34報, pp. 1-12. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 水産教育研究彙報第35報, pp. 1-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類 (予報). かきつばた, (26): 18-20.
QI Zhongyan, 2004. Seashells of China. 418 pp, 193 pls. China Ocean Press, Beijing, China.

(木村昭一)

カニモリ *Rhinoclavis kochi* (Philippi)

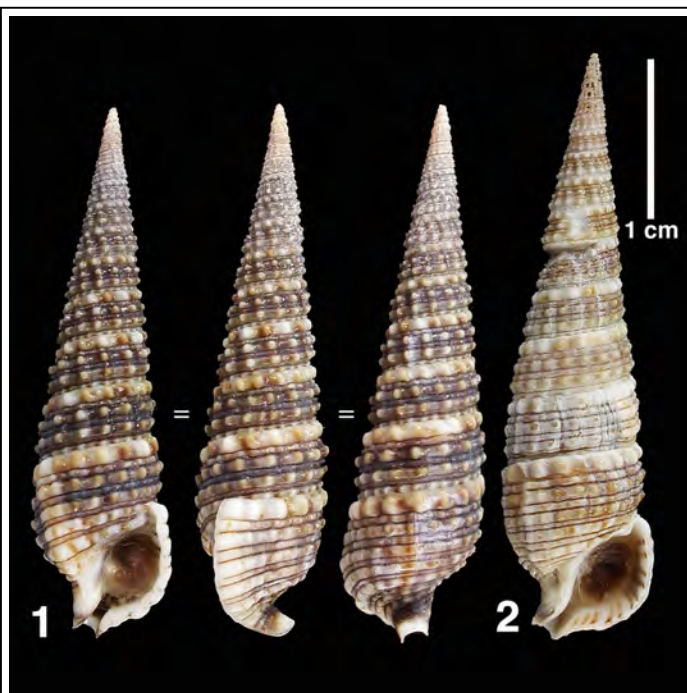
【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は急速に悪化して、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は、かつては多産する普通種であったが(愛知県科学教育センター, 1967)、1990–2000年にかけて著しく生貝の個体数が減少し、新しい死殻は見られるが、生貝が確認できない期間があった。

2006, 2007年に知多半島先端部の数地点で行ったドレッジ調査の結果、健全な個体群を確認し、その後の調査でも外洋水の影響が強い、泥分の少ない砂底では健全な個体群が確認されるようになった。このような回復傾向が認められたので前回(VU)よりランクダウンするべき種と評価された。本種は有機質の少ない砂底の指標種として、モニタリングをすることは重要である。

【形態】

殻長約 40 mm の塔型の貝で、殻頂部は鋭くとがる。殻口は肥厚し、水管は背部へそる。



1: 田原市伊良湖町伊良湖漁港, 2016年10月8日, 2: 南知多町内海沖 (ドレッジ水深15 m), 2001年7月31日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

三河湾湾口部では1994年頃には水深1 mほどの砂底で非常に新鮮な死殻が多数見られたが、すでに生貝が採集できなかった(木村, 1995, 1996)。1998年からの調査では新鮮な死殻もほとんど採集されず(木村, 2000)、2001年のドレッジ調査で知多半島内海沖の水深15 mの砂泥底より生貝3個体が採集された。2006, 2007年における同所のドレッジ調査の結果、健全な個体群を確認した。近年では伊良湖漁港周辺でも健全な個体群が確認されている(木村, 2017)。

【世界及び国内の分布】

日本、インド、西太平洋。国内では房総半島から九州まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内では10年間以上生貝が確認できなくなるほど減少したが、近年明らかな回復傾向が認められる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

葉山しおさい博物館(2001)では相模湾の個体群が消滅寸前にランクされていたが、近年著しい回復傾向が確認されている(河辺, 2010; 木村, 2005及び未発表資料)。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.
千葉県, 2000. 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック動物編. 438pp.
河辺訓受, 2010. 神奈川県逗子海岸の貝類相. かきつばた, (35): 1–16.
木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第34報): 16–27. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3–19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18–20.
木村昭一, 2005. 逗子海岸で大量に打ち上げられたカニモリガイの生貝. かきつばた, (31): 41.
木村昭一, 2017. 伊良湖漁港内で採集された貝類. かきつばた, (42): 6–12.

(木村昭一)

ウミナ *Batillaria multiformis* (Lischke)

【選定理由】

本種の属するウミナ科貝類は県内にホソウミナ *Batillaria attramentaria* (Sowerby I)、ウミナ、イボウミナ *Batillaria zonalis* (Bruguière) の3種があり、ともに内湾の泥干潟の表面に生息している。東京湾や三浦半島ではホソウミナ以外の2種に著しい減少傾向が認められる(葉山しおさい博物館, 2001; 木村・福田, 2012)。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999; 木村・福田, 2012)。また、生息場所が直接破壊されなくても減少する例が確認されており、注意を要する。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長約 35 mm の塔型で殻は厚く、よく成長した個体の殻口は肥厚し、内唇の滑層は肥厚する。ホソウミナと近似するが殻が太く、内唇の滑層が肥厚する点などで区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて現在約 20 カ所である。生息場所では群生し、個体数は多い。特に汐川干潟では大きな個体群が残されている。その反面、近年庄内川河口では全く生息が確認できない。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、国内では北海道南部から九州に分布する(木村・福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような泥干潟が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したような泥干潟を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

【特記事項】

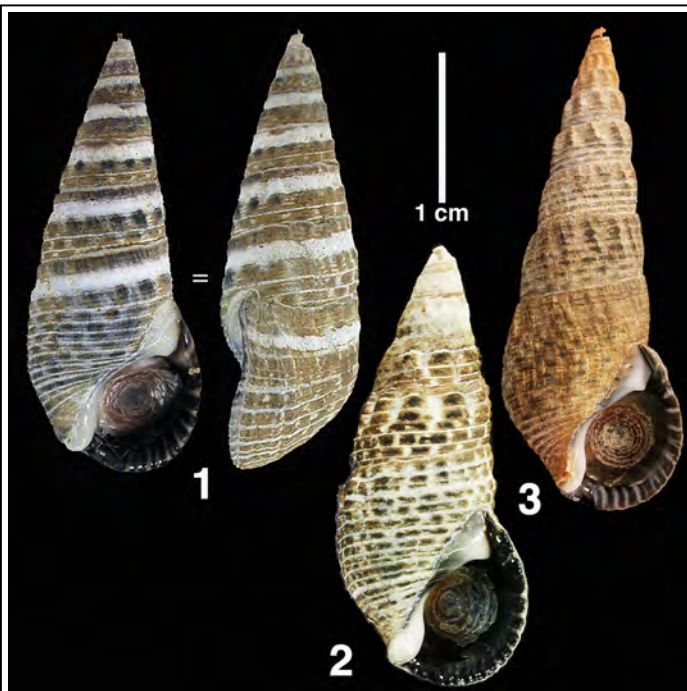
水産資源保護協会(1995)では減少傾向にランクされた。葉山しおさい博物館(2001)では相模湾の個体群が消滅寸前にランクされている。

レッドデータブックなごや2010(木村, 2010)では、本種と正しく同定された愛知県産の標本が図示されていたが、レッドデータブックなごや2015(木村 加筆 川瀬, 2015)では三重県尾鷲市産のホソウミナが図示されているので、ここに訂正する。

【引用文献】

- 葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌 54: 44-56.
木村昭一, 2004. ウミナ, p. 274. in: レッドデータブックなごや2004 動物編, 368pp. 名古屋市環境局.
木村昭一 加筆 川瀬基弘, 2015. ウミナ, p. 396. in: レッドデータブックなごや2015 動物編, 503pp. 名古屋市環境局.
木村昭一・福田 宏, 2012. ウミナ, p. 31. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
水産資源保護協会, 1995. 軟体動物. 日本の希少な野生水産物に関する基礎資料(II), 131pp.

(木村昭一)



1: 幡豆郡鳥羽干潟, 2001年7月15日, 2: 西尾市佐久島, 2017年6月24日, 3: 豊橋市梅田川河口, 2015年7月4日, 木村昭一採集

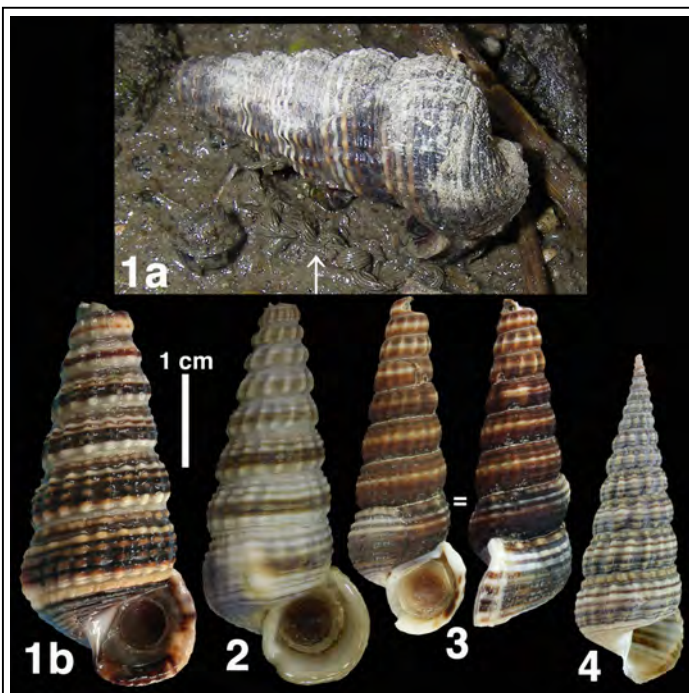
フトヘナタリ *Cerithidea moerchii* (A. Adams in Sowerby II)

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に生息し、特にヨシ原群落内に高密度で生息する。県内ではヨシ原湿地という生息環境自体が護岸工事や埋め立てにより著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。県内のヨシ原湿地が良く保全されている河口域には健全な個体群が認められるが、ヨシ原湿地が完全に消失すると本種は生息できなくなる。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長約 40 mm の円筒形で、殻頂部分は成長にともなって欠落する。殻表は粗い布目状で殻口は反転して肥厚する。幼貝(図 4)では殻頂が保存され、殻口は肥厚せず、殻の外見から受ける印象は大きく異なる。蓋は円形で革質。殻の大きさは、県内でも生息地によって変異がある。庄内川河口の個体群(図 1, 2)は、殻が大きく、殻質が厚い。



1, 2: 1a ↑卵嚢, 名古屋市庄内川河口, 2008年7月13日, 3: 矢作川河口, 2017年6月22日, 4: 幼貝, 宝飯郡佐奈川河口, 1994年8月1日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて現在約 20 カ所である。現在でもヨシ原湿地が残されていれば、かなりまとまった個体数が生息しており、特に三河湾汐川干潟では大きな個体群が残っている。庄内川河口の個体群は護岸工事等で著しく減少していた(木村, 2004)が、近年回復傾向が認められる。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、インド・太平洋、国内では東北地方～九州、南西諸島に分布する(木村・福田, 2012)。イトカケヘナタリは、南西諸島に分布する小型の地域個体群である(木村・福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようにヨシ原湿地、特にヨシ原群落内に多く生息する。夏に底質上に泥で固めた紐状の卵嚢(図 1a の矢印)を産む。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

【特記事項】

葉山しおさい博物館(2001)では相模湾の個体群が消滅にランクされている。

【引用文献】

- 葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌 54: 44-56.
木村昭一, 2004. 名古屋市より採集されたフトヘナタリの生貝. かきつばた, (30): 34-35.
木村昭一・福田 宏, 2012. フトヘナタリ, p. 29. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

ヘナタリ *Pirenella nipponica* Ozawa et Reid in Reid et Ozawa

【選定理由】

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺や、それより下部の泥干潟の表面に生息する。県内ではヨシ原湿地や泥干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長約 30 mm の塔型で、よく成長した個体の殻口は肥厚し、外唇は下部が水管部へのびる。



幡豆郡鳥羽干潟, 2001年7月15日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて現在約 10 カ所である。生息場所では群生し、個体数は多い。特に汐川干潟では大きな個体群が残されている。庄内川河口では、フトヘナタリは回復傾向が認められるが、本種の古い死殻は採集されるものの、生息は確認できない。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、インド・西太平洋、国内では房総・北長門海岸～九州、南西諸島に分布する(福田・木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

県内では、上述したようなヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息している。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地や内湾奥の泥干潟が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地や泥干潟を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

【特記事項】

葉山しおさい博物館(2001)では相模湾の個体群が消滅にランクされている。

【引用文献】

葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.

木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌 54: 44-56.

福田 宏・木村昭一, 2012. ヘナタリ, p. 29. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

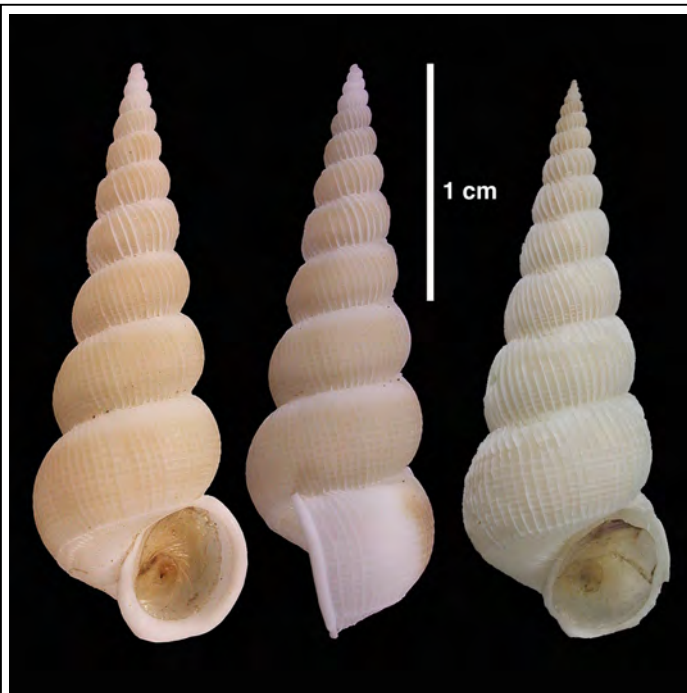
クリンイトカケ *Amaea thielei* (de Boury)

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯砂底にすむ。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖で生貝が採集されているが、個体数は非常に少ない(木村, 1996a,b; 木村, 1999; 木村, 2000)。和田ほか(1996)では、希少とランクされている。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長約 25 mm の高い塔型で、殻は白色から薄いクリーム色で殻質は薄い。殻表は細かい布目状彫刻がある。殻口は太い縦張肋で肥厚した状態になる個体(図左、中央)が多いが、不規則に太い縦張肋ができた後にも成長する個体、大型個体でも殻口に縦張肋が出ることがなく、殻口が肥厚しない個体(図右)など変異に富む。蓋は革質で淡黄褐色。



南知多町日間賀島南沖(ドレッジ水深 2-4 m), 1994 年 10 月 10 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように湾口部を中心に生貝は確認されているが、死殻は名古屋港沖、蒲郡市沖でも採集されている。いずれにしても生息地は少なく、生貝の個体数も非常に少ない。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、国内では房総半島以南から九州まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように現在でも生貝が少数採集されているが、三河湾奥(蒲郡市沖)では古い死殻が稀に採集されるのみで、生息状況は確実に悪化している。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 木村昭一, 1996a. クリンイトカケガイとコガタクリンイトカケガイの分類学的再検討(腹足類・盤足目:イトカケガイ科). ユリヤガイ, 4 (1・2): 103-108. 山口県貝類研究談話会.
木村昭一, 1996b. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

クレハガイ *Epitonium clementinum* (Grateloup)

【選定理由】

本種は内湾奥の潮下帯砂泥底にすむ。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は豊川河口域、三河湾奥(蒲郡市沖)、日間賀島南沖などで生貝が採集されているが、個体数は非常に少ない(木村, 1996; 松岡ほか, 1999)。その後の調査で名古屋港沖(木村, 2010)、三河湾島嶼域(早瀬・木村, 2020)等で生息が確認されたが、生貝の個体数は非常に少ない。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



名古屋市名古屋港沖(ドレッジ水深 6 m), 2008 年 10 月 10 日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約 15 mm の低い塔型で、殻は白色で螺層は良く膨れ、3 本の褐色帯がある。殻表にはやや強い縦肋があり光沢がある。蓋は革質で褐色。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように生息地、個体数は非常に少ない。

【世界及び国内の分布】

日本、西太平洋、国内では房総半島・佐渡島～九州まで分布する(木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように現在でも生貝が少数採集されているが、生息場所、個体数とも明らかに減少している。

【保全上の留意点】

上述したように県内潮下帯の環境を保全する。本種はアマモ場周辺で生息が確認されているので、アマモ場も同様に保全することが必要であろう。

【引用文献】

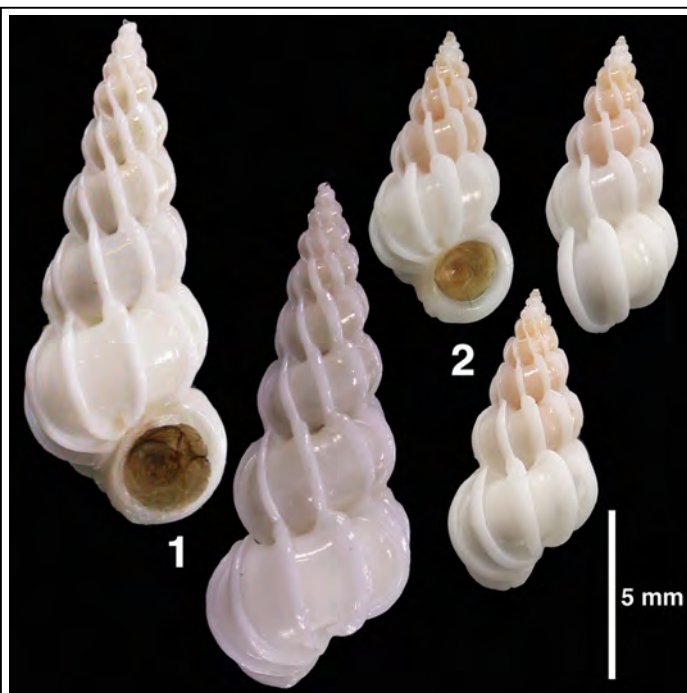
- 早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2012. クレハガイ, p. 62. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野
松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己, 1999. 豊川下流域の貝類相. 豊橋市自然史博物館研究報告, 9: 15-24
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

シノブガイ *Epitonium gracile* (Sowerby II)

【選定理由】

本種は内湾奥の潮下帯砂泥底にすむ。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は三河湾奥（蒲郡市沖）、三河湾口部などで生貝が採集されているが、個体数は少ない（木村，1996；木村，2000）。その後の調査で、知多半島伊勢湾側をドレッジにより調査したが、生息する面積は小さく、生貝の個体数は少なかった。また、佐久島（早瀬・木村，2020）でも生貝が採集されたが、個体数は非常に少ない。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



1: 蒲郡市三河大島沖(ドレッジ水深 2-10 m), 2002 年 5 月 23 日,
2: 南知多町内海沖(ドレッジ水深 2-5 m), 2000 年 7 月 28 日,
木村昭一採集

【形態】

殻長約 10 mm の高い塔型で、殻は白色で殻質は厚い。殻表には強い縦肋があり光沢がある。蓋は革質で淡黄褐色。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように生息地、個体数は非常に少ない。

【世界及び国内の分布】

日本、台湾。国内では房総半島以南から九州まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように現在でも生貝が少数採集されているが、生息地、個体数とも明らかに減少している。

【保全上の留意点】

上述したように県内潮下帯の環境を保全する。本種はアマモ場周辺で生息が確認されているので、同様に保全することが必要であろう。

【特記事項】

本種の学名は *Epitonium (Nitidiscala) angustum* (Dunker, 1861) という見解がある（石川，2017）。

【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一，2020. 佐久島（三河湾）の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
石川 裕，2017. シノブガイの学名は *Epitonium (Nitidiscala) angustum* (Dunker, 1861) である. まいご, (24): 24-26.
木村昭一，1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一，2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

(木村昭一)

セキモリ *Epitonium robillardi* (Sowerby III)

【選定理由】

本種は内湾奥の潮下帯砂泥底にすむ。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は豊川河口域、三河湾奥（蒲郡市沖）などで生貝が採集されているが、個体数は非常に少ない(木村, 1996；松岡ほか, 1999)。その後の調査で名古屋港沖（木村, 2010）、三河湾島嶼域（早瀬・木村, 2020）等で生息が確認されたが、生貝の個体数は非常に少ない。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



1, 2: 西尾市佐久島, 2016年6月4日, 3: 蒲郡市三河大島沖(ドレッジ水深 2-5 m), 2002年5月23日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約 15 mm の低い塔型で、殻は白色で螺層に褐色の色帯がある。殻表はやや強い縦肋がある。蓋は革質で濃褐色。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように生息地、個体数は非常に少ない。

【世界及び国内の分布】

日本、西太平洋。国内では房総半島・佐渡島～九州まで分布する（木村, 2012）。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように現在でも生貝が少数採集されているが、生息場所、個体数とも明らかに減少している。

【保全上の留意点】

上述したように県内潮下帯の環境を保全する。本種はアマモ場周辺で生息が確認されているので、同様に保全することが必要であろう。

【特記事項】

レッドデータブックなごや 2010（木村, 2010）では、本種と正しく同定された名古屋港沖産の生貝標本が図示されていたが、レッドデータブックなごや 2015（木村 加筆 川瀬, 2015）では他産地の死殻標本に差し替えられている。その地で採集された貝類の画像はレッドデータブックの大きな資料（データ）の一つなので、他産地や状態の悪い標本は使用しないことが望ましい。

【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島（三河湾）の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2010. セキモリ, p. 211. in: レッドデータブックなごや 2010 (2004 年版補遺), 316pp. 名古屋市環境局.
木村昭一, 2012. セキモリ, p. 63. in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
木村昭一 加筆 川瀬基弘, 2015. セキモリ, p. 443. in: レッドデータブックなごや 2015 動物編, 503pp. 名古屋市環境局.
松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己, 1999. 豊川下流域の貝類相. 豊橋市自然史博物館研究報告, 9: 15-24

(木村昭一)

モロハタマキビ *Lacuna carinifera* A. Adams

【選定理由】

三河湾の個体群について、生息記録と共に形態特徴と生活史についての報告がある(早瀬・他, 2013, 2016; 早瀬・吉川, 2016)。三河湾奥部(蒲郡市沖)から湾口部(南知多町沖)の干潟から潮下帯のアマモの葉上など海産植物に付着して生息する。ほぼ1年生の種であり、冬から早春に大型個体が見られる。県下のアマモ場の面積は明らかに減少しているため、本種の生息基盤も脆弱である。また、アマモ場以外に初期生活史において海藻藻場の存在も重要な種であるため、この両者を具えた環境が減少していることも本種の生涯を通して生息できる環境が失われていることに直結している。個体群の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられ、本種は将来的に絶滅の危険性を考慮すべき種と判断される。

【形態】

冬季の成熟個体は、殻長10mm前後の大形個体となる。殻は円錐形で、幼層の縫合は深くくびれる。緑褐色で、成貝の殻の周縁には成長線に沿った茶褐色の縞模様が見られる。殻表はほぼ平滑で弱い成長脈がある程度。胎殻はきわめて小さく、幼層も小さいので、殻頂部はやや尖る。周縁は強く角張り、キールとなる。臍孔は狭く周囲には強い角を生じる。蓋は薄く淡黄色、革質で少旋型である。軟体は頭触角を除く頭部と足の先端部が黒色に彩色される。雄は基部が黒色に彩色された鎌状に曲がる細長い陰莖を有する。歯舌は、中歯、側歯、内縁歯、外縁歯より構成され、形状は発達段階で変化が生じて一定しない特徴を有する。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内の分布域は比較的広く、三河湾の沿岸域のほぼ全域や伊勢湾の一部地域(常滑市)に分布するが、確認される殆どが小形の幼貝であり、成貝が確認される場所はきわめて少なく、良好なアマモ場が残されている海域に限定される。

【世界および国内の分布】

日本を分布の中心とするが、朝鮮半島にも分布する。日本では北海道南部以南、瀬戸内海、九州北部までの内湾域のアマモ場環境に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

上述のとおり生息環境は良く保全されたアマモ場に限られる。ほぼ1年生の種と考えられ、冬から早春に大型個体を確認される。本種は冬から春にかけて長径3mm程度の楕円ドーム状の卵囊(1卵囊に3300卵ほどが確認される)をアマモ葉上に産み付ける。浮遊幼生(ベリジャー幼生)期間を持つ。新規加入は春であり、稚貝は狭い範囲内の大形海藻に数百~数千個体付着する例も確認されている。10月頃まで殻サイズにおいては殆ど成長することなく、小形のまま様々な海産植物上で確認される。その際の植物間の移動には長く伸ばした粘液糸を潮流に乗せて長距離移動すると考えられている。秋から冬にかけて急激に成長し、アマモ葉上のみで確認される様になり、交尾、産卵を行う。春以降は成貝が確認されず、死滅するものと考えられる(早瀬・他, 2013, 2016; 早瀬・吉川, 2016)。本種は、このような生活史であるために、個体数の月毎の変動も大きく、生息状況のモニタリングには毎年の観測月を同一にするなどの注意を要する。

【現在の生息状況／減少の要因】

西尾市東幡豆町のアマモ場などでは現在も個体群が維持されているが、全ての生活史を通して本種を確認することができる環境は、県内では場所が限られている。本種の最も大きな減少要因は、アマモ場の消失である。ただし、アマモ場さえあれば本種が生息できるわけではなく、隣接する健全な海藻藻場の存在も重要であり、水質悪化など他の要因も考慮する必要がある。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。特に本種の生息基盤としてのアマモ場を含めた、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【特記事項】

小形のセトウチヘソカドタマキビ *L. setonaikaiensis* とされた個体群は、瀬戸内海個体群に過ぎず、本種の異名である(福田, 2012)。

小卵多産型で浮遊幼生期を持つため、新規加入時期には、きわめて多数の稚貝が確認されるが、成熟個体は著しく減耗する。したがって、幼貝の確認個体数のみにより、本種個体群の健全性を判断することは困難であるので、注意すべきである。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. モロハタマキビ(セトウチヘソカドタマキビ), p.34. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 早瀬善正・中島 匠・種倉俊之・吉川 尚・松永育之, 2016. 三河湾に生息するモロハタマキビの形態的特徴と初期生活史, ちりぼたん, 45(4): 214-226.
- 早瀬善正・種倉俊之・松永育之・長谷川貴大・山崎喬之・野場俊樹・神谷武之・吉川 尚, 2013. 三河湾に生息するモロハタマキビの形態的特徴と生活史(学会発表講演要旨), Venus, 71(1-2): 150.
- 早瀬善正・吉川 尚, 2016. 藻場の葉上巻貝類, pp.154-163. in: 石川智士・吉川 尚(編), 幡豆の海と人びと, 口絵14+xvii+362pp.+v. 総合地球環境学研究所, 京都.

【関連文献】

- 木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報), かきつばた, (26): 18-20.
- 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(早瀬善正・木村昭一)



左上: 南知多町日間賀島南沖(ドレッジ水深2-4 m), 1995年3月20日, 木村昭一採集, 右上, 左下: 西尾市前島, 2012年1月18日, 早瀬善正採集

カスミコダマ *Natica buriasiensis* Récluz

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。現在、県内の干潟で生貝が確認されている場所はない。三河湾・伊勢湾の湾口部では、潮下帯より死殻が少数採集されている程度で生貝が採集されることはほとんど無い。内湾域の個体群の生息状況は危機的である。ただし、本種は渥美外海の潮下帯では継続的に生貝が確認されているので、直ちに絶滅する可能性は低いとは考えられるが、将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長約 10 mm、ほぼ球形の巻貝で殻表は光沢が強い。殻表には茶褐色の幾何学模様から雲状の模様があるが、成長段階や個体によって変異がある。外唇はクリーム色、殻軸、内唇は濃褐色。蓋は石灰質で白色、表面に弱い螺肋が多数ある。他の貝類の殻に孔を開けて食べる肉食性。



渥美半島伊良湖沖(トロール漁, 1992年8月, 木村昭一採集)

【分布の概要】

【県内の分布】

県内の内湾域での分布域は三河湾・伊勢湾湾口部に限られ、生貝は極めて稀である。渥美外海の潮下帯の砂底からは継続的に生貝が確認されている。

【世界および国内の分布】

インド洋、太平洋に広く分布し、国内では相模湾から九州の内湾から湾口部に分布する。現在、潮間帯で健全な個体群が確認されているのは、九州西岸の狭い範囲に限られている(福田・木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

潮通しの良い砂底に生息し、本種が生息する海域は貝類の多様性も高い場合が多い。元々愛知県の干潟で生息が確認されていたかどうかは不明であるが、九州西岸では現在も干潟域で生息が確認されている。渥美外海の浅海域で操業する底引き網に入網したヒトデ類の胃中より生貝が採集されるが、生息海域は限られており、かつ個体数は少ない。生態的な特性についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。内湾域での著しい減少の要因としては、本種が潮通しの良い、泥分の少ない砂底に生息することから、水質汚濁、底質環境の泥質化、有機物量の増加などが考えられる。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。特に、本種の生息基盤としての泥分の少ない砂底を含めた、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【引用文献】

福田 宏・木村昭一, 2012. カスミコダマ, p.58. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.

【関連文献】

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

(木村昭一)

フロガイダマシ *Naticarius concinnus* (Dunker)

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。現在、県内の干潟で生貝が確認されている場所はない。三河湾・伊勢湾の湾口部では潮下帯より死殻は比較的普通に採集されているが、生貝が採集されることは稀。内湾域の個体群の生息状況は深刻である。ただし、本種は渥美外海の潮下帯では継続的に生貝が確認されているので、直ちに絶滅する可能性は低いとは考えられるが、将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長約 15 mm、ほぼ球形の巻貝で殻質は厚く、殻表は薄い殻皮で被われていて、光沢は無い。殻表には螺旋に沿って濃茶褐色の雲状の模様の帯が 2 本あり、その間の色彩は帯状に褐色になる。殻底部はクリーム色で、外唇、内唇もクリーム色。蓋は石灰質で厚く白色、表面に強い螺肋がある。



南知多町内海沖(ドレッジ水深 2-5 m), 2015 年 9 月 22 日,
木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内の内湾域での分布域は三河湾及び伊勢湾湾口部に限られ、死殻は比較的普通に採集されるが、生貝は稀 (木村, 1995; 1996)。2015 年の知多半島沖 (伊勢湾側) のドレッジ調査でも生貝が複数個体採集された (上図)。渥美外海の潮下帯の砂底からは継続的に生貝が確認されている。

【世界および国内の分布】

日本、朝鮮半島に分布する。国内では房総半島から九州の内湾から湾口部に分布する。瀬戸内海ではタマガイ科中最も減少傾向が著しい種として報告された (福田・木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

潮通しの良い砂底に生息し、本種が生息する海域は貝類の多様性も高い場合が多い。渥美外海の浅海域で操業する底引き網に入網したヒトデ類の胃中より生貝が採集されるが、生息海域は限られており、かつ個体数は少ない。他の貝類の殻に孔を開けて食べる肉食性であること以外、生態的特性についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。内湾域での著しい減少の要因としては、本種が潮通しの良い、泥分の少ない砂底に生息することから、水質汚濁、底質環境の泥質化、有機物量の増加などが考えられる。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。特に、本種の生息基盤としての泥分の少ない砂底を含めた、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【引用文献】

- 福田 宏・木村昭一, 2012. フロガイダマシ, p.59. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.
- 木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
- 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

【関連文献】

- 木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類 (予報) . かきつばた, (26): 18-20.

(木村昭一)

クリイロカワザンシヨウ *Angustassiminea castanea* (Westerlund)

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に分布する。県内ではヨシ原湿地自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長約 5 mm の小型種。カワザンシヨウガイ科は小型種が多く形態的にも近似しているが、本種は螺塔が高く、殻の濃い栗色が特徴である。小型の個体は、ヨシダカワザンシヨウ "*Assiminea*" *yoshidayukioi* Kuroda やサツマクリイロカワザンシヨウ *Angustassiminea satumana* (Habe) と区別が難しいが、臍孔がないことでヨシダカワザンシヨウと、足の色彩が黒褐色であることでクリーム色のサツマクリイロカワザンシヨウと区別できる。



【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村 (1999) を含めて、約 20 カ所生息地がある。生息地では群生することが多い。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。陸奥湾～種子島にかけて分布する (福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地周辺の落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。湿度が高いときにはヨシなどにも登る。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. クリイロカワザンシヨウ, p. 46. in : 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌 54: 44-56.

(木村昭一)

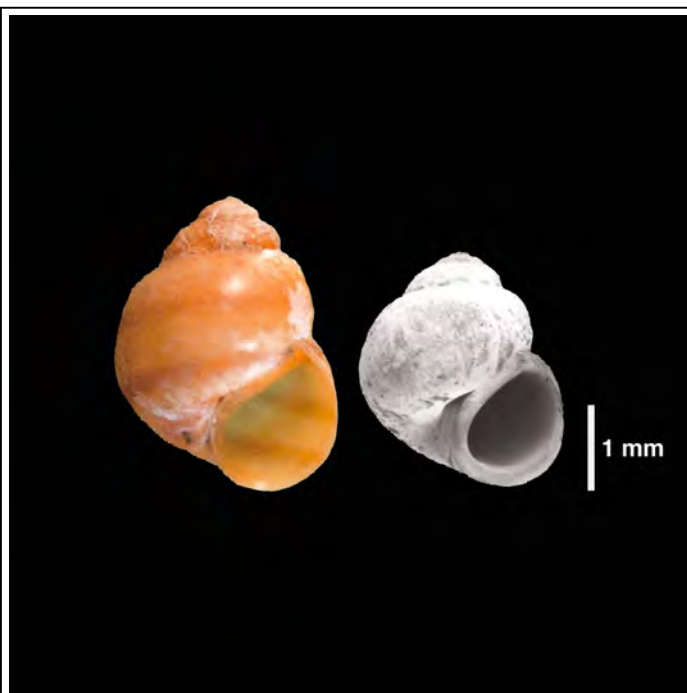
ツブカワザンショウ *Assiminea estuarina* Habe

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に分布する。本種はヨシ原内より下部の砂利や転石があるところに多い。県内ではヨシ原湿地やその周辺が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長約 4 mm の小型種。カワザンショウガイ科は小型種が多く、形態的にも近似していて同定は難しい。本種はカワザンショウガイ *Assiminea japonica* Martens の小型個体や幼貝と近似するが、殻質が厚く螺塔は低く卵形から球形、非常に狭いが臍孔が開く個体が多い。



宝飯郡佐奈川河口, 1998年3月11日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて、約 10 カ所生息地がある。生息地では群生することが多いが、その範囲は狭い。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。宮城県志津川湾～九州、奄美大島、沖縄島に分布する(福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地周辺の砂利や転石上に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地やその周辺が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地と周辺部を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

【引用文献】

福田 宏, 2012. ツブカワザンショウ, p. 48. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌 54: 44-56.

(木村昭一)

ヒナタムシヤドリカワザンショウ *Assiminea* aff. *parasitologica* Kuroda

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に分布する。県内ではヨシ原湿地自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。

従来、本州～九州でムシヤドリカワザンショウとされてきたものは多くの場合は本種である(福田, 2012)。北海道と日本海側の一部に分布するムシヤドリカワザンショウ *Assiminea parasitologica* Kuroda とは分子系統解析の結果別種であることが判明したため、和名が新称された(福田, 2012)。本種はムシヤドリカワザンショウより殻表の光沢がより強く、色彩も鮮明なことより、和名のヒナタ「日向」がつけられた(福田, 2012)。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



汐川干潟, 2001年8月5日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約 5 mm の小型種。カワザンショウガイ科は小型種が多く、形態的にも近似していて同定は難しい。本種は螺塔がやや高く、貝殻の色彩が赤く、縫合付近に黄色い帯が入るので区別できる。臍孔はない。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて、約 15 カ所生息地がある。生息地では群生することが多いが、近年個体数が減少傾向にある生息地が多く確認されている。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。本州(陸奥湾以南)～九州の太平洋岸、瀬戸内海、九州西岸(博多湾～鹿児島、有明海を含む)に分布する(福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地周辺の落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。湿度が高いときにはヨシに登る。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

【引用文献】

福田 宏, 2012. ヒナタムシヤドリカワザンショウ, p. 48. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌 54: 44-56.

(木村昭一)

カワグチツボ *Fluviocingula elegantula* (A. Adams)

【選定理由】

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺や、それより下部の泥干潟の表面に生息する。県内ではヨシ原湿地や泥干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる（木村・木村, 1999）。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻は殻長約 5 mm と小形で、長卵形。臍孔は狭いが開く、蓋は革質で薄い。近似種のワカウラツボ *Wakauraia sakaguchii* (Kuroda & Habe) とは臍孔が開く点、殻が薄い点などで区別される。



豊橋市汐川干潟, 2001年8月5日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村（1999）を含めて現在約 10 か所である。生息場所では群生し、個体数は多い場合が多い。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、ロシア沿海州、日本では北海道北部～九州に分布する（福田, 2012）。

【生息地の環境／生態的特性】

県内では上述したようなヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息している。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地や内湾奥の泥干潟が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地や泥干潟を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

【特記事項】

庄内川河口域ではワカウラツボと本種の共に健全な個体群が認められているが、生息環境は前者が潮間帯上～中部の埋もれ石の下面、後者はやや下部の泥干潟の表面にエドガワゴマツボ *Stenothyra edogawensis* (Yokoyama) と同所的に生息している（木村, 2000）。

【引用文献】

福田 宏, 2012. カワグチツボ, p. 38. in : 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 385pp. 東海大学出版会, 秦野.

木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌 54: 44-56.

木村昭一, 2000. 藤前干潟で採集されたワカウラツボ. かきつばた, (27): 14-16.

(木村昭一)

エドガワミズゴマツボ *Stenothyra edogawaensis* (Yokoyama)

【選定理由】

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺や、それより下部の泥干潟の表面に生息する。県内ではヨシ原湿地や泥干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



上段: 名古屋市庄内川河口, 2008年7月13日, 下段: 豊橋市汐川干潟, 2001年8月5日, 木村昭一採集

【形態】

殻は殻長約 2 mm と微小であるが、殻質はやや厚く堅固。殻は体層に向かって下ぶくれの卵形。十分に成長した個体では殻口は狭まり円形。蓋は石灰質で厚い。臍孔はない。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村 (1999) を含めて現在約 15 カ所である。生息場所では群生し、個体数は多い場合が多い。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。宮城県万石浦・若狭湾～九州まで分布する(福田, 2012)。沖縄島から近似した個体が知られているが同種か否かは検討の余地があり、朝鮮半島からの記録は未記載種トライミズゴマツボ *S. sp.* の誤同定である(福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

県内では上述したようなヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息している。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地や内湾奥の泥干潟が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地や泥干潟を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

【特記事項】

県内では、庄内川河口域(木村, 2000)のように潮間帯中部から下部の泥干潟の表面にカワグチツボ *Fluviocingula elegantula* (A. Adams) と同所的に生息している場合が多い。本種にはウミゴマツボ、ミヤジウミゴマツボ、ミジンウミゴマツボ、ミヤジマウミゴマツボの別名がある。

【引用文献】

福田 宏, 2012. エドガワミズゴマツボ, p. 44. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌 54: 44-56.

木村昭一, 2000. 藤前干潟で採集されたワカウラツボ. かきつばた, (27): 14-16.

(木村昭一)

ナギツボ *Vitrinella* sp.

【選定理由】

2013年5~7月に行われた調査により、前島(三河湾)において愛知県下で初めて生息が確認された(早瀬・他, 2015b)。三河湾ではその後、沖島(早瀬・他, 2015a)、梶島(早瀬・他, 2016)、佐久島(早瀬・木村, 2020)、日間賀島(早瀬・他, 2019)や河和(知多湾)(早瀬・木村, 2017)でも生息が確認されている。伊勢湾側では、南知多町内海海岸(佐藤・他, 2019)での生息確認記録がある。生息環境が特殊かつ限定的で、個体数密度がそれほど高くない種である。三河湾での分布範囲は比較的広いものの、生息場所は潮間帯下部を中心とする転石地の埋没石下の還元的環境に限定されており、きわめて狭い範囲である。そのため、閉鎖的内湾での夏季の貧酸素水塊の発生や海域の富栄養化に伴う海底のヘドロ化、浅海域の開発などの環境悪化も懸念されることから、愛知県下では、将来的に絶滅の危険性を考慮すべき種と考えられる。

【形態】

殻長 1.6 mm、殻径 1.3 mm 程度の卵形の微小種である。殻はきわめて薄く、生時は無色透明(死後は白色)で、殻表は平滑で光沢を有し、彫刻は全く見られない。蓋は淡黄色の革質できわめて薄く、少旋型で水滴形である。軟体は白色で、細い頭触角を有し基部外側に小さな黒色の眼を有するが、匍匐時は大抵、殻の下側に眼が位置しており、殻を透過して確認される。吻は短い筒状で、先端部は口球の淡紅色が透過される。腹足後端は深く2分岐し、分岐の中央に細く短い後足触角を有する。匍匐時は、体右側の殻口付近より細く短い1本の外套触角が確認される。



上段: 南知多町河和, 2014年5月16日, 下段: 西尾市沖島, 2014年7月12日, 早瀬善正採集

【分布の概要】

【県内の分布】

三河湾では、前島、沖島、梶島、佐久島、日間賀島および、河和の河口域(知多湾)の潮間帯より生息記録が知られる(早瀬・他, 2015a,b, 2016, 2019; 早瀬・木村, 2017, 2020)。伊勢湾では、南知多町内海海岸(佐藤・他, 2019)の生息確認記録が知られる。

【世界および国内の分布】

国外での分布は明らかになっていない。伊豆半島、浜名湖、英虞湾、紀伊水道、瀬戸内海、九州西岸に分布する(福田, 2012)とされる。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、潮間帯の転石地である。三河湾では、湾奥から日間賀島まで分布し、陸地からの僅かな淡水の滲出があるような環境に分布が限定されていると考えられる。伊良湖岬などの清浄な砂浜からなる外洋の転石地環境では全く確認されていないことより、本種は内湾的要素が強いものの、外洋水の影響もある潮間帯の転石地の埋没石の下のみ生息する種と考えられる。深く埋没した石の下面のみに附着し、生息空間として海水の循環があり酸素の流通がある付着場所以外は、黒色の硫化物からなる還元的環境に生息する。特殊生息環境に棲む種(福田, 2012)とされる。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、三河湾の潮間帯転石地や伊勢湾の一部で生息確認されている。現時点では、三河湾においては、広域に個体群が維持されていると考えられる。最近になり愛知県下での存在が確認された種であり、明確な減少傾向が確認されてはいないが、潮間帯転石地は、愛知県では島や海岸部での護岸や開発などにより広範囲で消失している。これらの行為が本種の生息環境を減少させたことは間違いないものと考えられる。本種の生息場所は、きわめて狭く局所的な微環境であり、周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

【保全上の留意点】

本種の生息が確認される地域の転石地の微環境を維持することが最も重要である。

【特記事項】

本種は発見時、フロリダツボ科(改称前はサザナミツボ科) Elachisinidae の *Elachisina*? 属に所属すると考えられたが(福田, 2001)、近年ではイソコハクガイ科の所属(福田, 2012)とされる。

【引用文献】

- 福田 宏, 2001. 内湾の貝類「最後の楽園」周防灘 - そして私たちがなすべきこと, 日本ベントス学会誌, 56: 33-41.
 福田 宏, 2012. ナギツボ, p.43. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, xvii + 285 pp. 東海大学出版会, 秦野.
 早瀬善正・木村昭一, 2017. 河和(三河湾)の内湾潮間帯の貝類相, ちりぼたん, 47(1-4): 28-42.
 早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相, ちりぼたん, 50(1): 33-79.
 早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・川瀬基弘・林 誠司・西 浩孝・守谷茂樹・石井健一郎・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2016. 梶島(三河湾)の潮間帯貝類相, かきつばた, (41): 27-39.
 早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島(三河湾)の潮間帯貝類相, かきつばた, (44): 1-15.
 早瀬善正・木村昭一・大貫貴清, 2015a. 沖島(三河湾)の転石地潮間帯の貝類相, かきつばた, (40): 23-30.
 早瀬善正・大貫貴清・吉川 尚・松永育之・社家間太郎, 2015b. 前島(三河湾)の転石地潮間帯の貝類相 - 特徴的な16種の記録, ちりぼたん, 45(3): 105-122.
 佐藤大義・浅田 要・永井 僚, 2019. 南知多町内海海岸(伊勢湾)の貝類相, かきつばた, (44): 20-30.

【関連文献】

- 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.
 早瀬善正・田中総一郎, 2001. 浜名湖北部より得られたサザナミツボ科の一新種, かきつばた, (27): 5-7.

(早瀬善正)

カズラガイ *Phalium flammiferum* (Röding)

【選定理由】

本種は湾口部から外洋にかけての潮下帯砂泥底に生息する。県内では内湾域の潮下帯の環境は急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も三河湾湾口部から伊勢湾湾口部、渥美外海にかけて操業する底引き漁船により採集されるが、個体数は非常に少ない。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。なお、県内では、近似種のナガカズラガイ (学名不詳) が本種と同所的に生息する場合も少なくないが、より外洋側に生息し渥美外海に主分布域がある。渥美半島外海側の海岸では、ナガカズラガイは多くの個体が打ち上げられる (中山, 1979)。ナガカズラガイは、近年でも底引き網に普通に混獲され個体数も多い。



【形態】

殻長約 8 cm の卵形で、殻質はやや厚く黄色褐色の縦縞がある。殻口は大きく開き、肥厚する。蓋は革質でやや小さく細長い扇形。ナガカズラガイと同種もしくは亜種とする説もあるが、両種は殻の形態で明確に区別され、前述のように分布域にも相違があり別種である。本種はナガカズラガイと比べてやや小型で、殻全体の丸みが強く殻質はやや薄く、殻表面の螺肋は明瞭である。また、本種の縦縞と殻の地色のコントラストはナガカズラガイと比べて不明瞭で、全体的な殻の色彩はくすんでいる。2種の学名には再検討が必要である。

【分布の概要】

【県内の分布】

【選定理由】の項参照。

【世界及び国内の分布】

日本、台湾、国内では房総半島以南九州に分布する。日本海側では本種の個体数が多い。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

【選定理由】の項参照。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

葉山しおさい博物館 (2001) ではナガカズラガイが減少にランクされ、本種は元々きわめて稀な種として対象外になっている。

【引用文献】

葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.

中山 清, 1979. カズラガイとナガカズラガイの殻高と殻径の比と肋数の比較. かきつばた, (5): 3-4.

(木村昭一)

モスソガイ *Volutharpa perryi* (Jay)

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯砂泥底にすむ。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は1960年代には普通種であった(愛知県科学教育センター, 1967)が、1990年代には三河湾湾口部のたこつぼ漁等で生貝が比較的普通に採集されていた。その後、個体数が激減し、知多半島伊勢湾側から三河湾湾口部のドレッジ調査では死殻もほとんど採集できなかった(木村, 2000)。近年、伊勢湾湾口部から渥美外海で操業される底引き網漁業で混獲されるようになったが、引き続き将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



上段: 伊勢湾湾口部(勢水丸ドレッジ水深 20 m), 2014 年 12 月, 下段: 南知多町篠島沖(蛸壺漁水深 10 m), 1994 年 12 月, 木村昭一採集

【形態】

殻長約 40 mm の卵形で、殻は薄く厚い殻皮で覆われる。殻口は大きい蓋は革質で非常に小さく退化的で、蓋を持たない個体もある。青森から北海道にかけては食用種として漁獲されているが、県内の個体群より遙かに大型である。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように潮下帯より1990年代には、比較的多くの生貝が採集されたが、ほとんど生貝が採集されない期間を経た後、近年回復傾向が認められる。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。瀬戸内海以北北海道まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息環境の悪化のほか、本種もバイ(堀口, 1998)の様に防汚剤に含まれている有機スズ化合物(現在は製造禁止)によるインボセックス(雌の雄化)により個体数が減少した可能性もある。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

本種は、房総半島以南では主に内海(三河湾、伊勢湾、瀬戸内海)に分布する。本種も稲葉(1982)が東北・北海道型と定義した、「内海が太平洋側の分布限界であり、外海では生息し得ないが、低温・低塩分の内海に生息している貝類群集」に含まれる種と言えるかも知れない。生息水深帯がやや深く、モニタリングが困難な事もあり、国のレッドデータブックには掲載されていないが、上述した内海の個体群については、今後絶滅危惧個体群とすることも考慮するのが望ましい。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
堀口敏広, 1998. インボセックス 巻貝類における雌の雄化現象. 海洋と生物, 117: 283-288.
稲葉明彦, 1982. 瀬戸内海の貝類. 181pp. 広島貝類談話会, 向島.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

(木村昭一)

テングニシ *Hemifusus tuba* (Gmelin)

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。現在、県内の干潟で生貝が確認されている場所はない。三河湾・伊勢湾の湾口部では潮下帯より死殻は比較的普通に採集されているが、生貝が採集されることは少ない。内湾域の個体群の生息状況は深刻である。渥美外海の潮下帯では底引き網漁業により継続的に生貝が採集されているが、食用に大量に採集されていた時代と比べると個体数の減少は明らかである。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長約 15 cm で大型の個体は 20 cm を越える。殻は紡錘形で殻口は大きくやや長い。殻表は茶褐色であるが、褐色の厚い殻皮で被われる。

殻口は淡橙色で、水管はやや長く広い。蓋は革質で長い紡錘型。愛知県産の個体は、殻が大型の割には、殻質はやや薄く、螺管の肩部はやや角張り、小さな三角形の突起が多数並ぶ。有明海産及び和歌山県から鹿児島県にかけての外洋産の個体群は、殻が非常に厚くなり肩部の突起の数は少ないが、大きく角状に発達し、いわゆる「オニニシ」と言われる貝形態になる。オニニシは本種と別種とされることもあるが、系統関係については検討を要する。



南知多町渥美半島沖(トロール漁), 2000年10月2日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内の内湾域での分布域は三河湾及び伊勢湾湾口部に限られ、死殻は比較的普通に採集されるが、生貝は少ない(木村, 1995; 1996)。渥美外海の潮下帯の砂底からは継続的に生貝が確認されている。

【世界および国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、インド太平洋に分布する。国内では、房総半島から九州の内湾から外洋にかけて分布する。瀬戸内海などの内湾域における干潟の個体群は著しく減少した(福田・木村, 2012)。日本海側では底引き網漁業によって現在でも食用として比較的普通に採集されている海域もある。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾では外洋水の影響の強い礫混じりの砂泥底に生息している。外洋域では水深 20–50 m の砂泥底に生息している。夏季に大型の卵嚢を他物に産み付ける。卵嚢は「うみほうずき」と呼ばれ、かつては玩具として販売されたが、現在流通することはほとんどない。肉食性である。生態的な特性についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。内湾域での著しい減少については、船体塗料に含まれる有機スズによるインボセックスが要因の可能性がある(福田・木村, 2012)。外洋側での減少の原因は不明である。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。内湾から外洋域、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【引用文献】

福田 宏・木村昭一, 2012. テングニシ, p.72. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.

木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16–27. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3–19. 全国高等学校水産教育研究会.

【関連文献】

堀口敏広, 1998. インボセックス 巻貝類における雌の雄化現象. 海洋と生物, (17): 283–288.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18–20.

鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(木村昭一)

ムシロガイ *Nassarius livescens* (Philippi)

【選定理由】

本種は内湾からやや外洋にかけての干潟から潮下帯砂泥底にすむ。県内では内湾域の干潟から潮下帯の環境は急速に悪化して、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種もかつては三河湾から伊勢湾にかけて普通に生息していた(愛知県科学教育センター, 1967)が、近年急速に生息場所、個体数共に激減し、生貝が全く採集されない(木村, 1996; 木村, 2000)期間も長かった。2006, 2007年の現地調査において渥美半島先端部伊良湖岬周辺のアマモ場で健全な個体群を確認し、三河湾島嶼域の調査でも生貝が確認できるようになった。特に佐久島では健全な個体群が確認された(早瀬・木村, 2020)。明らかな回復傾向が認められたので、前回(VU)よりランクダウンすべき種と評価された。

【形態】

殻長約 20 mm の卵形の貝で、殻は厚く、太く低い縦肋があるが、細い螺溝で横切られ、石畳状になる。殻口は丸く、内唇側に白い滑層が発達する。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように県内の内湾域では、近年生貝が比較的広い範囲の海域で採集されるようになり、佐久島(早瀬・木村, 2020)や伊良湖周辺(木村, 2017)では健全な個体群も認められ、明らかな回復傾向が確認されている。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、フィリピン、熱帯インド、西太平洋。国内では大槌湾～九州に分布する(福田, 2012)。本種はインド・太平洋の熱帯域まで分布するとされているが、各地の標本を検討する限り日本(本州から九州)産個体とは明らかに殻形態に差があり、分類学的な再検討が必要である。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息環境悪化のため減少していると考えられる。加えて、防汚剤に含まれる有機スズ化合物による雌の雄化(インボセックス)が生じて激減した可能性がある(福田, 2012)。近年急速な回復傾向が認められるのは、有機スズ系防汚剤の製造中止が大きな要因である可能性が高い。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

レッドデータブックなごや 2010(木村, 2010)では、本種と正しく同定された名古屋港沖産の死殻標本(図 3)が図示されていたが、レッドデータブックなごや 2015(木村 加筆 川瀬, 2015)では福井県産の本種が図示された。その地で採集された貝類の画像はレッドデータブックの重要な資料(データ)の一つなので、他産地の標本はなるべく使用しないことが望ましい。名古屋港沖の個体群は、他産地ではみられない殻が厚く殻口が著しく肥厚する特異な殻形態をしておりなおさらである。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
福田 宏, 2012. ムシロガイ, p. 68. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.
木村昭一, 2017. 伊良湖漁港内で採集された貝類. かきつばた, (42): 6-12.

(木村昭一)

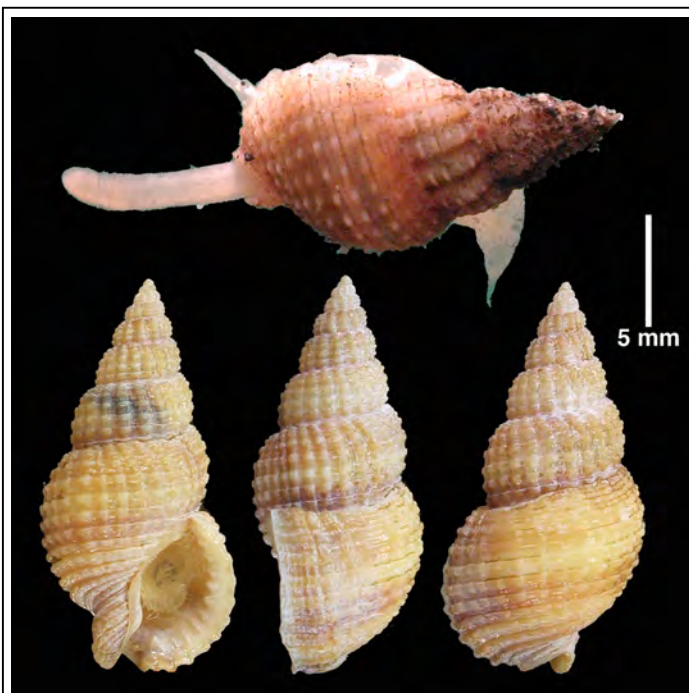


上段: 西尾市梶島, 2015年6月6日, 下段: 田原市伊良湖漁港東側アマモ場水深1-2m, 2007年6月3日, 木村昭一採集

キヌボラ *Reticunassa japonica* (A. Adams)

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての干潟から潮下帯砂泥底にすむ。県内では内湾域の干潟から潮下帯の環境は急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は外洋に面した潮通しの良い潮間帯下部から潮下帯のアマモ場周辺砂泥底に生息する。1990-2000年にかけて三河湾、伊勢湾湾口部で死殻が打ち上げられる場所は多かったが、生貝の個体数は非常に少ない(木村, 1996; 木村, 2000)期間が続いた。2006, 2007年の現地調査で知多半島南部沖の潮下帯のアマモ場より多くの生貝が採集され、2015年の調査でも知多半島内海沖の潮下帯のアマモ場周辺で多数の生貝が採集された。明らかな回復傾向が認められたので、前回(VU)よりランクダウンするべき種と評価された。



南知多町内海沖(ドレッジ水深 5-10 m), 2007年8月8日,
木村昭一採集

【形態】

殻長約 15 mm で螺塔は高く螺層はよく膨れ、縫合はよくくびれる。殻はやや薄く、細く密な縦肋が細い螺溝で横切られ、顆粒状になる。殻口は丸く、十分に成長すると外唇は肥厚するが、内唇側の滑層は発達しない。生時には殻表をヒドロ虫(刺胞動物)で覆われている個体が多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように県内の内湾域では、死殻は比較的多く見られるが、生貝が確認できる場所は限られている。知多半島南部から渥美半島にかけての潮下帯には健全な個体が認められる。

【世界及び国内の分布】

日本、台湾、国内では本州以南から九州まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息環境悪化のため減少していると考えられる。本種はアマモ場周辺に多いので、アマモ場の減少も本種の減少の要因かも知れない。

【保全上の留意点】

アマモ場を含めた内湾干潟から潮下帯の生息環境を保全する。干潟を保全し、水質の富栄養化を防止することが必要である。

【引用文献】

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

(木村昭一)

ナガゴマフホラダマシ (ゴマフホラダマシ) *Engina menkeana* (Dunker)

【選定理由】

外洋に面した内湾から湾口部、外洋の転石地の潮間帯から潮下帯の転石下面に生息する種。元々県下には外洋の転石地という生息環境が多くはなく、近年生息が確認されている生息地は、知多半島内海海岸 (佐藤・他, 2019)、佐久島 (早瀬・木村, 2019)、日間賀島 (早瀬・他, 2019)、伊良湖 (木村, 2017) で、個体数は多くない。

近年、伊勢湾、三河湾の外洋水の影響が強いか潮通しの良い浅海域の一部では、窒素・リンの流入負荷減少に伴う水質及び底質環境の明らかな改善傾向が認められるようになり (早瀬・木村, 2017)、本種の生貝が確認できるようになったと考えられる。しかし、本種は潮間帯の転石下に生息する種で、水質汚濁、底質環境の泥質化、有機物量の増加、貧酸素の発生等により生息基盤が脅かされる種と考えられる。

【形態】

殻長 15 mm 前後、殻は厚く、紡錘形で白地の殻表に黒色の顆粒突起が縦肋となり密生する。殻の外形は紡錘形であるが、螺塔が低く丸みを持ち楕円形に近くなるものから細長いものまで個体変異がある。成熟個体の殻口は厚く肥厚し、外唇に殻表の黒色顆粒に連続する黒色斑紋がある。内唇は黒褐色に縁取られ、白色の襞が数本ある。蓋は核が下位に偏った葉状型である。



田原市伊良湖町伊良湖漁港, 2016年10月8日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

前述のように県内では近年 5 ヶ所で生貝が採集された。かつて渥美外海の潮下帯の岩礁からも生貝が採集されている。県下外洋の潮下帯岩礁域の調査は不十分なので、今後調査が進むことで本種の生息地が新たに発見される可能性は高い。

【世界および国内の分布】

房総半島から九州の潮間帯下部から水深 20 m の転石地から岩礁。本種の海外からの分布情報は無いが、関 (2001) に *Enginopsis* sp. として図示されている標本は、本種に同定できるので朝鮮半島に分布していると考えられる。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は、外洋水の影響のある潮通しの良い内湾から外洋の、潮間帯下部から潮下帯の転石地の浅く砂に埋もれた転石下面に生息する。生態的特性はほとんど知られていないが、本種の分類群や歯舌の形態から肉食性であると考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在県下では生息海域は狭く、個体数は多くない。上述のような本種の生息環境自体が消失したことが一番大きな要因と考えられる。

【保全上の留意点】

本種の生息環境である上述したような生息環境を保全することが重要であろう。

【特記事項】

環境省では絶滅危惧Ⅱ類にランクされているが、本種の分布域は外洋域にも及び、垂直分布の幅も広く、伊豆半島、浜名湖、伊勢湾湾口部 (三重県側)、九州西岸などでは多産する生息地も確認されている。環境省の本種のランクが高すぎる可能性がある。

【引用文献】

- 関德基, 2001. 新原色韓国貝類図鑑. 332pp. 貝類博物館, 韓国.
早瀬善正・木村昭一, 2017. 河和 (三河湾) の内湾潮間帯の貝類相. ちりぼたん, 47 (1-4): 28-42.
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島 (三河湾) の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島 (三河湾) の潮間帯貝類相. かきつばた, (44): 1-15.
木村昭一, 2017. 伊良湖漁港内で採集された貝類. かきつばた, (42): 6-12.
佐藤大義・浅田 要・永井 僚, 2019. 南知多町内海海岸 (伊勢湾) の貝類相. かきつばた, (44): 20-30.

(木村昭一)

オウウヨウラク *Ocenebrellus inornatus* (Récluz)

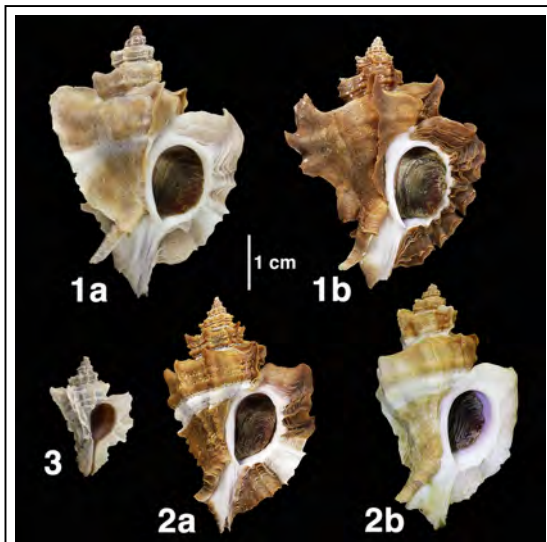
【選定理由】

本種の個体群の消長については、三重県鳥羽湾(伊勢湾口部)のカレイ底刺網で混獲される個体群(木村, 1983)のモニタリング例がある。1982年には本種は多産し、80年代後半から個体数が激減し、1990年代には生貝はほとんど採集できなくなり、2005年前後から再び生貝が確認され、2007年から多産するようになった(木村, 2017)。本種の県下における正式な生息記録は木村(2017)が初めてで、三河湾湾口部(一部伊勢湾を含む)で行った潮下帯も含めた海産貝類の調査(木村, 1995, 1996, 2000)では、本種が記録されなかった。愛知県下でも、三重県鳥羽湾と同時期に本種の個体群の著しい減少が起っていたことが考えられる。県下において1980年代以前に本種が記録されていないのは、分類学的な混乱に伴う近似種との混同が原因であると考えられる(木村, 2017)。

本種は、内湾から湾口部の、潮間帯から水深20mの岩礫の多い砂泥底に生息する。前述のように近年愛知県下でも本種の回復傾向が認められ、佐久島(早瀬・木村, 2020)、日間賀島(早瀬・他, 2019)では潮間帯で、伊良湖(木村, 2017)では水深3m程の潮下帯で生息が確認されている。また、たこ壺、底刺網などの漁業層からも普通に採集され、潮下帯でも比較的広い海域で回復傾向が認められる。しかし、伊良湖漁港内の個体群には本種の減少要因の1つと考えられるインボセックスの発現が確認されており(木村, 2017)、依然として生息基盤が脅かされている種と評価された。

【形態】

殻長60mmに達する(図1a)。殻は厚く、縦張肋は羽根状(潮下帯の個体では大きく羽根状に広がる個体が多い)。本種の貝殻の形態には性的二型が認められ、雄個体(図1)は殻長に対して殻径が大きく、殻が太く羽根状の縦張肋が大きく広がる。それに対して雌個体(図2)は殻長方向に長く、縦張肋の張り出しも弱く、殻口も前後方向に細長い傾向がある(木村, 2017)。幼貝にも羽根状の縦張肋が発達する(図3)。殻の色彩は褐色の個体が多いが、色帯のある個体、白色から橙色の個体も出現し、縦張肋の発達具合と共に個体変異が大きい。



田原市伊良湖町伊良湖漁港, 2016年10月8日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

前述のように県内では近年3ヶ所で生貝が採集され、三河湾湾口部~伊勢湾湾口部の潮下帯からまたこ壺、底刺網などの漁業にて混獲されて生貝が採集されている。明らかな回復傾向が認められる。

【世界および国内の分布】

日本、中国(QI, 2004)、朝鮮半島(例えば閔, 2001)、日本では北海道南部から九州の潮間帯下部から水深20mの転石地から岩礫の多い砂泥底に生息する。

【生息地の環境/生態的特性】

本種は外洋水の影響のある潮通しの良い内湾から湾口部の潮間帯下部から潮下帯の転石地や岩礫の多い砂泥底に生息する。生態的特性はほとんど知られていないが、カキ養殖漁場における食害種としても知られている。

【現在の生息状況/減少の要因】

アッキガイ科の諸種には有機スズ系の防汚剤に起因するインボセックス(雌の雄性化により生殖不能に陥る現象)による個体数の減少が報告されており(堀口, 1998)、前述した本種の著しい個体数の減少もインボセックスが原因と考えられる。現在、国内では有機スズ系の防汚剤の製造が禁止(1997年より製造禁止)されており、本種の回復傾向はこれと呼応している。

【保全上の留意点】

本種は著しい個体群の回復傾向が認められるが、県下では依然としてインボセックスの発現が確認されており、今後も本種のモニタリングは重要である。

【特記事項】

本種は、北方では外洋にも生息するが、房総半島以南では主に内海(浜名湖、三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、博多湾)に生息する。本種も稲葉(1982)が東北・北海道型と定義した、「内海が太平洋側の分布限界であり、外海では生息し得ないが、低温・低塩分の内海に生息している貝類群集」に含まれる種と言えるかも知れない。

【引用文献】

閔德基, 2001. 新原色韓国貝類図鑑. 332pp. 閔貝類博物館, 韓国.
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50(1): 33-79.
早瀬善正・木村昭一・西浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島(三河湾)の潮間帯貝類相. かきつばた, (44): 1-15.
堀口敏広, 1998. インボセックス 巻貝類における雌の雄性化減少. 海洋と生物 117: 283-288.
稲葉明彦, 1982. 瀬戸内海の貝類. 181pp. 広島貝類談話会, 広島.
木村昭一, 1983. 鳥羽市小浜の刺網の貝類相. 三重大学生物研究会. こむらさき, 8, 76-88.
木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 水産教育研究彙報第34報, pp. 1-12. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 水産教育研究彙報第35報, pp. 1-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.
木村昭一, 2017. 伊良湖漁港内で採集された貝類. かきつばた, (42): 6-12.
QI Zhongyan, 2004. Seashells of China. 418 pp, 193 pls. China Ocean Press, Beijing, China.

(木村昭一)

マクラガイ *Oliva mustelina* Lamarck

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。現在、県内の干潟で生貝が確認されている場所はないが、一時的に底質環境が改善された干潟で生貝がごくわずかに採集された例がある(木村, 2005)。三河湾・伊勢湾の湾口部でも、潮間帯はおろか潮下帯からも死殻すらほとんど採集されない。内湾域の個体群の生息状況は非常に深刻である。ただし、渥美外海の潮下帯では底引き網漁業により継続的に生貝が採集されていて、年による変動も大きい。比較的多数の個体が採集される場合もあるので、直ちに絶滅する種ではないとは考えられるが、将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長約 35 mm、円筒形で殻表は強い光沢があり、平滑、殻質は非常に厚い。殻表は黄褐色の地色に濃褐色の不規則な波状の模様がある。螺塔は低く、体層は大きく、殻長のほとんどを占める。殻口は狭く、内唇は肥厚して白色。軟体部は大きく貝殻を被う。



蒲郡市三谷地先人工干潟, 2005年7月21日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、一時的に蒲郡市の人工干潟で生息が確認された(木村, 2005)が、最近では内湾域全域の干潟から潮下帯を含めた海域で生貝の採集記録はない。渥美外海の潮下帯の砂底からは底引き網漁業によって生貝が確認されている。

【世界および国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、インド太平洋に分布する。国内では房総半島から九州の内湾から外洋にかけて分布する。伊勢湾、瀬戸内海などの内湾域の干潟における本種の個体群は著しく減少した(木村, 2012)。渥美外海から土佐湾、新潟県以南の日本海の潮下帯では現在でも健全な個体群が確認されている。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾では外洋水の影響の強い砂泥底に生息している。外洋域では水深 10–50 m の砂泥底に生息している。生時に軟体部は殻をおおっているため、殻には付着物が無く、磨いたように平滑で光沢がある。肉食性で他の動物を丸呑みにする。生態的な特性についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。内湾域での著しい減少については、マクラガイ科貝類は近年バイと近縁の種群であることが明らかにされていることから、船体塗料に含まれる有機スズによるインボセックスが要因の可能性がある。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。内湾から外洋域、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【引用文献】

木村昭一, 2012. マクラガイ, p.73. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.
木村昭一, 2005. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相 続報. かきつばた, 31.

【関連文献】

堀口敏広, 1998. インボセックス 巻貝類における雌の雄化現象. 海洋と生物, (17): 283–288.
木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16–27. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3–19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18–20.
木村昭一, 2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた, 30.
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(木村昭一)

クリイロマンジ *Pseudodaphnella leuckarti* (Dunker)

【選定理由】

内湾に分布するイモガイ上科の小型種には希少もしくは絶滅危惧種ではないかと考えられる種は少なくないが、種数が多く、モニタリングが十分ではない。本種はその代表的な種で、かつて岩手県、男鹿半島以南、東京湾、伊勢湾、三河湾、瀬戸内海、博多湾で普通に見られた種であるが、現在生息地点と個体数が減少している (例えば山下, 2012)。

県下では近年、いずれも三河湾の知多半島河和 (早瀬・木村, 2017)、梶島 (早瀬・他, 2016)、佐久島 (早瀬・木村, 2020)、日間賀島 (早瀬・他, 2019) で健全な個体群を含めた生息が確認されている。近年、伊勢湾、三河湾の外洋水の影響が強い潮通しの良い浅海域の一部では、窒素・リンの流入負荷減少に伴う水質及び底質環境の明らかな改善傾向が認められるようになり (早瀬・木村, 2017)、本種の生貝が確認できるようになったと考えられる。しかし、本種は潮間帯の埋没石や転石下に生息する小形種で、水質汚濁、底質環境の泥質化、有機物量の増加、貧酸素の発生等により生息基盤が脅かされる種と考えられる。

以上より将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長 7 mm 前後、殻は細長い紡錘形で殻表には粗く強い格子目状の彫刻がある。成熟個体の殻口は厚く肥厚し、狭く、殻口後部にはやや深い切れ込み (肛湾入) がある。殻の色彩は生きている個体では濃褐色の単色であるが、老成個体や死殻では灰褐色となる。蓋はない。



1: 西尾市佐久島, 2017年6月24日, 2: 南知多町河和, 2014年5月16日, 早瀬善正採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では4ヶ所で生貝が採集され、特に梶島、佐久島では健全な個体群が確認された。

【世界および国内の分布】

朝鮮半島、岩手県・男鹿半島～九州の中・低潮線から水深 20 m に生息する (山下, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は外洋水の影響のある潮通しの良い内湾の潮間帯下部から潮下帯の転石地の浅く砂に埋もれた石下面に生息する。生態的特性はほとんど知られていないが、本種の分類群や歯舌の形態から肉食性であると考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在県下では生息海域は狭く、個体数は多くない。上述のような本種の生息環境自体が消失したことが一番大きな要因と考えられる。

【保全上の留意点】

本種の生息環境である上述したような生息環境を保全することが重要であろう。

【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一, 2017. 河和 (三河湾) の内湾潮間帯の貝類相. ちりぼたん, 47 (1-4): 28-42.
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島 (三河湾) の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・川瀬基弘・林 誠司・西 浩孝・守谷茂樹・石井健一郎・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2016. 梶島 (三河湾) の潮間帯の貝類相. かきつばた, (41): 27-39.
早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島 (三河湾) の潮間帯貝類相. かきつばた, (44): 1-15.
山下博由, 2012. クリイロマンジ, p.76. in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

カノコキセワタガイ *Philinopsis* sp.

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯砂泥底にすむ。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は三河湾、伊勢湾知多半島沖のアマモ場周辺で現在でも採集されるが、個体数は少ない(木村, 1996; 木村, 2000)。和田ほか(1996)では危険にランクされている。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



蒲都市沖水深 2 m(ドレッジ), 2001 年 9 月 13 日, 木村昭一 採集

【形態】

体長約 4 cm の長方形の軟体部で、暗褐色の地色に灰白色の小班が散在していて、独特な外見を呈する。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように潮下帯のアマモ場周辺に分布する。

【世界及び国内の分布】

日本、熱帯インド、西太平洋。国内では相模湾以南から九州まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなアマモ場の面積が県内では著しく減少しているため、本種の生息場所、個体数とも減少していると考えられる。

【保全上の留意点】

アマモ場を含めた内湾干潟から潮下帯の生息環境を保全する。干潟の保全や、水質の富栄養化を防止することが必要である。

【引用文献】

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

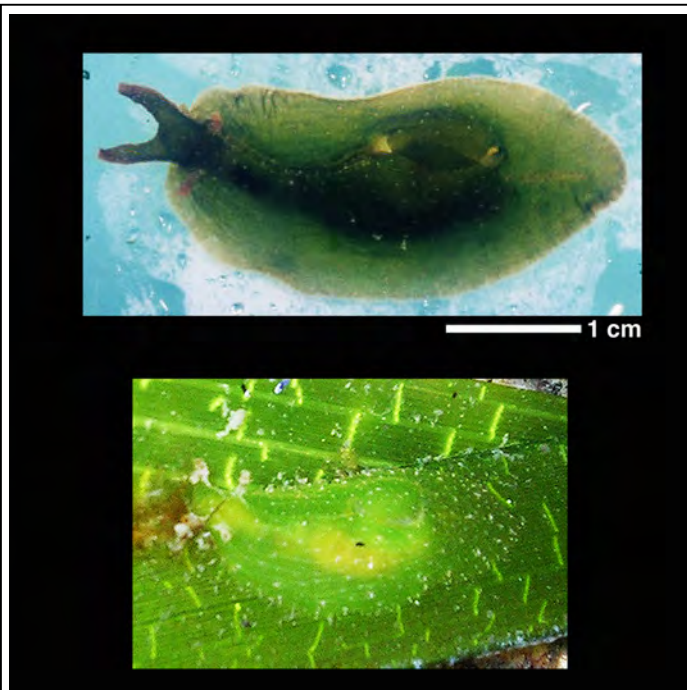
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

ウミナメクジ *Petalifera punctulata* (Tapparone-Canefri)

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯アマモ場にすむ。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。またアマモ場も非常に減少している。本種は三河湾、伊勢湾知多半島沖のアマモ場のアマモの葉上より現在でも採集されるが、個体数は多くない(木村, 1996; 木村, 2000)。和田ほか(1996)では危険にランクされている。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



上段：蒲郡市三谷町沖(ドレッジ水深2 m), 2001年9月13日, 木村昭一採集, 下段：西尾市梶島, 2015年6月6日, 守谷茂樹採集

【形態】

体長約4 cm程度であるが、軟体部を伸展させると10 cmに達する。和名の通りナメクジによく似た軟体部で、色彩は美しい緑色から暗褐色まで個体によって変異がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように県内潮下帯のアマモ場のアマモ葉上に付着して生息する。

【世界及び国内の分布】

日本、中国。国内では本州の青森県以南に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなアマモ場自体の面積が県内では著しく減少しているので、本種の生息場所、個体数とも減少していると考えられる。

【保全上の留意点】

アマモ場を含めた内湾干潟から潮下帯の生息環境を保全する。干潟の保全や、水質の富栄養化を防止することが必要である。

【引用文献】

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

カキウラクチキレモドキ *Brachystomia bipyramidata* (Nomura)

【選定理由】

本種は河口域から内湾の干潟や岩礁に生息するマガキの体液を吸って生きている。宿主であるマガキは水質汚濁、護岸工事等で生息環境がかなり悪化した場所でも多産するが、本種は生息環境が良く保全された場所に生息するマガキにのみ寄生する。従って、健全な個体群が保存されている生息地は限られている。和田ほか (1996) では、危険とランクされている。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



南知多町河和, 2014年5月16日, 早瀬善正採集

【形態】

殻長約 4 mm で微小。殻は塔型で白色、成長脈はやや荒く、軸唇には弱い襞が 1 本ある。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように生息場所は限られている。汐川干潟の広大なマガキ床には大きな個体群が保存されている。ただし、年によって個体数に変動が認められる。水質の改善によって、いままで本種が生息していなかったマガキ群集に新たに生息が確認される例もある (木村, 2004)。近年では、旧幡豆郡 (早瀬・他, 2011)、庄内川河口域 (川瀬, 2015) でも生息が確認されている。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。松島湾、三河湾、瀬戸内海、有明海、富岡湾に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内では、まだ健全な生息地が残っているが、生息環境が悪化した場所では生息が認められないので注意を要す。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士, 2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相. 東海大学海洋研究所研究報告 (32),
川瀬基弘, 2015. カキウラクチキレモドキ, p. 445. in: レッドデータブックなごや 2015 動物編. 503pp. 名古屋市環境局.
木村昭一, 2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた, (30): 14-20.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

ヒガタヨコイトカケギリ *Cingulina cf. circinata* A. Adams

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。本種は【形態】の項に記す特徴から外洋域に生息するヨコイトカケギリ *Cingulina cingulata* と区別され、和名が提唱された(福田, 2012)。本種は、県内では三河湾の内湾奥部の河口域に位置する泥質干潟に生息域があり、湾口部から渥美外海までで採集されるヨコイトカケギリとは生息域が分断され、形態的にも区別が可能である。ただし、三重県側の伊勢湾口部に位置する生浦湾では、生息域が連続的で両種の区別が難しい個体も現れるので、三河湾に生息する2種も同種である可能性があるが、内湾奥の個体群は干潟の減少、干潟環境の悪化で生息基盤が脆弱であるので、ヨコイトカケギリの内湾奥の個体群としても将来的に絶滅危惧に移行する危険性があると評価された。

【形態】

殻長約7 mm、細長い円錐形で、螺旋は著しく高い。殻は白色で殻質はやや厚く、螺旋に強い3本の螺旋をめぐらす。以上の殻の特徴はヒガタヨコイトカケギリ(図1)、ヨコイトカケギリ *Cingulina cingulata* (Dunker) (図2, 3) に共通であるが、ヒガタヨコイトカケギリは殻表の成長脈がやや粗く、光沢がない。また殻頂部は摩耗、欠損する個体が多い。ヨコイトカケギリの殻表は平滑で光沢があり、殻頂部も欠損することはほとんど無い。軟体部の形態では、ヨコイトカケギリは頭触角が細長く先端が尖るのに対して、ヒガタヨコイトカケギリはより太短く先端も鈍い(福田, 2012)。



1: 豊橋市汐川干潟, 2002年5月10日, 木村昭一採集, 2: 南知多町河和, 2014年5月16日, 早瀬善正採集, 3: ヨコイトカケギリ, 南知多町内海沖(ドレッジ水深2-5 m), 2000年7月28日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

汐川干潟、豊川河口域、矢作川河口域など内湾奥の河口域に位置する泥質干潟に、カワグチツボ、エドガワミズゴマツボ、ヌカルミクチキレと同所的に生息する。

【世界および国内の分布】

日本以外では現在まで分布記録はない。国内では陸奥湾から九州の内湾、河口、汽水域の泥底に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾奥の泥質干潟の表面に生息している。本種の属するトウガタガイ科貝類には多毛類か貝類に取り付いて体液を吸う種が多いが、本種については不明。生態的な特性についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。内湾から外洋域、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。本種は内湾奥の河口域に生息するので、干潟周辺の陸域の改変、干潟の埋め立て、無酸素水塊の発生、水質汚濁の影響を受けやすい。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。干潟周辺の陸域を含めた干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【引用文献】

福田 宏, 2012. ヒガタヨコイトカケギリ, p.84. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.

【関連文献】

秀島佑典・木村妙子・木村昭一・佐藤達也, 2014. 生浦湾における貝類群集と底質環境の季節変動(学会発表講演要旨). *Venus*, 72(1-4): 139.

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(木村昭一)

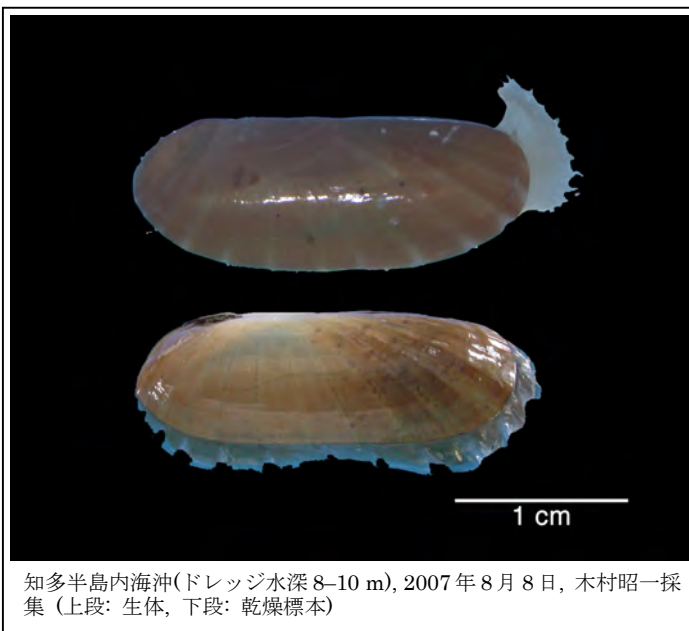
キヌタレガイ *Solemya pusilla* Gould

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯泥底にすむ。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖の水深5-20 mの泥底より採集されるが、個体数は少ない(木村, 1996;木村, 2000)。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長約10 mmの円筒形の貝で殻質は非常に薄い。殻は石灰分が少なく非常に軽い。殻皮はやや厚く表面は光沢が強く、殻の腹縁を越えて延長する。



知多半島内海沖(ドレッジ水深8-10 m), 2007年8月8日, 木村昭一採集 (上段: 生体, 下段: 乾燥標本)

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように三河湾湾口部、知多半島伊勢湾側の潮下帯の泥底に分布する。県内では本種が潮間帯に生息する場所を確認されていない。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。北海道南部から九州まで分布する(木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。鰓には硫化水素を用いて有機物を合成する化学合成細菌が共生している(木村, 2012)。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は悪化しているため、本種の生息場所、個体数とも減少していると考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

木村昭一, 2012. キヌタレガイ, p. 106. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

ミミエガイ *Striarca symmetrica* (Reeve)

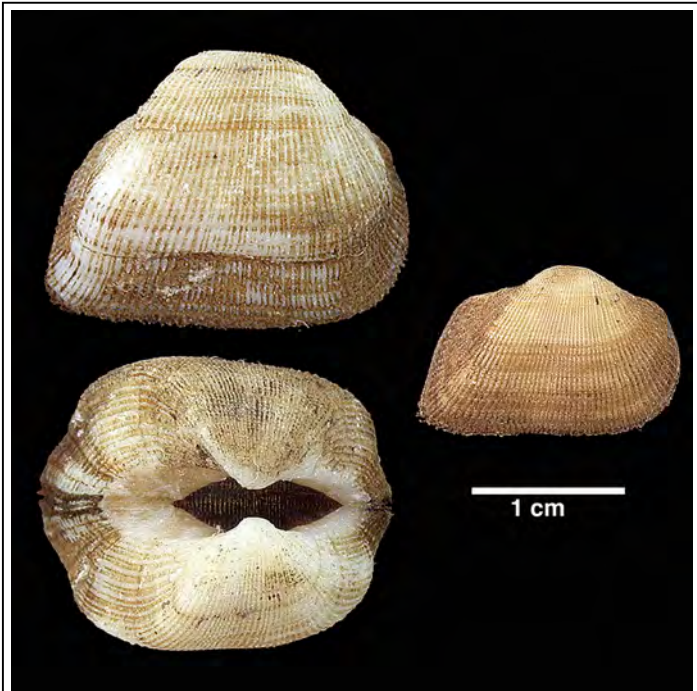
【選定理由】

本種は、古くから県下より産出記録があるものの (例えば中島, 1996)、近年日間賀島 (早瀬・他, 2019)、佐久島 (早瀬・木村, 2020)、伊良湖岬 (早瀬・木村, 2016年7月6日, 2017年5月27日調査)、知多半島南部2ヶ所 (木村, 未発表資料) で明確な生息状況の確認がされた種である。

近年、伊勢湾、三河湾の外洋水の影響が強い潮通しの良い浅海域の一部では、窒素・リンの流入負荷減少に伴う水質及び底質環境の明らかな改善傾向が認められるようになり (早瀬・木村, 2017)、本種の生貝が確認できるようになったと考えられる。しかし、本種は潮間帯の埋没石や転石下に足糸で固着して生息する小形の二枚貝で、水質汚濁、底質環境の泥質化、有機物量の増加、貧酸素の発生等により生息基盤が脅かされる種と評価された。

【形態】

殻長 15 mm、殻は箱形で、よく膨らみ (老成するとさらに膨らみは強くなる; 左個体)、殻質は厚く堅固。殻表は毛状突起のある殻皮で覆われる。ヨコヤマミミエガイ *Verilarca interplicata* (Grabau & King) とやや近似するが、本種はやや小型で、殻表の彫刻が細かく、膨らみも強く、区別は明確である。



南知多町日間賀島, 2018年6月16日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

前述のように、県内では近年5ヶ所 (いずれも潮間帯) で生息が確認されているが、どの生息地でも個体数は少ない。中島 (1996) には“遠州灘 (30~60m)”の記録が見られるが、生息水深が深すぎて、他種との混同もしくは誤同定が考えられる。

【世界および国内の分布】

本種は房総半島以南、熱帯西太平洋に分布するとされている (松隈, 2017)。しかし、紀伊半島以南から南西諸島にかけては、本種とは殻形態において明確な差異が認められる近似種が分布しており、分類学的な再検討が必要である。それに対して、中国 (QI, 2004)、朝鮮半島 (関, 2001) の個体は、日本の個体 (愛知県産個体) と形態的特徴が一致する。このような形態の個体は房総半島、男鹿半島から九州までに分布するようである。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は外洋水の影響のある潮通しの良い内湾から湾口部の潮間帯中部から潮下帯の転石地や岩礫底の埋もれ石、転石の下面に足糸で固着して生息する。生態的特性はほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在県下では生息海域は限定的で、生息地点数も多くない。上述のような本種の生息環境自体が消失したことが一番大きな要因と考えられる。

【保全上の留意点】

本種の個体群の回復傾向が認められるが、今後も本種のモニタリングは重要である。また、上述のような本種の生息環境を保全することが必要である。

【特記事項】

本種の近似種としてニヨリミミエガイ *Striarca oyamai* Habe, 1953 (現在、本種 *Striarca symmetrica* (Reeve, 1844) の異名にされている)、ヤサガタミミエガイ *Arcopsis sculptilis* (Reeve, 1844) などがあるが、【分布の概要】で述べたように、紀伊半島以南から南西諸島にかけては、本種と殻形態において明確な差異が認められる近似種が分布しており、上述の学名、和名を含めた分類学的な再検討が必要である。

【引用文献】

- 関德基, 2001. 新原色韓国貝類図鑑. 332pp. 関貝類博物館, 韓国.
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島 (三河湾) の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島 (三河湾) の潮間帯貝類相. かきつばた, (44): 1-15.
松隈明彦, 2017. ミミエガイ. in: 奥谷喬司 (編著) 日本近海産貝類図鑑 [第二版]. pp. 513, 1169. 東海大学出版部, 平塚.
中島徳男, 1996. 三河湾・遠州灘産海産貝類目録. 87pp. 自刊.
QI Zhongyan, 2004. Seashells of China. 418 pp, 193 pls. China Ocean Press, Beijing. China.

(木村昭一)

クロヒメガキ *Ostrea futamiensis* Seki

【選定理由】

2016年と2017年の6月に行われた調査の際、佐久島(三河湾)において、愛知県下で初めて生息確認された種である(早瀬・木村, 2020)。愛知県下では生息密度が低く、また三河湾の湾口部のみに確認され、分布域も狭い種である。愛知県下では、近年になって初めて存在が確認された種であるため減少傾向は不明であるが、三河湾では、湾奥や外海に面した環境には生息しておらず、生息が特定範囲に限られており、さらに、転石下などの僅かな隙間などの陰湿的な微環境下のみで生息することから、閉鎖的内湾での夏季の貧酸素水塊の発生や海域の富栄養化に伴う海底のヘドロ化、浅海域の開発などの環境悪化も懸念されるため、将来的に絶滅の危険性を考慮すべき種と考えられる。

【形態】

殻長 21.6 mm、殻高 28.0 mm 程度の楕円形の小型種である。ただし、固着性種であるため、付着場所によって不定形となる。殻は薄いものの堅く、左右殻共に(殻幅は小さく)殆ど膨らみがない。固着側の左殻は、周囲がやや鋸歯状となり少し立ち上がる程度で、内面の窪みはきわめて浅い。蓋の様に上面を塞ぐ右殻は、偏平で平板状となる。殻表は黒褐色で、成長線に沿って殻が薄く伸長し多数並ぶため、栓皮茸様になる。右殻内面の靱帯を挟んだ左右の縁には、多数の縁刻歯(歯状突起)が明瞭に並ぶ。殻内面は緑がかった灰色を呈す。



西尾市佐久島, 2017年6月24日, 早瀬善正採集

【分布の概要】

【県内の分布】

佐久島(三河湾)の潮間帯下部より生息記録が知られる(早瀬・木村, 2020)。

【世界および国内の分布】

国外の分布は、稲葉・鳥越(2004)においては、Philippines (off Jolo), Saigon, Siam, Singapore, Penang, Bay of Bengal とされる。ただし、これらが全て正確に日本産の本種と同種であるのかは不明。国内では、瀬戸内海、有明海などの内海に分布(波部, 1977; 速水, 2017)するとされている。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、佐久島(三河湾)の潮間帯下部の転石地である。浅く埋もれた石の酸化鉄によると思われる茶褐色となる石裏に、他の付着生物や特殊生息環境に棲む種とされる貝類などと共に付着する多数の個体が確認された。埋没石の埋没面が黒色の硫化物で覆われるような場所には確認されなかった。本種は一般的な二枚貝と同様に、浮遊する有機体の懸濁物質(SS)を鰓の繊毛の動きで集めて摂食すると考えられる。卵径は大きく(135~160 μ m)、D型幼生は殻長187~202 μ m、幼生は殻長290~300 μ mで着生し、着生後の成長は遅く、低潮帯下部以深の転石側面や下面に着生とされる(稲葉・鳥越, 2004)。

【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、佐久島(三河湾)で確認されたのみである。三河湾内の他の島嶼域の調査では、本種は確認されていない。最近、愛知県下での存在が確認されたばかりの種であり、減少傾向が確認されていないが、生息場所は狭く局所的であり、周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。外海の影響のやや強い、潮通しの良い内湾環境のみに生息すると思われ、このような良好な内湾の転石地環境は、三河湾では高度経済成長期に一度、多くが失われており、現状でも限られていることも本種の分布域が狭い一因と考えられる。

【保全上の留意点】

本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが重要である。

【特記事項】

同属のイタボガキ(537頁を参照)は、愛知県下では絶滅の可能性が高い状況にあり、本種の場合も同様の状況下にあると推測される。佐久島(三河湾)は、現時点での本種の限られた生息地であり、この地域の個体群の存在が重要であり、保護する必要がある。

【引用文献】

- 波部忠重, 1977. 日本産軟体動物分類学 二枚貝綱／堀足綱, xiii+372pp. 図鑑の北隆館, 東京.
速水 格, 2017. イタボガキ科, pp.527-528 (pls. 483-484), 1182-1185. in: 奥谷番司(編著) 日本近海産貝類図鑑, 1375pp. 東海大学出版部, 平塚.
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相, ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
稲葉明彦・鳥越兼治, 2004. 西宮市貝類館研究報告 第3号 世界のカキ(2) 各論, 63pp.+XIII pls.+9pp.(Index). 西宮市貝類館, 西宮.

【関連文献】

- 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵8+xliii+455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)

タイラギ (リシケタイラギ) *Atrina lischkeana* (Clessin)

【選定理由】

2009年版愛知県レッドデータブックには、タイラギとして以下に記す2種を合わせて準絶滅危惧種として掲載されていた(愛知県環境調査センター, 2009)。環境省第4次レッドリストでは、横川(1996)の研究結果に基づき、従来タイラギとされていた種には2種が含まれていることを採用し、ズベタイラギ *Atrina pectinata* (Linnaeus)、タイラギ(リシケタイラギ) *A. lischkeana* (Clessin)の2種として掲載された。本書でもこれに従い2種として扱う。個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。本県では、内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は1960年代には三河湾奥部の渥美湾で海水浴客が誤って踏んで足をけがするほど多産した(愛知県科学教育センター, 1967)。しかし、近年三河湾奥部では死殻すら採集できない。三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺では現在も漁業対象種となっているが、その量は年々減少している。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



【形態】

殻長25cmを越える大型種。殻は茶褐色で、やや薄く脆い。殻は長い三角形で、多数の低い肋が走り、多数の強い鱗片がある。従来“タイラギの有鱗型”と呼ばれていた種で単にタイラギとも呼ばれる。三河湾湾口部ではズベタイラギの方が大型になり、漁業対象として多く採集されている。貝殻中央部の貝柱は大きく美味で、高価に取り引きされる。

【分布の概要】

【県内の分布】

三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺では現在も漁業対象種として採取されている。本種はズベタイラギより外洋側に分布が偏る。名古屋港沖からはズベタイラギのみが採集された(木村, 2010)。三河湾湾口部でもズベタイラギの個体数が遙かに多い。渥美外海の浅海で操業する底引き網によって、本種の幼貝から若い個体の殻が大量に採集されることがあるが、生貝は少ない。

【世界および国内の分布】

日本以外での生息状況は不明。国内では、本州から九州の内湾から湾口部にかけての低潮線から水深30mの砂泥底に分布する。瀬戸内海以西ではズベタイラギより生息地が多い傾向がある(山下・木村, 2012)。有明海での漁獲では本種が圧倒的に多い。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾の干潟から潮下帯の砂泥底に、殻の後縁の部分を出した状態で大部分が埋もれて生息する。殻前部の足糸口からでる足糸を底質中の礫等に付着させ、かつ深く埋没しているため、掘り出すのは容易ではない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。上述したように県内の潮下帯は環境が悪化しているため、本種の生息場所、生息数とも減少している。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。内湾から外洋域、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。また本種は重要な食用種なので、漁獲圧による資源量の減少も無視できない。詳細な資源量の調査に基づく適正な漁獲と資源管理が不可欠である。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp.
木村昭一, 2010. タイラギ, p. 213. in: レッドデータブックなごや2010(2004年版補遺), 316pp. 名古屋市環境局.
山下博由・木村昭一, 2012. リシケタイラギ, p. 114. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.
横川浩治, 1996. タイラギ2型の遺伝的分化. *Venus*, 55: 25-39.

【関連文献】

- 木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第34報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(木村昭一)

ズベタイラギ *Atrina pectinata* (Linnaeus)

【選定理由】

2009年版愛知県レッドデータブックには、タイラギとして以下に記す2種を合わせて準絶滅危惧種として掲載されていた環境省第4次レッドリストでは、横川(1996)の研究結果に基づき、従来タイラギとされていた種には2種が含まれていることを採用し、ズベタイラギ *Atrina pectinata* (Linnaeus)、タイラギ(リシケタイラギ) *A. lischkeana* (Clessin) の2種として掲載された。本書でもこれに従い2種として扱う。個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。本県では、内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化している、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は1960年代には三河湾奥部の渥美湾で海水浴客が誤って踏んで足をけがするほど多産した(愛知県科学教育センター, 1967)。しかし、近年三河湾奥部では死殻すら採集できない。三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺では現在も漁業対象種となっているが、その量は年々減少している。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長30cmを越える大型種。長い三角形の殻で、黒褐色。殻はやや厚いが脆い。殻は長い三角形で、多数の低い肋が走るが、リシケタイラギのような鱗片はなく、殻表は平滑。従来“タイラギの無鱗型”と呼ばれていた種。三河湾湾口部ではリシケタイラギより本種の方が大型になり、漁業対象として多く採集されている。貝殻中央部の貝柱は大きく美味で、高価に取り引きされる。



名古屋市名古屋港沖(コアサンプラー水深15m), 2009年5月30日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺では現在も漁業対象種として採取されている。2008、2009年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深15mの泥底から生貝が1個体、死殻が少数ではあるが採集された(木村, 2010)。

【世界および国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸に分布する。国内では、本州から九州の内湾から湾口部にかけての低潮線から水深30mの砂泥底に分布する。瀬戸内海以西ではリシケタイラギより生息地が少ない傾向がある(山下・木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾の干潟から潮下帯の砂泥底に、殻の後縁の部分を出した状態で大部分が埋もれて生息する。殻前部の足糸口からでる足糸を底質中の礫等に付着させ、かつ深く埋没しているため、掘り出すのは容易ではない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。上述したように県内の潮下帯は環境が悪化しているため、本種の生息場所、生息数とも減少している。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。内湾から外洋域、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。また本種は重要な食用種なので、漁獲圧による資源量の減少も無視できない。詳細な資源量の調査に基づく適正な漁獲と資源管理が不可欠である。

【特記事項】

レッドデータブックなごや2010(木村, 2010)では、本種と正しく同定された名古屋港沖産生貝標本が図示されていたが、レッドデータブックなごや2015(木村 加筆 川瀬, 2015)では長崎県産のタイラギ(リシケタイラギ)が図示されているので、ここに訂正する。現在まで名古屋港沖ではズベタイラギのみが確認されている。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp.
木村昭一, 2010. タイラギ, p. 213. in: レッドデータブックなごや2010(2004年版補遺), 316pp. 名古屋市環境局.
木村昭一 加筆 川瀬基弘, 2015. タイラギ, 455p. in: レッドデータブックなごや2015 動物編, 504pp. 名古屋市環境局.
山下博由・木村昭一, 2012. ズベタイラギ, p. 114. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.
横川浩治, 1996. タイラギ2型の遺伝的分化. *Venus*, 55: 25-39.

【関連文献】

- 木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第34報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(木村昭一)

ソトオリガイ *Exolaternula liautaudi* (Mittre)

【選定理由】

本種は内湾の河口域や奥部の泥干潟に生息する。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる。本種は現在でも汐川干潟（藤岡・木村，2000）、豊川河口域（松岡ほか，1999）、矢作川河口域などの三河湾奥部に健全な個体群が残っている。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。



田原市汐川干潟，2017年4月12日，木村昭一採集

【形態】

殻長約 45 mm で、殻は長楕円形で膨らみは強い。殻は非常に薄く、白色で半透明。後端は開く。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、生息場所、個体数が減少している。

【世界及び国内の分布】

日本、中国、東南アジア。国内では北海道以南九州まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は悪化しているため、本種の生息場所、個体数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

葉山しおさい博物館（2001）では相模湾の個体群が消滅寸前にランクされている。

【引用文献】

藤岡えり子・木村妙子，2000. 三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告，10: 31-39.

葉山しおさい博物館，2001. 相模湾レッドデータ 貝類，104pp.

松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己，1999. 豊川下流域の貝類相. 豊橋市自然史博物館研究報告，9: 15-24

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

オキナガイ *Laternula anatina* (Linnaeus)

【選定理由】

本種は、内湾から湾口部にかけての干潟から潮下帯の砂泥底にすむ。また外洋の潮下帯から水深 50 m 程度の砂泥底にも生息する。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖(木村, 1996; 木村, 2000)、名古屋港沖(2016年10月調査; 木村, 未発表資料)で生貝が少数採集されているが、蒲郡市沖などの三河湾奥部では、死殻も稀にしか採集できず、近年生貝が確認されていない。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。



蒲郡市沖水深 5 m(ドレッジ), 1995年4月30日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約 40 mm で、殻は長楕円形で膨らみはやや強い。殻は非常に薄く半透明。殻表には微小な顆粒状の突起が多数密生する。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、県内内湾域では生息場所、個体数が減少し、三河湾奥では死殻も稀で生息が確認できない。渥美外海では現在でも底引き網漁船により生貝が採集されている。

【世界及び国内の分布】

日本、中国、東南アジア、インド洋。国内では房総半島以南九州まで分布する。フィリピン、オーストラリア等南方産の個体は日本産個体と比べて殻高が大きく、分類学的な検討が必要である。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟から潮下帯の環境は悪化しているので、本種の生息場所、個体数とも減少したと考えられる。渥美外海の潮下帯から水深約 50 m までの砂泥底では、内湾域と比べて多くの個体が生息していると考えられる。

【保全上の留意点】

上述したように県内内湾の干潟から潮下帯の環境を保全する。

【引用文献】

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

ツキガイモドキ *Lucinoma annulata* (Reeve)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の砂泥底に生息する。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では生貝が採集されるが、個体数は少ない(中山, 1980; 木村, 1996; 木村, 2000)。

本種は潮間帯には生息せず、やや深い潮下帯に生息するため、新生堆積物量の増加に伴う無酸素層発生の影響を受けている可能性が高い。本種は水質汚濁、底質環境の泥質化、有機物量の増加、貧酸素の発生等により生息基盤が脅かされている種と考えられる。

【形態】

殻長約 30 mm で、殻は類円形で膨らみは弱い。殻表は間隔の広い板状の輪肋がある。殻は白色であるが、生時や新鮮な死殻には茶褐色の殻皮がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、生息場所、個体数が減少している。

【世界及び国内の分布】

東シナ海、日本海、南西北海道以北、アラスカ、カリフォルニアの水深 25-

670 m の砂泥底に分布(松隈, 2017) するとされているが、県内では三河湾、伊勢湾の水深 20 m 前後の砂泥底でのみ生息が確認されている。また、渥美外海から熊野灘の 1000 m までの調査でも、本種は死殻すら採集できず(木村・木村, 2017 など)、前述した本種の著しく広い分布域は近似種を混同している可能性がある。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は悪化しているため、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

葉山しおさい博物館(2001)では相模湾の個体群が消滅にランクされている。

レッドデータブックなごや 2010(木村, 2010)では、本種と正しく同定された名古屋港沖産の生貝標本が図示されていたが、レッドデータブックなごや 2015(木村 加筆 川瀬, 2015)では産地不詳の標本に差し替えられている。その地で採集された貝類の画像はレッドデータブックの大きな資料(データ)で、さらに本種は分布域、分類学的な検討が必要な種でもあり、特に産地不詳の標本は図示しないことが望ましい。

【引用文献】

- 葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.
木村昭一, 2010. ツキガイモドキ, p. 214. in: レッドデータブックなごや 2010 (2004 年版補遺), 316pp. 名古屋市環境局.
木村昭一 加筆 川瀬基弘, 2015. ツキガイモドキ, p.456. in: レッドデータブックなごや 2015, 503pp. 動物編. 名古屋市環境局.
木村昭一・木村妙子, 2017. 軟体動物門. in: 木村妙子・木村昭一・自見直人・角井敬知・富岡森理・大矢佑基・松本 裕・田邊優航・長谷川尚弘・波々伯部夏美・本間理子・細田悠史・藤本心太・倉持利明・藤田敏彦・小川晟人・小林 格・石田吉明・田中 颯・大西はるか・縮次美穂・吉川晟弘・田中正敦・榎田優花・前川陽一・中村 亨・奥村順哉・田中香月(著) 三重県熊野灘の深海底生生物相. 三重大学フィールド研究・技術年報 16: 5-7, 17.
松隈明彦, 2017. ツキガイモドキ. in: 奥谷喬司(編著) 日本近海産貝類図鑑 [第二版]. pp. 559, 1218. 東海大学出版部, 平塚.
中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6): 10-12.

(木村昭一)



名古屋市名古屋港沖(コアサンブラー水深 15 m), 2009 年 5 月 30 日, 木村昭一採集

マメアゲマキ属の一種 *Scintilla* sp.

【選定理由】

2016年と2017年の6月に行われた佐久島(三河湾)調査での、愛知県初記録種である(早瀬・木村, 2020)。2018年6月に行われた日間賀島の調査でも、2例目の生息が確認された(早瀬・他, 2019)。現時点では、三河湾の湾奥～湾口にかけての中間的位置のみに確認され、分布域も狭い範囲に限定され、個体数密度も少ないことから、愛知県下では、将来的に絶滅の危険性を考慮すべき種と判断される。愛知県下では、近年になって初めて存在が確認された種であるため、減少傾向は不明であるが、三河湾では、湾奥や外海に面した環境には生息しておらず、生息が特定範囲に限られており、さらに、埋没石の下などの僅かな隙間の微環境下のみに生息することから、閉鎖的内湾での夏季の貧酸素水塊の発生や海域の富栄養化に伴う海底へのドロ化、浅海域の開発などの環境悪化も懸念されるため、将来的に絶滅の危険性を考慮すべき種と考えられる。

【形態】

殻長7.7~8.1 mm、殻高5.4~5.7 mm程度の丸みを帯びた楕円形の小型種である。殻はきわめて薄く、白色。殻表は弱い成長線が見られる程度であり、平滑で光沢が強い。軟体は白色で、外套膜が殻表全体を覆い、細くやや短い外套膜突起が複数認められる。外套膜突起は白一色であり、三河湾では本種の生息地よりもやや湾奥寄りの環境に確認されている近似種のツヤマアゲマキ(631頁を参照)の外套膜突起先端部が黄橙色になる特徴とは異なるので、両者は識別可能である。イナヅマアゲマキにも似るが、イナヅマアゲマキは、殻がごく薄い紫色を帯び大形である点において識別される。足は、匍匐するために、長く伸長させることが可能である。



西尾市佐久島, 2016年6月4日, 早瀬善正採集

【分布の概要】

【県内の分布】

佐久島と日間賀島の2島(三河湾)の潮間帯より生息記録が知られる(早瀬・木村, 2020; 早瀬・他, 2019)。

【世界および国内の分布】

国外での分布は明らかになっていないが、日本を中心とする温帯域の固有種と思われる。現時点では、明確な分布記録は三河湾のみであるが、志摩半島周辺にも生息および分布確認されている(木村昭一, 未発表)。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、佐久島と日間賀島(三河湾)の潮間帯下部の転石地である。埋没石下に複数確認された。生息地周辺では陸域から淡水が滲出している例が確認される。本種は一般的な二枚貝と同様に、浮遊する有機体の懸濁物質(SS)を鰓の繊毛の動きで集めて摂食すると考えられる。本種は、異なる大きさの個体と同じ石の埋没面の同所に集まって付着する状況が確認されることから、複数の世代が1つの埋没石下で1集団を構成していると推測される。本種は成貝(親貝)より直接稚貝が産出される胎生(卵胎生)の種であることが確認されており(早瀬・木村, 2020)、集団が複数の世代からなる理由は、成長の進んだ個体が順次、稚貝を産出し、それらからなる集団(コロニー)を形成するためと推測される。また、本種などが外套膜突起を発達させ、腹足類(巻貝類)の様に匍匐することは、外敵防御のため、カニやウミウシへの擬態の可能性が考えられている(大貫・早瀬, 2016; Ohtsuka et al., 2017)。

【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、佐久島と日間賀島(三河湾)で確認されたのみである。埋没石の酸化鉄によると思われる茶褐色となる石裏に付着する個体が複数確認された。埋没石の埋没面が黒色の硫化物で覆われるような場所には確認されなかった。これまでの調査では、佐久島と日間賀島より湾奥では確認されていないので、三河湾および伊勢湾の湾口部の転石地に生息が限定されるものと推測する。湾口にかけての未調査の転石地では、さらに分布地が追加される可能性があると考えられる。最近、愛知県下での存在が確認されたばかりの種であり、減少傾向が確認されていないが、生息場所はきわめて狭く局地的であり、周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

【保全上の留意点】

本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが重要である。

【特記事項】

近似する種は何種か存在するが、それらとの種間関係も明らかでなく、現時点では本種の学名が明らかになっていない。未記載種の可能性も考えられる。愛知県下では、これまでの調査により、三河湾の湾奥～湾口にかけて複数のウロコガイ上科の貝類が微環境ごとに棲み分けをしているような分布状況が推察された。三河湾という一つの湾内で、同じグループ(ウロコガイ上科)の稀少貝類が、微環境ごとに出現種の変化を示すことは、生物面から見た環境指標ともなり得るので、本種をはじめとするウロコガイ上科は、各絶滅危惧種の生息環境の指標種としても、有効なグループの一つである。このような側面からも、三河湾での本種個体群の存在は重要であり、保護する必要がある。

【引用文献】

早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相, ちりぼたん, 50(1): 33-79.

早瀬善正・木村昭一・西浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島(三河湾)の潮間帯貝類相, かきつばた, (44): 1-15.

Ohtsuka, S., Hasegawa, K., Kimura, T., Miyake, H., Kondo, Y., Iida, K., Pagliawan, H. & Metillo, E., 2017. Possible mimicry in the Galeommatid bivalves *Scintilla philippinensis* (Bivalvia: Galeommatidae) to nudibranchs and crabs. *Venus*, 75(1-4): 93-98.

大貫貴清・早瀬善正, 2016. 貝類, pp.194-231. in: 石川智士・吉川尚(編), 幅豆の海と人びと, 図録14 + xvii + 362pp.+v. 総合地球環境学研究所, 京都.

【関連文献】

環境省自然環境局野生生物課少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 図録8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)

マテガイ *Solen strictus* Gould

【選定理由】

本種は内湾の砂質干潟に深く潜って生息する。食用種としてよく知られている。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる。県内でも本種は砂質干潟に多産し、食用にされていた(愛知県科学教育センター, 1967)が、近年個体数が著しく減少し、多産する場所は非常に少なくなった。現在でも一色干潟や知多半島南部、渥美半島西部(三河湾、伊勢湾)などでは潮干狩りの対象とされており、本種が多産する干潟も確認されるようになったが、夏期に観察される幼貝の大量斃死は依然として広域で継続して発生しており、将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



幡豆郡鳥羽干潟, 2001年7月15日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約 10 cm、殻は前後に著しく延長した長方形で直線的で、膨らみは弱い。殻はやや薄く、両端は裁断状。殻表は平滑で、生きている時は光沢の強い黄褐色の殻皮で覆われる。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、生息場所、個体数が減少している。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国。国内では北海道南西部以南九州まで分布する。沖縄島にも分布し(久保, 2012)、沖縄島産の個体群は国のレッドリストで絶滅のおそれがある地域個体群に評価されている。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は悪化しているため、本種の生息場所、個体数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。特に夏期の貧酸素水塊の発生は、本種(幼貝が多い)の大量斃死を引き起こしている可能性が高い。

【引用文献】

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.

久保弘文, 2012. マテガイ, p. 171. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

ゴイサギ *Macoma tokyoensis* Makiyama

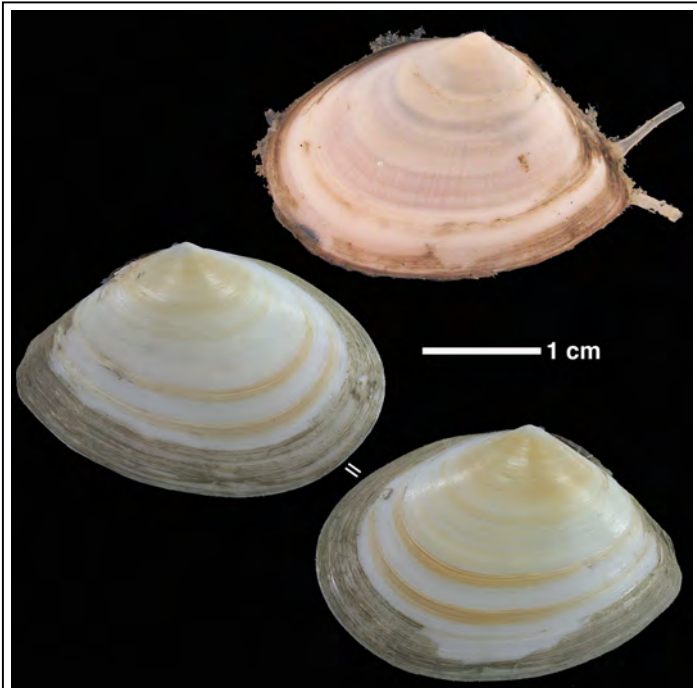
【選定理由】

本種は、内湾潮下帯 (水深 10–50 m) の泥底に生息するニッコウガイ科としてかつては普通種で、県下内湾域でも健全な個体群が確認されていたが、近年三河湾、伊勢湾で操業する底引き網で生貝が混獲される機会が著しく減少している。ドレッジによる調査でも名古屋港 (木村, 2010)、三河湾、伊勢湾 (木村, 2000) で生貝が採集されたが、個体数は少ない。

近年、伊勢湾、三河湾の外洋水の影響が強い潮通しの良い浅海域の一部では、窒素・リンの流入負荷減少に伴う水質及び底質環境の明らかな改善傾向が認められている (早瀬・木村, 2017)。しかし、県下の干潟、藻場の面積は高度成長期にかけて最も減少した時点のままであり、累積する新生堆積物量は増加している (岸田, 2008)。本種は潮間帯には生息せず、やや深い潮下帯に生息するため新生堆積物量の増加に伴う無酸素層発生の影響を受けている可能性が高い。本種は水質汚濁、底質環境の泥質化、有機物量の増加、貧酸素の発生等により生息基盤が脅かされている種と評価された。

【形態】

殻長 50 mm 程度まで成長する。殻は卵形で膨らみは弱く扁平で、殻質はやや薄く脆い。殻はほとんど白色であるが、成長脈に沿って淡黄褐色の色彩がでる。生時、殻の周縁部はやや厚い殻皮で覆われる。殻頂部は殻皮はなく光沢がやや強く、後端はやや尖る。サギガイ *Rexithaerus sector* (Ōyama) と近似するが、サギガイは本種よりやや大型で、殻皮も薄く (ほとんどない個体も多い)、殻の後端は尖らず、裁断状となる。



名古屋市名古屋港沖(コアサンプラー水深 15 m), 2009 年 5 月 30 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県下では伊勢湾、三河湾の潮下帯の広い範囲に生息が確認されていた普通種であったが、近年生貝の個体数が著しく減少している。

【世界および国内の分布】

松隈 (2017) では、北海道南西部から九州に分布するとされているが、本種は中国 (QI, 2004)、朝鮮半島 (関, 2001) にも分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は大きな内湾域の潮下帯 (水深 10–50 m) の泥分の多い砂泥底にやや深く埋もれて生息する。生態的特性はほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては普通種で、湾内で操業する底引き網漁で普通に混獲されたが、近年生貝が採集される機会が著しく減少している。本種は潮間帯には生息せず、内湾域としてはやや深い (水深 10–50 m) 潮下帯に生息するため、新生堆積物量の増加に伴う無酸素層発生の影響を受けやすいと考えられる。

【保全上の留意点】

県下の干潟、藻場の面積は高度成長期にかけて最も減少した時点のままであり、累積する新生堆積物量は増加している (岸田, 2008)。本種の生息基盤に悪影響を与える海底の新生堆積物量を減らす必要がある。

【特記事項】

本種は既に名古屋市レッドデータブックに準絶滅危惧種として掲載されている (木村, 2010)。

【引用文献】

- 関德基, 2001. 新原色韓国貝類図鑑. 332pp. 関貝類博物館, 韓国.
早瀬善正・木村昭一, 2017. 河和 (三河湾) の内湾潮間帯の貝類相. ちりぼたん, 47 (1–4): 28–42.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26), 18–20.
木村昭一, 2010. ゴイサギガイ. in: レッドデータブックなごや 2010 (2004 年版補遺). pp. 217. 名古屋市環境局.
岸田弘之, 2008. 流域における物質循環の動態と水域環境への影響に関する研究. 建設マネジメント技術 (2008 年 10 月号): 27–33.
松隈明彦, 2017. ゴイサギ. in: 奥谷番司 (編著) 日本近海産貝類図鑑 [第二版]. pp. 596, 1257. 東海大学出版部, 平塚.
QI Zhongyan, 2004. Seashells of China. 418 pp, 193 pls. China Ocean Press, Beijing, China.

(木村昭一)

ユウシオガイ *Moerella rutila* (Dunker)

【選定理由】

本種は内湾の最も奥部の砂泥干潟に生息する。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる。本種は現在でも汐川干潟（藤岡・木村, 2000）、豊川河口域（松岡ほか, 1999）、蒲郡市などの三河湾奥部に健全な個体群が残っている。しかし、本種の生息域は内湾域の奥部にあるため、人為的な改変の影響を受けやすく、将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長約 15 mm。殻は卵形で膨らみは弱く扁平。殻はやや薄く、後端は裁断状となる。殻の色彩は白色、黄色、橙色の 3 型がある。



【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、生息場所、個体数が減少している。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、台湾、国内では陸奥湾～九州まで分布する（木村, 2012）。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は悪化しているため、本種の生息場所、個体数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

葉山しおさい博物館（2001）では相模湾の個体群が消滅にランクされている。

【引用文献】

- 藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, 10: 31-39.
- 葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.
- 木村昭一, 2012. ユウシオガイ, p. 126. in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己, 1999. 豊川下流域の貝類相. 豊橋市自然史博物館研究報告, 9: 15-24.

(木村昭一)

サクラガイ *Nitidotellina hokkaidoensis* (Habe)

【選定理由】

本種は内湾の潮間帯から潮下帯の砂泥底に生息する。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化している、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は1960年代には三河湾奥部から湾口部にかけての広い範囲で打ち上げられる貝としてごく普通で、また多産したが(愛知県科学教育センター, 1967)、現在では打ち上げられる海岸も激減し、明らかに生息場所、個体数とも減少している。近年でも三河湾湾口部の一部では健全な個体群が残っているが、そのような場所は少ない(木村, 1996; 木村, 2000)。



南知多町河和干潟, 1993年2月2日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約 20 mm、殻は長い卵形で膨らみは弱く扁平、殻質は薄く桃から桃白色。殻表は平滑で光沢がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、生息場所、個体数が減少している。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、国内では北海道南部～九州に分布する(木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は悪化しているため、本種の生息場所、個体数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

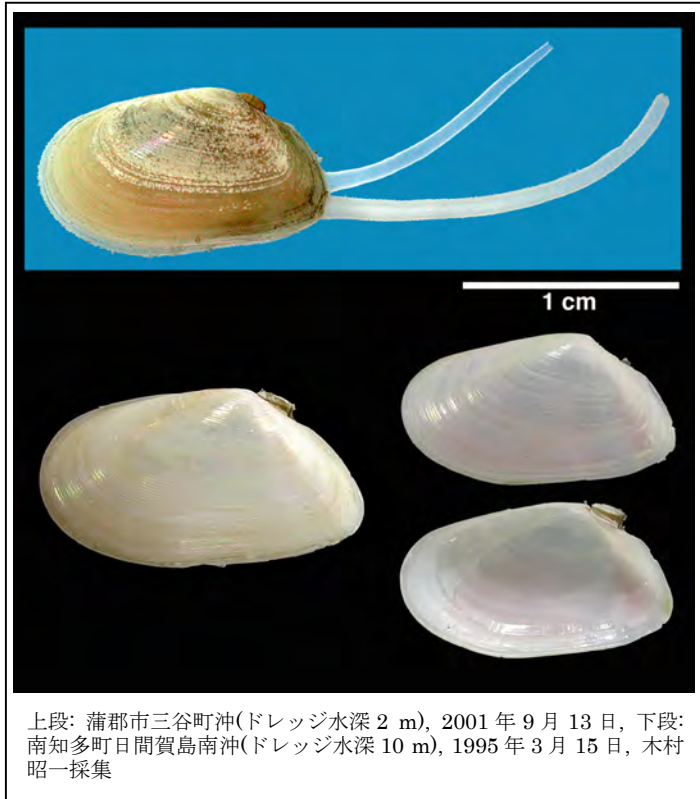
木村昭一, 2012. サクラガイ, p. 126. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

ウズザクラ *Nitidotellina lischkei* M. Huber, Langleit et Kreipl

【選定理由】

本種は内湾の潮間帯から潮下帯の砂泥底に生息する。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化している、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も明らかに生息場所、個体数とも減少している。現在でも三河湾湾口部の一部では健全な個体群が残っているが、そのような場所は少ない(木村, 1996; 木村, 2000)。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



【形態】

殻長約 10 mm、殻は長い卵形で膨らみは弱く扁平。殻は薄く、白色から桃色で、殻表は成長脈がやや強いが光沢がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、生息場所、個体数が減少している。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、国内では北海道南部～九州まで分布する(木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は悪化しているため、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

本種は近年の分子生物学的手法による解析から複数種が含まれている可能性が示唆されている(木村, 2012)。それを裏付ける様に各地の標本を比較すると殻形態にも相違がみられるが、県内内湾域で採集される個体には形態的な変異がほとんど認められず、単一種が分布している可能性が高い。

【引用文献】

- 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.
木村昭一, 2012. ウズザクラ, p. 126. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

フジノハナガイ *Donax semigranosus* Dunker

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。外洋に生息するイメージが強いが、内湾域にも広く分布していた種 (木村, 2012)。1980年代後半に伊勢湾・三河湾の内湾域で個体数が激減し、全く生息が確認できなくなった場所も多い。現在、知多半島、渥美半島の伊勢湾沿岸などでは回復傾向が認められるが、三重県側の伊勢湾の回復状況には及ばない。三河湾では湾口部以外の沿岸では依然として回復傾向は認められない。渥美半島外海側では生息地が散見されるが、将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長 20 mm 程度に成長するが、現在では 15 mm 前後の個体が多い。殻は亜三角形で、膨らみは弱い。殻質は厚い。殻表は光沢があり、白色、淡黄白色、淡褐色、薄紫色など個体変異が多い。殻の内側は濃い藤色に彩られる個体が多い。



南知多町内海海岸, 2000年9月16日, (矢印は殻が見えないほど深く埋もれた個体の水管を示す), 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内の分布域は比較的広く、知多半島・渥美半島の伊勢湾沿岸、渥美半島の遠州灘沿岸域のほぼ全域に分布するが、生貝が確認されている場所は少ない。近年、知多半島南部内海海岸周辺では、冬季に海岸に生貝が多数打ち上がることが確認されている。

【世界および国内の分布】

日本、中国大陸、タイに分布する。国内では、房総半島から九州までの内湾から外洋域の砂質底の潮間帯に生息する。三浦半島沿岸や玄界灘沿岸の外洋に開けた内湾域では安定した個体群が確認されている (木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾から外洋にかけての潮間帯上部の砂底に生息する。潮汐の周期に連動した垂直移動をする貝として有名である (木村, 2012)。内湾域では、潮通しが良く有機質や泥分が少ない砂質底を好むようである。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。減少の要因としては、内湾域の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していること等があげられる。本種の場合、特に底質の有機質、泥分の増加も減少の要因として考えられる。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。特に、本種の生息基盤としての有機質、泥分の少ない潮間帯の砂底の保全が重要であろう。

【引用文献】

木村昭一, 2012. フジノハナガイ, p.130. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.

【関連文献】

鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版 (南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(木村昭一)

オオノガイ *Mya arenaria* Linnaeus

【選定理由】

本種は内湾奥部の泥干潟に深く潜って生息する。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる。本種は現在でも汐川干潟（藤岡・木村, 2000）、一色干潟などの三河湾奥部に健全な個体群が残っている。本種は太い水管が食用となり、現在でも自家消費的に採集されている。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長約 10 cm と殻は大形であるが殻質は薄く脆い。殻は長い卵形で、後端は細くなり両殻は開く。殻は白色から灰白色で、生きている時には殻の一部は、淡褐色の薄い殻皮で覆われる。



【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、生息場所、個体数が減少している。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、国内では北海道～九州まで分布する（木村・山下, 2012）。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は悪化しているため、本種の生息場所、個体数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

レッドデータブックなごや 2010（木村, 2010）では、本種と正しく同定された藤前干潟産生貝標本（図 2）が図示されていたが、レッドデータブックなごや 2015（木村 加筆 川瀬, 2015）では北海道根室市産の別種キタノオオノガイ *Mya uzenensis* Nomura & Zinbo が図示されているので、ここに訂正する。

【引用文献】

藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, 10: 31-39.

木村昭一, 2010. オオノガイ, p. 219. in: レッドデータブックなごや 2010 (2004 年版補遺), 316pp. 名古屋市環境局.

木村昭一・山下博由, 2012. オオノガイ, p. 167. in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

木村昭一 加筆 川瀬基弘, 2015. オオノガイ, p. 465. in: レッドデータブックなごや 2015 動物編, 503pp. 名古屋市環境局.

(木村昭一)

ミルクイ *Tresus keenae* (Kuroda et Habe)

【選定理由】

本種は内湾の浅海域（潮下帯）の砂泥底に生息する大型の二枚貝で、内湾から湾口部にかけての潮下帯砂泥底に太い水管を出してすむ。県内では内湾域の潮下帯の環境は急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種はミルクイと呼ばれ高級すしだねとして三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺では現在も漁業対象種となっている。ただし、1990年までの20年間で資源量が激減し、それまでほとんど利用されなかったシロミル（キヌマトイガイ科の標準和名ナミガイ *Panopea japonica* (A. Adams)) を代用として採捕するようになった（日間賀島漁協聞き取り調査）。引き続き県内では底引き網、潜水で漁獲されているが、将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



西尾市幡豆沖(小型底引き網水深 10–30 m), 2000年10月, 木村昭一採集

【形態】

殻長 15 cm を越える大型種。楕円形で殻は厚く膨らむ。後端は幅が広く裁断状で殻の間は広く開く。殻は白色だが殻皮は黒褐色で厚い。水管は長大で(図上)、主に食用に供される部位である。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺の潮下帯に分布し、漁業対象種になっているが、個体数は減少している。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、国内では北海道南部～九州まで分布する（山下・木村, 2012）。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は悪化しているので、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

葉山しおさい博物館（2001）では消滅寸前にランクされている。

【引用文献】

- 葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.
中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6): 10–12.
山下博由・木村昭一, 2012. ミルクイ, p. 144. in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

ハマグリ *Meretrix lusoria* (Röding)

【選定理由】

本種は分布全域で著しい減少が報告されており、1990年代には瀬戸内海、有明海のごく一部や天草などに健全な生息場所が残されていたが、その他では非常に稀な種となってしまった(和田・他, 1996)。県内でも本種は1960年代には三河湾奥部の前芝付近、福江湾で多産し、食用にされていた(愛知県科学教育センター, 1967)が、1980年代には著しく生息地と個体数が減少し、2000年頃までは、死殻確認例も少ない状況であった。その後、蒲郡市三谷地先人工干潟(木村, 2004, 2005)で生貝が採集され、2010年代からは県内内湾域で潮干狩りの対象とされるほどに個体数が増加した。現在も潮通しの良い内湾河口域を中心に回復傾向は継続している。干潟(潮間帯)でも小型個体に加えて、大型個体も確認できるようになった。前回(VU)よりランクダウンするべき種と評価された。



上段2個体：蒲郡市三谷地先人工干潟, 2005年7月21日,
下段：南知多町河和北側干潟, 2017年6月23日, 木村昭一採集

【形態】

殻長10 cmに達する大型種。殻は丸みを帯びた三角形で、殻はよく膨れるが殻質は薄い。殻の色彩は濃い褐色から灰褐色まで個体変異が多く、模様も変異する。チョウセンハマグリは殻が厚く、腹縁は直線的で、本種とは別種である。県内では渥美半島外洋側の浅海砂地に生息している。また市場で見られるシナハマグリ(中国、韓国からの輸入ハマグリ類)は殻全体に丸みが強く、殻の模様は褐色の稲妻模様のある個体が大部分で、色彩の変異も少ない。

【分布の概要】

【県内の分布】

生息地と個体数が著しく減少していたが、近年回復傾向が認められており、愛知県レッドリスト2002, 2009, 2015, 2020ではランクもCR→CR→VU→NTと評価されている。しかし、依然として1960年代の生息状況にまでは回復していない。

【世界及び国内の分布】

日本と韓国南部に分布し、日本では、陸奥湾～九州まで分布する(山下, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように、県内の干潟から潮下帯は有機汚泥の堆積、無酸素層の発生などで環境が著しく悪化し、1960年代に多産し食用にされていた本種の生息場所、個体数は著しく減少した。現在底質改善が進んだ海域を中心に回復傾向が確認されている。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

水産庁・水産資源保護協会(1994)では減少にランクされ、葉山しおさい博物館(2001)では相模湾の個体群が消滅にランクされている。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.
水産庁・水産資源保護協会, 1994. 軟体動物. 日本の希少な野生水産生物に関する基礎資料(Ⅰ), 123pp.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.
木村昭一, 2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた, (30): 14-20.
木村昭一, 2005. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相 続報. かきつばた, (31): 29-31.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.
山下博由, 2012. ハマグリ, p. 150. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

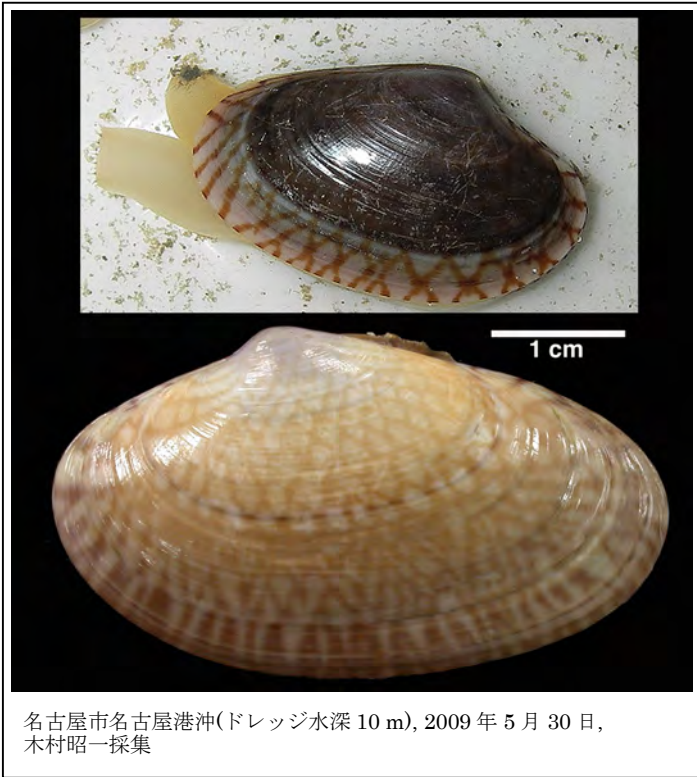
イヨスダレガイ *Paratapes undulatus* (Born)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の砂泥底に生息する。県内でも潮下帯の環境が著しく悪化していて、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる。1999年からの3回(30地点以上)、知多半島伊勢湾側から三河湾湾口部の海域をドレッジにより調査したが、生貝は採集されず、少数の死殻が採集されたにすぎない(木村, 2000; 木村, 未発表資料)。2008, 2009年、名古屋港沖の潮下帯の砂泥底より普通に生貝が採集された(木村, 2010)。また近年、三河湾や伊勢湾で操業する底引き網(トリガイ桁網)漁船によって生貝が採集される頻度と個体数が明らかに増加している。明らかな回復傾向が認められたので、前回(VU)よりランクダウンすべき種と評価された。

【形態】

殻長約40mmで殻は前後に長い楕円形。殻はやや薄く、膨らみは弱い。殻表には光沢があり、殻頂部以外には赤紫褐色の放射状の網目模様がある。県内の本種(日本周辺に生息する個体群に共通)は、網目模様と地色のコントラストが弱く殻頂部の丸みが強く、成長脈とは別に殻表に前側背面から後側腹縁に向かって走る条線が弱い。本種はインド・太平洋に広く分布するが、海外の個体とは上述の特徴から区別できる。今後分類学的な検討も必要である。



名古屋市名古屋港沖(ドレッジ水深10m), 2009年5月30日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、生息場所、個体数が減少していたが、近年生貝の個体数も増加し、回復傾向が認められる。

【世界及び国内の分布】

日本、太平洋、インド洋。国内では房総半島以南に分布する。本州から九州に生息する個体と南方産の個体には殻形態に差異が認められるので、分類学的な再検討が必要である。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように潮下帯の環境は悪化しているので、本種の生息場所、個体数とも減少したと考えられる。近年、回復傾向が認められる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

レッドデータブックなごや2010(木村, 2010)では、本種と正しく同定された名古屋港沖産標本(上図)が図示されていた。レッドデータブックなごや2015(木村 加筆 川瀬, 2015)では“三河一色”産個体が図示されているが、前述したような特徴の相違から日本産個体ではない可能性が高い。その地で採集された貝類の画像はレッドデータブックの大きな資料(データ)の一つなので、他産地の標本、特に形態的特徴が異なる標本は図示しないことが望ましい。

【引用文献】

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.
木村昭一, 2010. イヨスダレガイ, p. 209. in: レッドデータブックなごや2010(2004年版補遺), 316pp. 名古屋市環境局.
木村昭一 加筆 川瀬基弘, 2015. イヨスダレガイ, p. 434. in: レッドデータブックなごや2015 動物編, 285pp. 名古屋市環境局.

(木村昭一)

【 情報不足の種 】

情報不足の種について、簡易な解説を以下に記述した。

1. **ピルスブリムシオイガイ** *Chamalycaeus pilsbryi* (Kobelt)
陸産貝類 ヤマトニシ上科 ヤマトニシ科 (国：リスト外)
県下からの記録は2例(瀬戸市吉野町：守谷, 2004. かきつばた(29): 41. ; 豊田市有間町(旭地区)：川瀬・他, 2012. 矢作川研究(16): 11-26.) あるが、現状ではまだ西三河地域が調査不足と思われ、情報不足と評価された。
2. **サドヤマトガイ** *Japonia sadoensis* Pilsbry et Y. Hirase
陸産貝類 ヤマトニシ上科 ヤマトニシ科 (国：準絶滅危惧)
これまでに愛知県下の本種とされた記録の標本を実見できていない。現時点では、県下での本種の生息実態が不明であり、情報不足と評価された。
3. **ケンガイ** *Carychium pessimum* Pilsbry
陸産貝類 オカミミガイ目 オカミミガイ科 (国：準絶滅危惧)
近年、分類学的再検討が必要な種とされる。これまでに愛知県下の本種とされた記録の標本も実見できておらず、現時点では、本種の生息実態が不明なため、今改訂で新たに情報不足と評価された。
4. **フトキセルガイモドキ** *Mirus japonicus* (Möllendorff)
陸産貝類 柄眼目 キセルガイモドキ科 (国：リスト外)
過去の標本が存在する瀬戸市定光寺では再発見されない。近年の確認記録がなく絶滅の可能性が高いが、東三河に生息する濃褐色のやや細い個体群が本種の可能性もあり、遺伝子レベルでの再検討も必要。現時点では評価するための調査および検証が不十分であり、情報不足と評価された。
(1~4. 早瀬善正)
5. **モノアラガイ** *Radix cf. japonica* (Jay)
淡水産貝類 モノアラガイ上科 モノアラガイ科 (国：準絶滅危惧)
現在県内で確認されている“モノアラガイ”とされる個体と、1960年代以前に生息し、真のモノアラガイと考えられる個体とは、殻形態が相違する。天保6年3月15日に行われた乙未本草会出品目録での名古屋屋モノアラガイの図(原田, 1996. かきつばた(22): 9-16.) は、イグチモノアラガイに近似し、現在の東北地方や1960年以降の岐阜県にも生息確認された大形個体に一致する。現在の“モノアラガイ”を外來個体群とする科学的根拠はなく、コモノアラガイ(タイワンモノアラガイ)との検討も不十分である。また、1960年代以前に見られた個体が、真のモノアラガイ(*Radix auricularia japonica*)であるとの断定も現時点ではできない。今改訂では、分類学的検討および過去、現在の分布検討不十分の理由より、新たに情報不足と評価された。県下の真のモノアラガイは、高いランクの絶滅危惧種あるいは絶滅種となる可能性がある。
(5. 木村昭一・早瀬善正)
6. **フネドブガイ** *Anemina arcaeformis* (Heude)
淡水産貝類 イシガイ目 イシガイ科 (国：リスト外)
2013年に愛知県より生息が記録されたが、人為的な攪乱が起りやすいため池のみで発見されている。過去に大型種である本種を見逃していたとも考えにくく、移入個体群の可能性がかなり高い。ただし、自然分布である可能性も残っており、現時点では情報不足と評価された。
7. **カラスガイ** *Cristaria plicata* (Leach)
淡水産貝類 イシガイ目 イシガイ科 (国：準絶滅危惧)
記録はあるが実体不明、移入個体群の可能性も否定できない。従って情報不足と評価された。
(6~7. 木村昭一)
8. **ニホンマメシジミ** *Pisidium nipponense* Kuroda
淡水産貝類 ドブシジミ上科 ドブシジミ科 (国：リスト外)
県下から1例のみ報告されたが、このグループの分類には、少なくとも軟体部の形状の検証が不可欠である。軟体部の情報がなく、本種と断定できないため、今改訂で、新たに情報不足と評価された。
(8. 早瀬善正)
9. **マシジミ** *Corbicula leana* Prime
淡水産貝類 マルスダレガイ目 シジミ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)
近年、本種とタイワンシジミ(移入種)とを遺伝的に識別することが出来ないという報告があり、今改訂で新たに情報不足と評価された。

10. ヒメカノコ *Clithon aff. oualaniense* (Lesson)
内湾産貝類 アマオブネガイ上科 アマオブネ科 (国：準絶滅危惧)
県下から記録があるが、本種は南方系種で偶因分布の可能性もあり、情報不足と評価された。
11. ウミヒメカノコ属の一種 *Smaragdia cf. souverbiana* (Montrouzier)
内湾産貝類 アマオブネガイ上科 アマオブネ科 (国：リスト外)
「レッドデータブックあいち 2009」では、ウミヒメカノコに誤同定されて図示された。産出記録が極度に少なく、生貝が採集されないので、今改訂で、新たに情報不足と評価された。
12. ウネナシトカケ *Acrilla acuminata* (Sowerby II)
内湾産貝類 イトカケガイ上科 イトカケガイ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)
死殻は確認しているが現状不明。現時点では情報不足と評価された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。
(9~12. 木村昭一)
13. ヘソカドタマキビ *Lacuna smithi* Pilsbry
内湾産貝類 タマキビ上科 タマキビ科 (国：リスト外)
伊勢湾で死殻の確認報告がされた (河合, 2018. かきつばた(43): 30-34.)。愛知県内に生息している希少種と考えられるが、現時点では調査不十分である。
(13. 早瀬善正)
14. ツガイ *Sinum incisum* (Sowerby I in Reeve)
内湾産貝類 タマガイ上科 タマガイ科 (国：準絶滅危惧)
採集記録はあるが、元々本県では個体数の少ない希少な種であった可能性も高く、情報不足と評価された。
15. ツツミガイ *Sinum planulatum* (Récluz in Chenu)
内湾産貝類 タマガイ上科 タマガイ科 (国：準絶滅危惧)
採集記録はあるが、元々本県では個体数の少ない希少な種であった可能性も高く、情報不足と評価された。
(14~15. 木村昭一)
16. カワザンショウガイ科の一種 “*Assimineia*” sp.
内湾産貝類 クビキレガイ上科 カワザンショウガイ科 (国：リスト外)
三河湾で死殻が確認されるのみである。それ程遠くない過去 (おそらく高度経済成長期) の絶滅種と考えられるが、根拠を示す事が困難で情報不足と評価された。「干潟の絶滅危惧動物図鑑」においては、「オオシンデンカワザンショウに似た種」として記されている。
(16. 早瀬善正)
17. ヒナツボ *Berthais egregia* (A. Adams)
内湾産貝類 シロネズミ上科 シロネズミガイ科 (国：リスト外)
一例のみ名古屋港から死殻が記録されている (河合, 2009. かきつばた(34): 20.) が、情報不足と評価された。
18. フドロ *Margistrombus robustus* (G.B. Sowerby III)
内湾産貝類 スイショウガイ上科 スイショウガイ科 (国：準絶滅危惧)
近年、伊勢湾内湾域より幼貝 (生貝) が1個体採集されたが (佐藤・他, 2019. かきつばた(44): 20-30.)、1例のみなので情報不足と評価された。
19. オニサザエ *Chicoreus asianus* Kuroda
内湾産貝類 新腹足目 アッキガイ科 (国：準絶滅危惧)
生息環境が少なく、元々本県では個体数の少ない希少な種であった可能性もある。現時点では情報不足と評価された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。
20. イワカワトクサ *Duplicaria evoluta* (Deshayes)
内湾産貝類 新腹足目 タケノコガイ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)
外洋潮下帯からは死殻が採集されているが、内湾域での生息状況は不明。現時点では情報不足と評価された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。
(17~20. 木村昭一)
21. ヤマトカクメイ *Cornirostra* sp.
内湾産貝類 ミズシタダミ上科 カクメイ科 (国：情報不足)
伊勢湾 (南知多町内海海岸) に生息記録がある (佐藤・他, 2019. かきつばた(44): 20-30.)。愛知県下の伊勢湾側での調査が不十分なため、現状では情報不足と評価された。

22. シンジュノナミダ *Xenoskenea* sp.
内湾産貝類 ミズシタダミ上科 ガラスシタダミ科 (国：情報不足)
伊勢湾(南知多町内海海岸)に死殻の確認記録がある(佐藤・他, 2019. かきつばた(44): 20–30.)。現時点で生貝が確認されておらず、愛知県下の伊勢湾側での調査が不十分なため、情報不足と評価された。
23. キリツボ近似種 *Graphis* sp.
内湾産貝類 Cimoidea 上科 キリツボ科 (国：リスト外)
伊勢湾(南知多町内海海岸)に死殻の確認記録がある(佐藤・他, 2019. かきつばた(44): 20–30.)。現時点で生貝が確認されておらず、愛知県下の伊勢湾側での調査が不十分なため、情報不足と評価された。
24. イリエゴウナ *Ebala* sp.
内湾産貝類 Murchisonelloidea 上科 ガクバンゴウナ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)
田原市(三河湾)の人工的な環境下での存在が確認されており、近辺の自然環境にも存在する可能性が高いと思われるが、現時点では調査不十分なため、情報不足と評価された。
(21–24. 早瀬善正)
25. シグマクダタマ *Cylichna sigmolabris* (Habe et Ando)
内湾産貝類 頭楕目 クダタマガイ科 (国：リスト外)
知多半島内海沖から打ち上げられた死殻が一例のみ記録されているが(河合, 2018. かきつばた(43): 30–34.)、情報不足と評価された。
(25. 木村昭一・早瀬善正)
26. ヤミヨキセワタ類 *Melanochlamys* spp.
内湾産貝類 頭楕目 カノコキセワタ科 (国：情報不足)
近年分類学的な再検討がなされた(近似種 3 種が存在する事が明らかになった)が、県下内湾干潟各調査地点の標本の分類学的な検討が十分ではないため情報不足と評価された。
27. シゲヤスイトカケギリ(カゴメイトカケギリ) *Pyrgulina shigeyasui* (Yokoyama)
内湾産貝類 トウガタガイ上科 トウガタガイ科 (国：準絶滅危惧)
県下では限られた狭い地域に確認されるが、分類学的な検討と過去の記録の検討が出来ておらず、今回は情報不足と評価された。
(26–27. 木村昭一)
28. ウネイトカケギリ *Turbonilla scrobiculata* Yokoyama
内湾産貝類 トウガタガイ上科 トウガタガイ科 (国：準絶滅危惧)
佐久島(三河湾)で死殻が1個体確認されたのみであり、現時点で県下での生息情報などなく、判断材料に乏しく情報不足と評価された。
(28. 早瀬善正)
29. ハマシイノミガイ *Melampus nuxeastaneus* Kuroda
内湾産貝類 オカミミガイ目 オカミミガイ科 (国：リスト外)
県下には本種の生息環境自体が少なく、生息環境の調査不足。元々本県では希少な種であった可能性もある。現時点では情報不足と評価された。
(29. 木村昭一)
30. ガタヅキ(コハギガイ) *Arthritica* cf. *reikoae* (T. Suzuki et Kosuge)
内湾産貝類 ウロコガイ上科 チリハギ科 (国：情報不足)
県内からの正式な生息記録はない。愛知県下に多数生息しない種と考えられるが、現時点で調査不足であり、情報不足と評価された。
(30. 早瀬善正)
31. ツルマルケボリ *Borniopsis tsurumaru* Habe
内湾産貝類 ウロコガイ上科 チリハギ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)
近年内湾域より死殻が1個体採集されたが、1例のみで情報不足と評価された。
32. オカメブンブクヤドリガイ *Montacuta echinocardiophila* Habe
内湾産貝類 ウロコガイ上科 チリハギ科 (国：リスト外)
近年三河湾で生息が記録された(佐藤・木村, 投稿中)が、情報不足と評価された。
33. マルヘノジガイ *Nipponomysella oblongata* (Yokoyama)
内湾産貝類 ウロコガイ上科 チリハギ科 (国：リスト外)
伊勢湾、三河湾で生貝が採集されており報告もあるが、本種の生息するアマモ場の詳細な調査が不足しており、今回は情報不足と評価された。

34. オキナノエガオ *Platomyia rugata* Habe
内湾産貝類 ウロコガイ上科 チリハギ科 (国：絶滅危惧Ⅰ類)
わずか2個体の死殻標本が存在する(木村昭一, 未発表データ)。現時点では情報不足と評価された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。
35. オオマテガイ *Solen grandis* Dunker
内湾産貝類 無面目 マテガイ科 (国：リスト外)
伊勢湾湾口部ではかつて生息地があったが、現在生貝が全く見つからない。元々本県では個体数の少ない希少な種であった可能性もあるが、情報不足と評価された。
36. モモノハナ *Moerella hilaris* (Hanley)
内湾産貝類 ザルガイ目 ニッコウガイ科 (国：準絶滅危惧)
生息環境が少なく、元々本県では個体数の少ない希少な種であった可能性もある。現時点では情報不足と評価された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。
37. ナミノコ *Donax cuneatus* Linnaeus
内湾産貝類 ザルガイ目 フジノハナガイ科 (国：準絶滅危惧)
生息環境が少なく、元々本県では個体数の少ない希少な種であった可能性もある。現時点では情報不足と評価された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。
38. ハザクラ *Gari minor* (Deshayes)
内湾産貝類 ザルガイ目 シオサザナミ科 (国：準絶滅危惧)
生息記録および、その根拠の生貝標本が存在するとされていたが、検証結果は他種の標本であった。現時点で愛知県下の確実な生息情報がなく、今改訂で、本種は新たに情報不足と評価された。
39. キヌタアゲマキ *Solecurtus divaricatus* (Lischke)
内湾産貝類 ザルガイ目 キヌタアゲマキ科 (国：準絶滅危惧)
生息環境が少なく、元々本県では個体数の少ない希少な種であった可能性もある。現時点では情報不足と評価された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。
40. ネムグリガイ *Zachsia zenkewitschi* Bulatoff et Rjabtschikoff
内湾産貝類 オオノガイ目 フナクイムシ科 (国：リスト外)
伊勢湾、三河湾で生貝が採集されたが、正式な報告はない。本種の生息するアマモ場の詳細な調査が不足しており、今回は情報不足と評価された。
41. オオトリガイ *Lutraria maxima* Jonas
内湾産貝類 バカガイ上科 バカガイ科 (国：準絶滅危惧)
生息環境が少なく、元々本県では個体数の少ない希少な種であった可能性もある。また、外洋潮下帯の調査が不十分である。現時点では情報不足と評価された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。
42. カモジガイ *Lutraria rhynchaena* Jonas
内湾産貝類 バカガイ上科 バカガイ科 (国：準絶滅危惧)
生息環境が少なく、元々本県では個体数の少ない希少な種であった可能性もある。また、外洋潮下帯の調査が不十分である。現時点では情報不足と評価された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。
43. ユキガイ *Meropesta nicobarica* (Gmelin)
内湾産貝類 バカガイ上科 バカガイ科 (国：準絶滅危惧)
生息記録および、その根拠の生貝標本が存在するとされていたが、そのコレクションを検討した結果、本種の標本が存在しないことが判明した。従って、今改訂で、本種は新たに情報不足と評価された。
44. シオヤガイ *Anomalodiscus squamosus* (Linnaeus)
内湾産貝類 マルスダレガイ目 マルスダレガイ科 (国：準絶滅危惧)
生息記録および、その根拠の生貝標本が存在するとされていたが、そのコレクションを検討した結果、本種の標本が存在しないことが判明した。従って、今改訂で、本種は新たに情報不足と評価された。

45. ウスハマグリ *Aphrodora kurodai* (Matsubara)

内湾産貝類 マルスダレガイ目 マルスダレガイ科 (国：絶滅危惧Ⅰ類)

生息環境が少なく、元々本県では個体数の少ない希少な種であった可能性もある。また、外洋潮下帯の調査が不十分である。現時点では情報不足と評価された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。

(31～45. 木村昭一)

【国リストの種】

「国リスト」の種について、対象種が愛知県では絶滅危惧種（準絶滅危惧種、情報不足種を含む）と判断されなかった理由を以下に記述した。

1. エルベリギセル *Megalophaedusa aurantiaca moellendorffi* (Nordsieck)

陸産貝類 柄眼目 キセルガイ科 (国：情報不足)

県内では丘陵地から山間部に生息地点数、個体数共に多く、絶滅危惧種と評価されなかった。

2. オオギセル *Megalophaedusa martensi* (Martens)

陸産貝類 柄眼目 キセルガイ科 (国：準絶滅危惧)

県内では東三河山間部を中心に生息地点数、個体数共に多く、絶滅危惧種と評価されなかった。

3. オオウエキビ *Trochochlamys fraterna* (Pilsbry)

陸産貝類 柄眼目 シタラ科 (国：情報不足)

県内では丘陵地から山間部に生息地点数、個体数共に多く、絶滅危惧種と評価されなかった。

(1～3. 早瀬善正)

4. オオタニシ *Cipangopaludina japonica* (Martens)

淡水産貝類 タニシ上科 タニシ科 (国：準絶滅危惧)

県内では、丘陵地から山間部のため池に生息地点数、個体数共に多く、絶滅危惧種と評価されなかった。今後のモニタリングは必要。

5. ヤマトシジミ *Corbicula japonica* Prime

淡水産貝類 マルスダレガイ目 シジミ科 (国：準絶滅危惧)

県内では河口の汽水域に、生息地点数、個体数共に多く、絶滅危惧種と評価されなかった。ただし、汽水域にも侵入している移入種のカネツケシジミとの競合の可能性もあり、モニタリングは必要な種。

6. ツボミ *Patelloida conulus* (Dunker)

内湾産貝類 カサガイ目 コガモガイ (ユキノカサガイ) 科 (国：準絶滅危惧)

県内では内湾の干潟から転石地に生息地点数、個体数共に多く、生息環境も比較的多様であることから、絶滅危惧種と評価されなかった。

7. サキグロタマツメタ *Laguncula pulchella* Benson in Cantor

内湾産貝類 タマガイ上科 タマガイ科 (国：絶滅危惧Ⅰ類)

県内で確認される個体は移入個体。本来本県には分布しない種。

8. コケガラス *Modiolus moduloides* (Röding)

内湾産貝類 イガイ目 イガイ科 (国：準絶滅危惧)

県内で確認される個体（現在まで死殻のみ確認）は移入個体。本来本県には生息していなかった種と判断された。

9. オビクイ *Entodesma navicula* (A. Adams et Reeve)

内湾産貝類 ネリガイ目 サザナミガイ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)

県内では内湾から外洋の潮下帯に、生息地点、個体数共に多い。

10. クチバガイ *Coecella chinensis* (Deshayes)

内湾産貝類 バカガイ上科 チドリマスオ科 (国：準絶滅危惧)

県内では河口の汽水域、干潟の潮上帯付近に生息する。生息地点数、個体数共に多く、絶滅危惧種と評価されなかった。

11. ウネナシトマヤガイ *Neotrapezium liratum* (Reeve)

内湾産貝類 マルスダレガイ目 フナガタガイ科 (国：準絶滅危惧)

県内では河口域、内湾域の石の下面などに普通に確認される。生息域、個体数共に多く、絶滅危惧種と評価されなかった。

(4～11. 木村昭一)